0
機巧少女は傷つかない

石けんを泡立て、首筋に触れた瞬間、
汐が「ひゃあ！」と悲鳴をあげた。
「さっ、触るな変態！　馬鹿！」
「触んねーで、どうやって洗うんだよ」
「う!?　うぅ～！」

雷真の手をつかみ、
タンクトップの中へと導く。
雌猫の腹みたいにやわらかい。
感触が癖になり、
しばし、雷真はもみしだいた。

「おまえ……夜々なのか？」
敵がゆっくりと顔を上げる。
黒髪がさらっと流れて、
あらわになったその顔は――
確かに、相棒のものだった。

機巧少女（マシンドール）は傷つかない0
Facing"Shadow Moon"

海冬レイシ

MF文庫J

contents

Prologue そして二人は学び舎へ#1 p11
Chapter 1 監獄島 p27
Chapter 2 共犯者の日常 p70
Chapter 3 月下の純情 p111
Chapter 4 竜宮城にきたる者 p155
Chapter 5 信ずるがゆえに p190
Chapter 6 再会、いくつもの p229
Chapter 7 月の光と、その半分 p269
Epilogue そして二人は学び舎へ#2 p309

●るろお
編集●池本[illegible]

Prologue そして二人は学び舎へ #1

「悔しいっ……こんな男が……夜々の体を思い通りに……好き勝手して……」

美しい黒髪の乙女が、屈辱に頬を染めながら、あえぎあえぎ言った。
つぶらな眼は黒目がちで、しっとりと濡れている。眉は細く、鼻は小さい。唇は桜の花びらのようで、つつましくも華やかな、日本人形の美を体現している。
事実、彼女は人間ではなく、最高級の自動人形だ。
雪月花の〝月〟こと夜々。日本が世界に誇る名工、花柳斎の手による遺品である。
「たち、夜々は屈しません……体は許しても、心は……陥落できない……」
「……やめろ！　妙な言い方するな！」
……は顔をしかめて、声真はあわてた声を出した。
……を脱ぎ、両手で印を結んで、魔力を夜々に送り込んでいる。池に映った自分の……は、生い立ちのせいか、それとも必死なせいか、野犬のように荒っぽい。
赤羽雷真、弱冠十五歳。まだ駆け出しの人形使いだ。
二人がいるのは広々とした和風庭園。残暑の熱気が漂う、花柳斎硝子の屋敷で、魔術の訓練をしていた。

雷真は魔力を駆使して、夜々を意のままに操ろうとしている　だが、夜々はぎくしゃくと硬い動きをするだけで、雷真が望む動作はしてくれない

夜々は横目で雷真をにらみ、なじるように言った

「強制支配なんて外道です！　自動人形の気持ちを無視した蛮行です！」

「いや、まあ　俺もそう思うけどよ」

「夜々のこと、『相棒だ』って言ったくせに　嘘つき！」

ぐさり、と夜々の言葉が胸を刺す

「兄さまの嘘つき！」

妹の声が耳の奥に甦り、古傷がうずいてしまう。

込み上げる感傷を振り払い、雷真は拝むように言った。

「今日だけは我慢してくれ　強制支配くらいはできるようになっておけって、硝子さんのいいつけなんだ」

「だからって！　夜々の体を無理やり使って、卑猥なことをしようだなんて　！」

「してねえ！　これは真面目な鍛錬だ！　とっさにおまえを強制支配できなきゃ、実戦でおまえを壊しちまうかもしれねえし　」

自動人形は自律している。ゆえに、操者の魔力の届く範囲では、自分の判断で動くことができる　ただの木偶人形のように、細かく制御してやる必要はない。

だが、強制支配を用いれば、思い通りの操作が可能だ

たとえば、敵に致命的な魔術を使われたとき
後方にいる術者の方が、人形より先に危険を察知する。強制支配で夜々を操れば、言葉で注意喚起するより速く、危険を回避できるだろう
雷真は真顔になって、熱っぽく訴えた
「硝子さんはそこまで考えて、俺たちに鍛錬を命じたんだ。だから、我慢してくれ。もしおまえがやられちまったら、俺は　」
夜々は抵抗をやめ、頬を染めた
「ひょっとして　夜々のため　？」
「硝子さんに申し訳がたたねえ！」
びきっ、と夜々のこめかみに青筋が立った
だが、雷真は気付かず、ますます深刻な口調になる。
「ただでさえ穀潰しの居候だってのによ　万が一にもおまえを壊しちまったら、二度とここの敷居をまたげな——どうした夜々、そんな怖い顔を」
「貴方は　馬鹿ですーっ！」
未熟な強制支配を簡単に振りほどき、夜々は大地を蹴った。
土塀を上げて跳躍　屋根を飛び越え、どこかへ行ってしまう
人間離れした脚力だが、驚くには値しない　夜々が体内に宿す〈金剛力〉の魔術回路は、筋力や瞬発力を格段に高めることができる

雷真は首をひねった　夜々が怒った理由に見当がつかない
「何だよ、あいつ——何でキレたんだ？」
「ふふっ！　雷真ってば、ほんっと鈍いね～」
上から少女の笑い声が降ってくる
見上げると、夜々の妹——雪月花の〈花〉小紫が、大ぶりの枝に座っていた
姉妹だけあって、目鼻立ちは夜々に似ている。ただし、表情はまだ幼い
小紫は無邪気に笑って、
「そんなに鈍いと、いつか姉さまに殺されちゃうよ？」
「鈍いって——俺が？　どっちかって言うと俺、勘はいい方だろ？」
「すっごーく、鈍いよ　カバの方がまだ敏感だよ」
はっきり言われて、雷真は急に不安になった
（オレ？　俺って　鈍いの　か？）
自覚がないのが一番怖い
よほど不安げな顔に見えたのか、小紫は笑いながら飛び降りてきた
「じゃあ、教えてあげるね　夜々姉さまの気持ち」
「おう　頼む」
幼い顔に妙な色気をにじませて、ぴとっと雷真にしなだれかかる
「……何だよ？」

見てて　こうしてすりすり　ってするとね
猫が身をすり寄せるように、雷真の胸にほお擦りする　意味がわからず、されるがままになっていると、わずか数秒で、黒い影が降ってきた
どすんっと重たげな音を立て、夜々が庭に着地する。――戻ってきたようだ
夜々は極めて不機嫌な顔で、妹に説教を垂れた
「離れなさい小紫　人形の雪月花が昼日中から男とくっついているなんて、はしたないにもほどがあります　まして、そんな下品な男に」
小紫は満面の笑みを浮かべ、嬉しそうに雷真を見上げた
「とゆうわけ！　どお？　わかった？」
「うんっ？　何がっ？　え？」
わからない　雷真が戸惑っていると、小紫はさみしげに笑って、きびすを返した
「雷真にはもう――何を言っても無駄だね」
「おい、見捨てるな！　俺、見捨てられるようなことしたのか!?」
「貴方という人は――こっ、小紫まで毒牙にかけようだなんて――っ！」
「夜々は何にキレてんだ！　俺が何をした!?」
問答無用とばかり、夜々はがむしゃらな体当たりをかましてきた
襲われるのは慣れっこなので、きわどいながらも回避はできる
最初の突進は難なくかわした――のだが、夜々は庭石を蹴って反転し、追いすがってきた夜々の脚力に耐え切れず、庭石が真っ二つに割れてしまう
今日に限って、怒りが根深い　本気で雷真を殺すつもりなのか
……ず念仏を唱える雷真を、不吉の声が救った
「よさぬか夜々！　たわけ者！」
落雷のごとき一喝で、夜々は動きを止めた
首をすくめて、縁側を見る　雷真も恐る恐る、そちらを向いた
そこに――青白い銀髪の、麗しい乙女が立っていた
夜々より少し背が高く、大人びた風貌　表情は今日も凛として、厳しくも美しい
三姉妹の長女、雪月花のいろりだ
眉をきりきりと吊り上げて、いろりは夜々を叱った
「毎日毎日、どうして庭を荒らすのだ！　庭師の身にもなってみろ！」
叱られた夜々が小さくなる　夜々は傍若無人だが、この姉には頭が上がらない
「いやまあ、毎日あんだけ小言を言われてりゃな……」
姿勢が悪いの、言葉遣いが悪いの、いろりはずいぶん口やかましい　箸の上げ下ろしまで小言が飛ぶ　夜々が彼女を苦手に思うのも当然だろう　まして、戦闘能力においても姉の方が数段上――逆らったが最後、容赦ないおしおきが飛んでくる
しゅんとする夜々が気の毒になって、雷真は横から口を挟んだ
「叱らないでやってくれ　俺が夜々を怒らせたんだ」

夜々が顔を上げる。ぱあっと血色がよくなった気がした
だが、いろりは厳しく、叱るように言った
「甘やかさないでください雷真殿。それに、これは姉妹の問題です」
「わ、悪い」
「よいか夜々！ 庭師がくる前に、石を運び出しておけ！」
有無を言わせぬ口調で告げる。夜々はぷうと頬をふくらませたが、口答えはせず、庭の後片付けを始めた
雷真も手伝おうと思ったのだが、その前にいろりが言った
「雷真殿、鍛錬中のところすみませんが、主がお呼びです」
「俺に？ 何の話だ？」
「それは主におたずねください」
いろりが先に立って歩き出す。仕方なく、雷真も縁側に上がり、彼女に続いた
歩きながら、いろりの後ろ姿を眺める。
揺れる銀髪は美しいが、その美しさに拒絶されている気がする。
実は雷真も、いろりが苦手だ。彼女は礼儀正しいが、他人を寄せ付けない厳しさがある
冷然とした表情からは彼女の内面がうかがえない。喜怒哀楽がはっきりしているぶんだけ
まだしも夜々の方がわかりやすい。
そんなことを思いながら歩いていると、不意にいろりが足を止めた

庭の樹木に目をやる。先ほどとは別の樹上、茂る葉の中で、乙女が涼んでいた
いろりは口もとに手を添えて、小声で「小紫！」と呼びかけた。
小紫がぴょこんっと葉のあいだから顔を出す
「なあに？」
「すまぬが、夜々を手伝ってやってくれ」
「はーい！」
「『はい』は一度だ」
「はーい」
ぺろっと舌を出して、夜々の方へ跳んでいく
妹たちが仲良く片付けを始めるのを見て、いろりはかすかに――微笑んだ
滅多に咲かない花が、思いがけず咲いたような、そんな感覚。
いろりはすぐに厳しい表情に戻り、縁側を歩き出す
雷真は意外の念に打たれ、同時にひどく腑に落ちて、ひとりうなずいた
そうか……いろりは
本当は、夜々をとても大切に思っているのだ
ただし、几帳面で四角四面な性格――あるいは姉の責任感――が災いして、その気持ちがまったく伝わっていない。
小紫も夜々と同じくらい奔放だが、そこは末っ子の要領のよさ。持ち前の愛嬌や勘の鋭

さに助けられ、叱られる頻度は少ない　だがそれは、夜々にしてみれば、「姉さまは小紫には甘い＝私にだけ厳しい」ということになる。
人間の兄弟と同じだ　本当に、何から何まで。
〈きょうだい、か　〉
炎の臭気を嗅いだ気がして、雷真は無意識に顔をしかめた
人肉が焦げ、家屋が焼ける——あの悪臭は、今も鼻腔にこびりついている
網膜に甦るのは紅蓮の炎。親族たちの死体や、人形の残骸や、そして
救えなかった、撫子の姿。
暑さが吹き飛ぶくらいの、強烈な怒りが込み上げる。
いろりは察したようだが、ちらりと視線を寄越しただけで、何も言わなかった。

廊下を行くことしばし、奥の座敷、硝子の居室にたどり着いた
半年と少し前のことを、雷真は懐かしく思い出す
ここは、あの冬の日、硝子に拾われた雷真が押し入るように入った部屋だ
無遠慮に硝子に迫る雷真を、いろりの〈氷〉が阻んだ　夜々は今より雷真を嫌っていて、雷真に使われることを頑なに拒否していた。
〈最近はまあ、ちょっとはマシになった——な〉
数か月前に起きた、箱根での一件が、二人の関係を少し変えている　近頃の夜々は鍛錬

にも付き合ってくれるし、雷真の稽込みを嫌うこともなくなった
あれから季節は変わり、今はもう夏も終わりだ
座敷のふすまは開放され　涼しい風が吹き抜けている
いろりはその前に膝をつき、控えて報告した
「——雷真殿をお連れしました」
ややあって、かすかな返事が聞こえてきた。
何と言ったのかわからない　だが、いろりには聞こえたようで、
とうぞ、雷真殿」
あきれ顔で巾を示した。雷真は言われるまま、部屋に入る。
畳を踏みしめて、奥へと進む　大広間の突き当たりは　段高くなっていて、公家の御所を思わせるつくり　御簾は巻き上げられ、硝子の姿が見えている
生きながらにして既に伝説となった人形師　彼女の作品は美術品にたとえられ、途方もない高値がつく
その素顔は意外にも若い女性で、ぞっとするほど色気があり、同時に真冬のような、蠱惑な気配もまとっている　——見でなければ。
もう夏も盛りをすぎたというのに、今日も硝子はだれきっていた
畳の上に横たわり、だらしなく手足を投げ出している。小さな風車の機巧で涼をとっているか、大して涼しくないらしく　はだけた胸元に汗の玉が光っていた。仰向けになって

[illegible]つぶれない張りのある双肩を見て、雷真は赤面した
硝子は億劫そうに身を起こし、脇息を引き寄せた
さらりという衣擦れの音まで艶かしい　そっと着物の合わせを引き寄せ、こぼれ落ちそ[illegible]らみを包み直す
思わず凝視してしまう。あからさまな視線に気付いて、硝子はわざとらしく胸を開き、[illegible]っぽく雷真を見上げた。
「無粋よ、坊や。そんな露骨に見つめて
雷真はあわてて畏まり、その場に正座して反省した。
硝子は煙草盆を手繰り寄せ、長い煙管に煙草を詰め始めた。
火を入れ、吸い口をくわえる。
さんさんと日差しが降りそそぐ庭を眺め、ゆったりと一服。
虫の声がうるさい　が、極めて静寂なひとときだ
硝子の意図がわからぬまま、雷真は身を硬くして言葉を待つ
一体、何の用件で呼ばれたのか。理由のわからない不安で尻が落ち着かない　実の父に勘当を言い渡されたときでさえ、こんなに緊張しなかった
十分か、二〇分か　硝子は二度も煙草を入れ替え、さんさん雷真を焦らしてから、ようやく口を開いた
[illegible]い報せよ　そして、とても悪い報せ　——どっちから聞きたい？」

謎かけのような問い。雷真は少し考えてから、答えを告げた
「良い報せだ」
「坊やのたずねびとが見つかったわ」
「――大今か！」
門の仇敵！　ついに、居場所がわかった！
体が熱くなる。火がついたように
殺意に身を委ね、荒んだ気持ちで、うっすら微笑む。
「……ありがたい話だぜ。それのどこが悪い報せなんだ？」
硝子は無言で雷真を見据えた　機巧眼帯のレンズ越しに眼光が刺さる
ややあって、ため息をつく
「場所が悪いわ　地球の反対側、英国の〈機巧都市〉リヴァプールよ」
「英吉利――」
英国、それも長旅になる。海を渡るにも金がいるし、言葉もわからない　リヴァプール
という地名すら、雷真は初めて聞いた。
内心の狼狽を隠し、雷真は立ち上がった。
そうとわかりゃ、早速、旅行の準備をする」
「準備？　何を？　何のために？　どうやって行くつもり？」
「何とかするさ。密航したっていいし、いざとなりゃ、泳いででも行く」

ふっと硝子が噴き出したので　雷真も恥ずかしくなった
「先走らないで　あわてる小僧はもらいが少ないって言うでしょう？」
返す言葉もない。雷真は再びその場に腰を下ろした
「彼がいるのは魔術世界の最高学府〈ヴァルプルギス王立機巧学院〉」
「学院……魔術師の学校か？　そこに入ればいいのか？」
「坊や、帝国大学に入れる？」
「東人のことを言ってるなら、自慢じゃねえが、百回生まれ変わっても無理だ」
「なら無理ね。学力があり、魔術の才もある、そんな子たちの学校だもの」
言葉を失う　復讐のためには何でもするつもりだったし、殺し合いや魔術修行の覚悟は
決めていたが、まさか勉学の壁が立ちはだかろうとは
「[illegible]ちゃ勉強すれば[illegible]！」
「[illegible]な　奨学金がもらえるくらいの成績を修めれば、後ろ盾がなくとも入学で
[illegible]てなければ――多額の学費がいる。留学のための費用も。名士の推薦
[illegible]もちろん　よほどの御大尽さまでなければ駄目よ？」
「資金の壁だ　自分でもわかるくらい、雷真は情けない顔になった。
「じゃあ、どうすりゃいいんだよ[illegible]」
「そこで、いい報せよ　軍が今、英国行きの工作員を探しているの　[illegible]七歳以下の、才気
あふれる傀儡師をね」

日本軍の工作員――話の流れから言って、学院に潜り込ませる人員か！
雷真は十五歳、年齢面での条件は満たしている。
「わかった 俺は軍の密偵になる！」
「軍が欲しいのは『才気あふれる』傀儡師よ？」
「才なんさ、ない。だが、軍のお偉いさんを騙してでも、なってやる」
硝子の綺麗な唇が、三日月の形を描いた
「――いい答え それじゃ早速、でかける準備をなさい
「どこへ行くんだ？」
「箱根を越えて、静岡の兵舎に行ってもらうわ」
――ぴんとくる 数か月前にも、雷真は夜々と二人で〈お使い〉に出された
そのときは途中で雷真が重傷を負い、屋敷に戻ってきてしまったのだが
「確か、榊中将ってのがいらっしゃるんだったな そこに何があるんだ？」
「陸軍幼学校」
「が、がっこう!?」
硝子はいたずらっぽい眼をして、眼差しを雷真に向けた
「夜々と二人、お勉強をしてらっしゃい！

Chapter 1 監獄島

それは いつともしれない、遠い過去の記憶――

冬の夜。からっ風が吹く中を、二人の少女が歩いていた
かつての武家屋敷が並ぶ古びた通り 少女たちは白い息を吐きながら、下駄をからころ鳴らして、夜道を急いでいる。
ふと 年下の方の少女が、はしゃいだ様子で駆け出した
「見て、姉さん。半分のお月さま！」
……す。確かにそこには、見事な半月が浮かんでいた
「……して月は欠けるんだろ？ もう半分はどこに行っちゃったの？」
少女は不思議そうに小首を傾けた
提灯に照らされた顔は 白粉の上からでもわかるほど、寒さで赤くなっている
年上の少女は微笑んで、

どこにも行ってないよ　見えないだけで、ちゃんと残ってるんだから」
「そうなの？」
「そうよ。月はどんなに頑張っても、半分は陰のままなのよ」
「え　だって、満月のときは？」
「あちら側――背中の方が陰なの」
自分のマフラーを半分ほどき、年下の少女に巻きつけてやる
「――あったかい」
年下の少女はマフラーに顔をうずめ、嬉しそうに笑った
その鼻先を、ひらりと小さな雪片が舞う
「雪！　姐さん、雪だ！」
「ほんと。綺麗ねえ」
ひらり　ひらりと音もなく、夜風に舞る雪の華
半分欠けた月が、雪を仄に照らしている　その幽玄な光景をうっとりと眺め、年下の少女は幸せそうにつぶやいた。
「わたし、この国が好き。お月さまは綺麗だし、ときどきは雪も降るんだもの」
年上の少女はまばたきをして、くすくす笑い出した。
「そんな国、ほかにもたくさんあるじゃないの」
だけど、姐さんはこの国にしかいないわ！」

「まあ　変な子！」
笑いながら、年下の少女の肩を抱く
二人は本当の姉妹のように、互いに肩を寄せ合って、夜の花街へと消えて行く　これから座敷に上がり、酔客に舞を見せ、三味線を聴かせるのだ。
二人はまだ若く、そして幼く、未来というものをまるで疑っていない
[illegible]れるものだと、無邪気に思い込んでいた。

[illegible]

そもそも夜々は、斎真のことなんて、好きでも何でもなかったのだ。
むしろ嫌いです！　きっ、嫌いでした！」
陸蒸気――汽車の座席におさまって、夜々はむかむかしていた
となりには斎真がいて、窓の外を眺めている。
外はいい陽気で、青空はどこまでも澄み渡っていた
斎真の横顔は決然としている。待ち受ける試練に想いを馳せているのだろう　思わず見惚れてしまって――夜々はあわてて顔を背けた
どきどきして胸が苦しい　何と言っても、「二人っきりで」旅行なのだ

「どうした夜々。具合でも悪いのか？」
「そっ、そんなことありません！　何ですかいきなり！」
「怒るなよ。熱っぽいから心配しただけだ。……つか、列車で暴力沙汰はやめてくれよな。脱線なんかした日にゃ、大惨事だぞ」
夜々は絶句した。あまりと言えば、あまりの言葉ではないか。
曲がりなりにもときめいている乙女に向かって、こんな言いざまをするなんて。雷真の中で自分がどんな扱いなのかがわかり、たちまち破壊衝動が込み上げてきた。
「夜々のことを……鬼か化け物みたいに……！」
「だから落ち着け！　それをやめろって言ってんの！」
雷真の首を締めようとして、ふと手を止める。
雷真の後ろに、青々とした箱根の山が見えている。
——あれは初夏、雷真と夜々が戦った場所だ。
夜々は〈金剛力〉を持つ禁忌人形。大木をなぎ倒し、山を崩す力がある。対する雷真はまだ素人同然であり、今以上に技術がなかった。
普通に考えれば、雷真に勝ち目はなかった。そのはずだったのだが。
何だか嬉しい気分になって、夜々はくすっと笑った。
「ど、どうした？　何で急に笑い出したんだっ？」
不気味に思ったのか、雷真が狼狽する。夜々はつんとそっぽを向いて、
「別に。箱根まできたなと思っただけです」
「……ひょっとして、俺に負けた恨みを晴らそうとか——」
「……こんなこと考えません！　夜々を何だと思って〜〜〜〜っ」
「わい！　だからそれをやめてくれって——やめろおおぉおおお！」
結局は首を吊り上げられ、ぶくぶくと泡を噴く羽目になる。
のびた雷真を放り出し、夜々はひどく悲しい気分でうつむいた。
違う。そうじゃない。こんなこと、本当はしたくない。
暴力をふるっても、もっと怖れられ、嫌われるだけだ。
だけど——どうしていいか、わからないのだ。
自分でもどうしようもないくらい、いらだたしくて、苦しくて、切なくなる。
下駄を脱ぎ、座席の上で膝を抱える。そうしているうちに、列車は箱根を通り過ぎて、静岡は浜松の方へと進んで行く。
潮の香りが車内に漂い出す頃、乗客から小さな歓声があがった。
山とは反対、海側の窓から、大きな〈[illegible]〉が見えた。
白い建造物が、翡翠色の太平洋上で、晩夏の日差しを弾き返している。
雷真が身を乗り出してきて、興味深そうにつぶやいた。
「ほぉ……えほっ……あれがうわさの学校か。何であんなとこに建ててんだ？」
「……さあ。夜々にもわかりませんけど」

「ま、わきゃわかることたな。そろそろ降りる準備をしようぜ」
「あ、はい」
素直にうなずき、風呂敷包みを膝にのせる
〈この人と、お泊まり♡〉
箱根のときは感じなかった、胸の高鳴りを覚える。思わずゆるんでしまう唇をきゅっと引き結び、夜々はいそいそと身支度をした

―数分後、雷真と夜々は〈大ヶ嶽〉駅に降り立った
駅舎はまだ新しく、ニスの上からでも木材の白さが目立つ　デッキ状に組まれた足場が、洋上の〈箱〉に向かって一直線に伸びていた
問題の箱状建造物は、はるかに遠い　陸から　キロは離れている。
桟橋――のようなものは、途中で水没し、途切れている　だが、海中でつながっているらしい。道のありかを示すように、大鳥居がいくつも海上に立ち並んでいた。
厳島神社に似た風情だが、肝心の建物にあのような美しさがない　〈箱〉は見るからに無骨で、監獄と言った方がしっくりくる
雷真はあたりを見回し、首を傾げた。
「歩いてしゃ渡れそうもねえな　途中からは泳げ、ってことか？
ひょっとして、連絡船でも出てるんじゃ」

「なるほど　とすると、近くに船着場があるのか？」
　人で船を探していると、唐突に海面が盛り上がり、何かが打ち上がってきた
紡錘形の巨体が太陽を覆い隠す　影法師――いや、海坊主か？
ぽかんと見上げる夜々の横で、雷真はすぐさま反応し、夜々を抱えて飛びのいた
　人が立っていた場所に、黒い巨体が降ってくる
それは、大型の水棲哺乳類に似ていた。
シルエットはシャチそのもの　全長はゆうに六メートルはある　ただし、本物のシャチではない　ボディの表面は流動的で、火炎のように揺らめいている
「あれは、〈瘴気〉か？」
雷真の眼光が鋭くなる　夜々は記憶の書棚を引っ繰り返した　瘴気とは魔力が変質したもので、呪いの媒質になったりする　とか何とか
シャチの背に、少年が乗っていた
　瞬、少女かと思う　長い髪を後頭部で束ね、肌は白く、線が細い　眉目秀麗と言うのか　目鼻立ちは繊細で、女性的なたおやかさがあった
ただ、軍服に包まれた体はやはり少年のものだ　腕回りも肩幅も骨っぽく、締まった胸板も少年らしい　少年は雷真を鋭く一瞥し、威圧的に言った
「きみは誰だ？　ここで何をしている？」
「――ご挨拶だな　こいつに言われてきたんだぜ？

雷真はもの怖じせず、あっけらかんと答えた。シャチの巨体にも動じていない。
少年は眉をひそめ、さらにたずねた。
「は? きみが赤金雷真か?」
「アカガネ? 誰のこ——」
早速ボロを出す雷真を、夜々は肘打ちで黙らせた。声を潜めて、耳元で叱る。
「ここまで馬鹿なんですか! 硝子が用意した偽名でしょう!」
「そ、そうだったな——悪い」
素性を明らかにするのは具合が悪いので、〈赤金〉姓で通すことになっている。
「そう、俺がアカガネだ。おまえ、何で俺のこと知ってんだ?」
逆に問われ、少年は不機嫌そうに顔をゆがめた。
「——きみのことなど知らない。名前を知っていたのは、事前に通告を受けていたからだ。ぼくは加賀見汐——きみと同じ、兵舎の訓練隊員だ」
「——なら、同輩ってことだよな? よろしくな、汐!」
手を上げて挨拶する。だが、汐と名乗った少年はにこりともせず、
「よろしくするつもりはない。勝手にやればいい」
「何だよ、つれねえな」
「潮が引くまでここで待て——教官からの伝言だ。確かに伝えたぞ」
それだけ言うと、汐はシャチを回頭させ、再び戻ろうとした。

「おい、待てよ。それ、自動人形なんだろ？　そんなでかい相棒がいるんなら、乗せてってくれてもいいだろ」

「断る」

「──なら、少し付き合えよ。あの箱のこと、いろいろ教えてくれ」

「それも、断る。ぼくは忙しい」

夜々の肩から魔力が飛ぶ。それだけでシャチは力を得て、海面をすべって行った。

あっと言う間に見えなくなる。魔術の効果なのか、人形の基本性能なのかは知らないが、凄まじく速い。雷真は感心した様子で、

「すげえな、あいつ」

てのひらを向けなくても、人形に魔力を送れるのか。

印を結んだり解いたりしながら、早速、自分でも試してみている。──どうやら、少年の態度を少しも怒っていない。一方の夜々は、かなりむかむかしていた。

（失礼な子どもです！　雷真にあんな態度を取るなんて──！）

数か月前の夜々の方がよほどひどかったのだが、自分のことは棚に上げている。

ぷんぷん怒っていると、横からやわらかな声が聞こえた。

「あらあら、汐さんったら、困った子ねえ」

完全に不意打ちだったので、夜々は飛び上がって驚いた。

（いつの間に、こんな──手が届きそうな距離に！）

夜々の背後に、美しい女性が立っている。

年の頃は二十代。[illegible]品があり、ほんのり[illegible]が可憐だ。亜麻色の髪をゆったり三つ編みにして、肩から垂らしていた。

服装は垢抜けていて、胸元の大きくあいたワンピースに、編んだサンダル。露出は比較的大胆だが、みだらな感じはせず、むしろ健康的に思えた。

女性は夜々と雷真を交互に見て、ふわっと優しく微笑んだ。

「赤羽雷真さんね。遠くから、お疲れさま！」

両手で雷真の手を包む。二の腕におしつぶされて、二つのふくらみが変形した。

そこに雷真の目が吸い寄せられるのを、もちろん夜々は見逃さない。

（またそんなところを見て！　いやらしい──っ）

「お姉さんと一緒に引き潮を待ちましょうね。近くに茶屋があるのよぉ♪」

[illegible]ほや〜っとした雰囲気が優しくて、無条件に警戒をゆるめそうになる。この包容力[illegible]のなさが、彼女の接近に気付かなかった理由かもしれない。

「さあさ、ご案内しましょうね♪」

「ああ──って、待て待て！　あんたは誰だ？　何者だ？」

「あらあら、そうでした～」

照れくさそうに手を振って、自己紹介する。

「私は桜塚るり。るりでいいわよ、雷真さん」

「るりさんか。何をしてる人なんだ？」

「……そうね。ひと言で言うと、寮母と言うか、監守と言うか」
「――今、『監守』って言ったのか？」
雷真の声が硬くなる。夜々も驚いてるりを見た。
るりは否定せず、それどころか意味ありげに微笑んで、芝居がかった礼をした。
「ようこそ陸軍御学校、人ケ嶽兵舎へ。あそこは通称――」
すいっと手を海に向け、観光地の案内人のように、洋上の〈箱〉を示す。
「監獄島よ」

3

夕刻、潮が引き始めるのを待って、るりは茶屋を出た。
海鳥の声が響く中、雷真を大桟橋へと案内する。
引き潮で露出した足場が、まっすぐ〈箱〉まで続いている。見た目は不安だが、構造は頑丈で、道幅も広く、車がすれ違えるほどの広さがあった。
るり、雷真、夜々の順番で、桟橋を歩いて渡る。
（何が何でも、密偵になってやる）
雷真はこぶしを握る。風呂敷包みの重さを忘れるくらい、気合が入っていた。
相棒が遅れがちなのに気付いて振り向くと、夜々は夕陽に目を奪われていた。
言葉を[illegible]……こんな[illegible]夕焼けを見[illegible]……普段目や
ばかりの顔が、今だけはあどけなく……心から美しいと思えた。
「英吉利の夕陽は、どんなだろうな？」
「……わかりません。でも……見たいです」
「なら、見に行こうぜ。俺たちで」
「はい！」
「あらあら、二人とも自信まんまんね」
口元を手で隠し、るりが上品に笑った。
「でも、簡単にはいかないわよぉ？　この監獄島には五十人――雷真さんを入れて五十一人の訓練隊員がいるの。その中から選ばれるのはたったの一人」
そう――密偵の任を与えられるのは、たった一人だ。
「本職の軍人さんは大勢行くけれど、学生さんは一人で十分――お金もたくさんかかるし、そうそう送っても仕方ないものね」
「まあ……そうだろうけどさ」
希望者全員を送ってくれてもいいのに、とは思う。
「でも、周りは俺と同じくらいの年なんだろ？　何とかなるさ」
「……色んな人が集たと思うわよ。軍に名を売ろうっている人形使いの流派や家系、軍関係者の子息なんかが大勢集っているから」

「へぇ……たとえば、いざなぎ一門とか？」

「あら、詳しいのね。感心感心♪」

るりが雷真の頭をなでる。夜々も目を丸くして雷真を見た。雷真にその手の知識はないと思っていたのだろう。実際、疎い方だという自覚もある。ただし、いざなぎ一門だけは別なのだ。雷真とは、決して浅くない縁がある。

夜々は不審そうに、

「意外に詳しいですね。そう言えば、さっきも瘴気がどうとかって」

「へ、別に。いざなぎ一門くらい誰でも知ってるだろ。日本傀儡の最大派閥だし、傍流もごまんとある。最近じゃ、自動人形を使う分派も多いって言うしな」

もともとは魔法生物〈式神〉の使役を行う流派で、機巧魔術以前の「古い魔術」を守っている系譜だ。だが、これも時代の流れか、自動人形に鞍替えする家もあるという。優れた自動人形を用いれば、才能の差をかなり埋められる。

るりはうなずいて、雷真の問いを肯定した。

「いざなぎ流の使い手もいるわ。手強いわよぉ？」

「そうか……そりゃ厄介だが、なるようになるさ」

「あら、余裕ね。雷真さんもいいところの出？　それとも、お人形さんの性能がもの凄いのかしら？」

ちらっと夜々を見やる。確かに夜々は日本一の人形だ。しかし――

余裕といえるほどのものは[illegible]

自信も、実力もない。

（だが、怯んでいるわけにはいかないのだ）

（あいつを殺そうって奴が、こんなところでビビってられねえ）

どのみち、ここで脱落するようならば、仇に勝てるはずもない。

さらに歩き続けること数分、巨大な〈箱〉が近付いてきた。

間近で見ると本当に大きい。木材を精密に組み合わせ、要所を金属の骨組みで補強した、見るからに頑強そうな城塞だ。

「立派でしょう？　西洋の建築技術を取り入れて、宮大工さんが築いたの。高さ十米、一辺あたり百米四方。世界最大級の木造建築ね」

「十メートル？　そんなもん……なのか？」

比較対照物がないせいか、もっと高く感じる。

「監獄島って言うけどよ、これ島か？　陣地が全然見えねえぞ」

「そうね……島って言うより、方舟みたいなものね」

「方舟？　完全な人工島――ってことか？」

「よくできました♡」

雷真の頬が引きつった。

（海に浮かぶ人工島……連絡手段は桟橋のみで、引き潮のときしか渡れない）

たかが軍学校に、どうしてこんな大掛かりな設備が必要なのか。そもそも、野戦や行軍の訓練はどうするのか。陸地に兵舎を置いた方が、よほど便利なはずだ。
不気味なまでの閉鎖空間。正直、嫌な予感しかしない。
考えているうちに、桟橋の先端に達した
箱から跳ね橋が下りてきて、桟橋と内部をつないでくれる。
るりはてくてくと中へ入って行く。雷真と夜々も覚悟を決め、その後に続いた
内部は暗く、一瞬、視力を奪われた
目が慣れるにつれ、険険な内部構造がわかってくる。
左右の高い壁に、いくつも銃眼があいている。侵入者を蜂の巣にするためだ　天井にはサレの浮いたトゲトゲ。明らかに〈吊り天井〉だろう
銃眼の通路を抜け、ホールに入ったところで、るりが警告した。
「ここ、手すりがないから気をつけてね」
ホールだと思った場所は、文字通りの〈穴〉で、中央の床がまるまる抜けていた。天井はなく、青空がのぞいている　眼下は運動場になっていて、上のグラウンドがある。グラウンドは明らかに海抜ゼロ以下、一〇メートルは下だろう
先ほどの通路で銃撃にさらされ、あわてて全力疾走すると、ここから飛び降りることになるらしい
夜々が小さく身震いする　建物全体に満ちる悪意を感じ取ったようだ

「あ、奥に行きましょうね〜♪
るりは相変わらず、ぽやぽやした空気をまとっている　その明るさがひどく不気味だ
雷真は寒気を感じつつ、るりに続いて人穴を迂回し、奥へと向かった
どこからか、うめき声のようなものが響いてくる
〈すすり泣き？〉
誰かが泣いているのか　血の臭いが鼻についたような気がして、雷真の首筋にびっしりと鳥肌が立った。夜々も真っ青になり、ぎゅっと雷真の上着をつかむ。
気持ちはわかる　雷真は苦笑しつつ、るりに言った
「なるほど、こいつは確かに〈監獄〉だな　気が滅入りそうなところだぜ」
「あら、住めば都よぉ？」
「そいつは言えねえな　湿気もひでえし、血生臭えし」
「まじめに言うと、厳しいところもあるわ　軍学校ですものね」
「それでも、もっと綺麗な場所を想像してたよ。新しいんだろ、ここ」
「そう　最新の教育理論に基づいて建てられたの」
「この将来が心配になるな。で、俺は今、どこに案内されてるんだ？」
「あらあら　お姉さん、ちゃんと言ったわよぉ？」
るりはにこやかに笑って、突き当たりの扉に手を触れた。
「――――そ神様と言いましょう――絶対の君臨者であり、規律の制定者、貴く

子も黙る人血鬼、その名も榊中将のお部屋です♡」

るりが触れた扉には〈監督室〉という表札がかかっていた

つまり——

こんな悪趣味な建物を建造した張本人と、いきなりのご対面というわけだ

「言ってねえだろ　初耳だぜ、お姉さん」

「あら　そうだったかしら～？」

テキトーだ。るりは心の準備もさせてくれず、いきなり扉をノックした。

『入れ』

くぐもった返事がある　分厚い扉越しだと言うのに、重い迫力が伝わってきた。

身震いをひとつ。るりに勧められるまま、雷真はノブをひねった

扉を開けた瞬間、強烈な魔力におしつぶされそうになる。

未熟な雷真でさえわかる。この威圧感——恐るべき魔術師だ！

ソファとローテーブルの向こうに執務机があり、巨漢の軍人が座っていた

机に軍靴を投げ出し、椅子の上でふんぞり返っている。髪にも髭にも白い毛が交じっているが、肉体は若々しく、軍服におさまりきらない筋肉が見て取れた。軍人と言うより、海の荒くれ者と言われた方がしっくりくる

日本人にしては彫りが深く、眼光はこちらの足がすくむほど。無造作につかんだ日本刀の鞘から、今にも白刃が飛び出しそうな気がした

つまりこれが　榊中将　というわけか

「きたな、硝子んとこの餓鬼か。——座れ！」

獅子のうなり声のような命令が飛ぶ。夜々がびくっと首をすくめた。

二人がソファに座ると、中将も執務机から離れ、雷真の対面に腰を下ろした。

（でけえ　！）

そんなはずはないのだが、体感では二メートルを超す巨躯に感じる　あるいは魔術師としての格の違いが、視覚にまで影響を与えているのか

中将は射すくめるような眼で雷真を見た。

ここで萎縮しては、後の評価に響くかもしれない。雷真は意地になって視線を受け止めた——が、目元が痙攣してしまうのは、自分の意志ではどうにもならない

たっぷり一分。値踏みするように雷真をにらんだ後で、中将は口を開いた。

「硝子から、話は聞いているだろうな？」

呼び捨てかよ、と思ったが、雷真は素直にうなずいた

ふっ、と中将の口元がゆるんだ。

「あのあばずれ、健勝のようだな　どうせだらけておるのだろう」

——言葉通りの悪罵ではない　語調に親しみのようなものを感じた

何となく、面白くない　むかっ腹が立つ

夜々も同じ気持ちなのか、怒ったような目を雷真に向けていた。

――って、アレ？　俺？　俺をにらむのか――。
二年後、英吉利の魔術学校にて〈夜会〉が催される
野太い声で説明が続く　雷真はあわてて中将に向き直った
「魔術も、機巧も、使い手も、各国選りすぐりのものが集まり、その世代で最強の魔術師を決める催した　魔王、すなわちワイズマンをな
ワイズマン　ン」
世界は既に、〈戦争の世紀　に突入している」
ぞっとするような宣告だ　雷真はごくりと唾を飲み下した
「誰か支配し、誰が支配されるのかを決める戦いだ　無論、日の本は世界帝国となる――
そうでなくてはならない　小僧、そのためには何がいる？
試されている　頭脳には自信がなかったので、雷真は簡潔に答えた
力
「――そうだ　あいにく、魔王になれるほどの餓鬼はこの国にはいない　いや、　人いるにはいるが、とても英吉利には遣れん
その　人が誰なのか、雷真は直感した。
雷真と同じ年頃ながら、強大な魔性を生まれ持った才女――
いざなぎ　門の跡目を継ぐ乙女、一門自輪た
か　彼女は単独の姫君でもある　戦争が始まる……という……ときに、地球の反対側に派遣

そして　も　人は――いた
人形てい　う　おかげで、そちらも雷のことか理解できた
赤羽天全　傀儡師にして人形師たる本物の天才　赤羽　門を滅ぼした仇敵――
雷真の兄だ
中将は丸太のような腕を組み、さらに言葉を継いだ
日本軍が魔王を得ることは叶わん　畢竟、軍が求める力も魔王ではない　任務は夜会の突破ではなく――
「諜謀――か？
瞬　中将の眼の奥に、面白がるような色が浮かんだ
こった　工作員を送り、重大な軍務に就かせる
何を探るんだ？」
一転、中将の眼が鋭くなった
「餓鬼の知ったことではないわ！
雷真は閉口した　すぐに機嫌を損ねる　たから、偉い人と話すのは苦手なのだ
か月後、ここで工作員の人選を行う
中将はもとの口調に戻　し、説明を続けた
り選抜された者　もっとも適正のある者が英吉利に渡り、学院に潜入するのだ

へ　りぬもせいぜい、将了の顔をつぶさぬようにな。話は以上だ、行け！」
「待ってくれ　もっと詳しく――
出し抜けに、中将がテーブルを蹴った
がっしりとしたテーブルが、紙細工のように軽く飛び、雷真のすねを強打した
あまりの激痛に声が出ない　骨折したんじゃないかと思う。少なくとも、確実に青アザ
になったはずだ。
非難がましい目を中将に向ける　だが、中将は眼中にないといった風情で、
「俺が行けと言ったら、行け。それがここの軍規だ」
「――スミマセンデシタ　行くぞ、夜々」
相棒をうながし、自らも立ち上がる　激しい痛みを感じたが、意地でも足は引きずらず、
顔にも出さず、雷真は大またで監督室を出た
扉を閉める直前、背後から中将の声が飛んできた。
「本日これより夜間訓練だ　ここを出たら、教練場へ向かえ！」
「――わかった」
「わかった、だと？」
「ワカリマシタ！」
背筋を伸ばして返事をする。本当に、心から、偉い人は苦手だ
一礼して扉を閉める。中将の姿が隠れると、雷真はどっと脱力した。見れば、夜々も同

じように息をついている
雷真も夜々も、基本的には恐れ知らずの性格だ　その二人が、そろって緊張してしまう
ほど、中将は強大な魔力の持ち主だった
「あの……足、大丈夫ですか？」
「ああ、折れてはいない　しばらく痛えだろうけど
先が思いやられる　たが、確かに、仇に通じる足がかりを得た。
ふっと笑いが込み上げる　武者震いを感じながら、雷真は相棒に言った
「今の話、聞いたろ　工作員になりゃ、ちゃんと英吉利の学校に行けるんだ
しかも、選抜するって……貴方が選ばれるかどうかは、わかりません
きっと選ばれる　何せ俺には、日本一の自動人形がついてるからな」
夜々は目を見張り　それからかすかに表情をやわらげ、うなずいた
雷真は湿った廊下を見回し、るりの姿を探した。
「るりさん、いねえな　どうすりゃいいんだ、これから？」
中将閣下は、夜間訓練があるとおっしゃってましたけど
そういや、教練場に行けって言ったな　教練場ってのは、こっちか？」
直感を頼りに、狭い通路を行きつ戻りつ、奥へと進む
フロアを何階か降りたところで、大勢が集まっている気配を感じた
先ほど吹き抜けの上から見えたグラウンド――どうやらそこが〈教練場〉らしい。

何となく忍び足になって、ひょいっとそちらに首を出す。その途端、
「蛆虫野郎が！　何をモタモタしてやがる！」
いきなり怒声が飛んできて、雷真と夜々は同時に首を引っ込めた

4

正直なところ、夜々はもう、きたことを後悔していた
榊中将も大概だったが、教練場で待ち構えていた中年男も、夜々が嫌いなタイプの人間だった　もともと夜々は人間が嫌いなのだ。その上、ここは暗くて、寒くて、感じが悪い
もう　私だって、こんなところにいたくない
（でも、夜々はこの人のお人形です）
雷真のために存在する。雷真が行くと決めた以上、火の中だろうが、水の中だろうが、感じの悪い軍学校だろうが、どこまでもついていく
「愚図が！　とっとと入ってこい！」
再び怒声が浴びせられる。榊中将のような殺気はないが、代わりに音量がとんでもない
鼓膜をびりびり揺さぶられ、夜々は目を回しそうになった
教練場では、九十人超の少年たちと、彼らの自動人形が整列していた
少年たちは全員が野戦服を着て、〈休め〉の姿勢で待機している　訓練の賜物か、勝手な行動は取らず　だいを振り回したのは　ほんの数名だけ
その数名に、容赦なく教官の叱責が飛んだ
「糞が！　おい蛆虫！　誰がよそ見をしていいと言った!?」
まさに大砲。よろめくほどの怒鳴り声だ。あるいは声が魔力を帯びているのか
教官は殺人を思わせる強面で、中将に劣らす見事な体躯の持ち主だった　年齢は四十過ぎ、鍛え上げた体は輓馬のようにたくましく、〈精神注入〉と彫り込まれた、赤茶けた木刀をぶら下げている
教官は雷真のなりを眺め、背中の風呂敷包みを示して笑った。
「何だ、その格好は？　夜逃げでもしてきたのか？」
くくっ、と近くで笑いが漏れた　本気で可笑しかったのではなく、〈追従笑い〉というやつだ。男は憤怒の形相になり、笑った少年を怒鳴りつけた
「訓練中に笑うな！　糞が！」
「す、すみませ……」
怯える少年の首根っこをつかみ、至近距離からさらに怒鳴る
「ふざけるな糞が！　言っていいのは『了解』だけだ！」
「りょ、了解……っ」
上ずった声で返事をする。男は少年を突き放し、改めて一同を見回した。
「新参者はまず俺の顔を覚えろ！　自分は闇宮大尉である。大尉様じきじきの指導が受け

られること、感謝しろよ？　以後は教官と呼ぶことを許可する！」
酷薄な笑みを頬に刻み、木刀を肩に担ぐ。
「この糞ったれな島によくきたな！　歓迎するぞ、蛆虫ども！」
それからしばらく、間宮教官のありがたいお説教が続いた。
「貴様らは偉大なる祖国、大日本帝国の尖兵として――」
うんぬん。似たようなフレーズを何度も繰り返す、退屈な訓示だ。夜々は早々に飽きてしまって、こっそり周囲を観察した。
隊員はいずれも年若い少年。全員が魔術師の卵らしく、富裕層の出身が多いように見える。
自動人形は軍の支給品ではなく、夜々と同様、個人が持ち込んだものだろう。
夜々のような、人間そっくりの人形はない。ちょっぴり優越感を覚える。自分が雪月花であることを、夜々は誇りに思っているのだ。
ちらちらと盗み見ているうちに、浜で出会ったあの少年、汐を見つけた。
（となりの人形は――あのシャチ？）
既にシャチの面影はなく、人間に近い姿をしている。だが、黒い炎のような、ボディの感じは相変わらずだ。形状を変化させたらしい。
「貴様らを鍛え上げるのが俺の任務だ。蛆虫を、一人前の兵隊に教育するのがな！」
木刀を勢いよく振り下ろし、間宮が気勢をあげた。
「最終選抜を通れば、蛆虫から軍の〈狗〉に昇格できる。せいぜい励め、蛆虫ども！

教練場に重苦しい沈黙が垂れ込める。間宮は愉快そうに顔をゆがめ
「うん？　何だ？　蛆虫呼ばわりされて不満か？　ええ、蛆虫？」
手近な訓練隊員を指で小突く。突かれた少年は明らかに気色ばんだ。
噂の言葉通りなら、彼らはいずれも才能のある者たち。有力者の子弟も多いという。
年下の軍人に罵声を浴びるなど、腹を立てて当然だ。
間宮は薄笑いて少年たちを見回し、優しく言った。
「不満な者は遠慮するな。今すぐここを出て、故郷へ帰れ。――どうした？　遠慮はいらんぞ。とっとと失せろ！」
恫喝のように響く。先ほどの気弱そうな少年が、ひくっと伸び上がった。
――あれでは格好の獲物だ。間宮はそちらに近寄って、少年の肩を抱いた。
「どうした？　貴様。帰りたくなったか？」
「い、いえ――っ」
「そう遠慮するな。帰って母ちゃんのおっぱいでもしゃぶってろ
――！」
「それは本心か!?　どんなしごきにも耐えるのか!?」
「は、はいっ！」
必死に返事をする。少し興奮しすぎたのか、叫んだ直後に真っ青になり、少年はその場に座り込んでしまった。間宮はしゃがみ込み、少年の顔を覗き込んだ。

「うん？　おかしいな、誰が座っていいと言ったんだ？」
「い――医務室に――行かせてください……っ」
「医務室ときたか。大した甘ったれたな――蛆虫ども！　こいつを笑え！」
間宮が煽る。少年たちは目をそらしつつ、かすかに笑い声を上げた。
夜々は頭から湯気が出そうになった。あれでは虐待だ！
少年たちのあいだにも、やりきれない怒りが広がっていく。だが、この事態に腹を立てず、怯えた様子もない者が、一人だけいた。
雷真と、汐だ。一人は表情も変えず、無言で正面を眺めている。
間宮が気付き、今度はこちら――雷真の方に寄ってきた。
「おい、何をにやついている？」
やっぱり目をつけられた！
夜々はおののいたが、雷真は取り合わず、返事もしなかった。
間宮は雷真の胸ぐらをつかみ、凄むように言った。
「発言を許可するぞ。質問に答えろ！」
「別に、にやついてねえだろ」
「貴様！　俺がにやついていると言ったら、にやついているんだ！」
間宮は雷真を引き寄せて、唾を吐いた。
雷真の目元に唾が当たる。だが、雷真はまばたきもせず、ぬぐいもしなかった。
夜々の中で猛烈な激情が駆け巡り、勝手に魔力がみなぎり、夜々の魔術回路に力が――
雷真がすぐに気付いて、制止した。
「よせ、夜々」
「――でもっ――」
間宮は面白そうに夜々を見下ろし、せせら笑った。
「反抗的な人形だな。おい蛆虫、飼ってる傀儡のしつけもできないのか？」
「――スンマセンデシタ」
「貴様！　言っていいのは『了解』だけだ！」
「了解！」
間宮は苦笑し、背を向けた。その背中に、わざわざ雷真は声をかける。
「なあ、教官殿。ひとつ言わせてくれ」
夜々はぎょっとした。せっかく脅威が去ったのに！
間宮も予想外だったのか、面白がるような目をした。
「許す。言ってみろ」
「夜々は俺が『飼ってる』傀儡じゃない。俺に力を貸してくれる、俺の相棒だ」
夜々の全身の血管に、怒りとは別の、熱い感情が駆け巡った。
「馬鹿です……。そんなことを、わざわざ……！」
嬉しい。嬉しいけれど――

余計な発言だ　間宮は振り向きざま、雷真の顔面に鉄拳を叩き込んだ
「このように、上官に口答えすれば鉄拳制裁だ。勉強になったな？」
「了解」
「本日の夜間訓練はこれにて終了！　各員、消灯までは好きにしろ！　明日は四時に起床、点呼に遅れた者は処罰する　以上、解散！」
隊員たちが敬礼する。雷真もまた、見よう見まねで敬礼した
間宮が去ると、わっと少年たちが寄ってきた
「おまえ、豪胆だな！
「神経太いぜ！　どこの流派だ？
「おまえの自動人形、本物の女の子みたいだ！
誰もが目を輝かせ、雷真に好奇の目を向けている
夜々は誇らしい気持ちになった　自分が誉められたことより、雷真が認められたことが嬉しい。雷真は喝采を浴びるのに慣れていないらしく、目を白黒させている　自分の何が彼らの心をとらえたのか、本人はわかっていないようだ。
「うるさいぞ！　騒ぐな！」
刺すような言葉が飛んできて、少年たちが口をつぐんだ
――汐だ。長い黒髪を揺らして、こちらに近付いてくる。
「いい気になるなよ　上官への反抗は軍規違反だ　そんな態度で密偵が務まるもんか

[illegible]
雷真は軽く応え　親しみを込めて肩を叩こうとした
刹那、黒い影が割り込んできて、しゃこんっ、と鉄のような音が響いた
汐の自動人形が一瞬でシャチに変貌し、雷真の腕を噛み切ろうとしたのだ
少年たちに緊張が走る　あるいは、間宮に怒鳴られたとき以上に、怯えていた。
汐は殺気のこもった双眸を雷真に向け、冷ややかに言った
「ぼくに触れようなどとは思わないことだ　馴れ合うつもりはない」
「そりゃ悪かった　それも、気をつける」
汐は肩を怒らせ、不機嫌そうな足取りで教練場から立ち去った
雷真はその背を見送り、苦笑いを浮かべた
「何だありゃ　余裕のない奴だな」
「汐はいつもああなんだ　気にするな」
少年の一人が慰めてくれる　すっかり興奮が醒めてしまったようで、皆が無言で教練場を出て行った　雷真も何やら考え込みつつ、彼らに続く
教練場を出たところで、るりが待っていた
「お疲れさま、雷真さん　初訓練はどうだった？」
「どうって言われてもな　中将は怖いじーさんだった　教練は――これと言って感想はねえな。教官の訓示だけで終わったし」

るりはきょとん、とした。それから、楽しそうに笑い出した
「あらあら、強い子ねえ！」
それから、白い手を伸ばし、雷真の赤くなった頬に触れる
「痛いの痛いの、飛んでけ～♪」
「やめてくれ　ガキじゃあるまいし」
「お姉さんから見たら、ここにいるのはみんな子どもよぉ？」
雷真の頭を抱え込み、こつん、とひたいをぶつける　雷真の顔にさっと不自然な赤みが差し、夜々の全身からどす黒い妖気が漏れた
「けっ!?　何だ夜々!?　何がどうした!?」
「な、何でもありませんっ」
むかむかむかむか　この朴念仁！
るりは興味深そうに夜々と雷真を見比べ、やがてまぶしそうに目を細めた
それから雷真に視線を戻し、手を合わせてお願いした。
「汐さんはあんなだけど、どうか仲良くしてあげてね？」
「そりゃ相手次第だぜ　俺は腕を持ってかれそうになったんだ」
「でもね、仲良くしてくれないと、お姉さん、困っちゃうの」
「あ？　何で？」
「雷真さんの寝床、汐さんと同室にしちゃったから」

[illegible]
雷真は閉口した　夜々も閉口した　それは確実に、面倒なことになりそうだ。ちょっと肩に触ろうとしただけで、腕を斬られかけた　同室になって、日常生活をともにすれば、雷真がどんな目に遭わされるか
「……ゆうわけだから、汐さんと仲良くしてね？」
「——了解」
雷真は苦りきった顔で、教官に言うように、機械的な返事をした

5

夜間教練の後、間宮は自ら監督室に出向き、本日の報告を行った。
中将は執務机に足をのせ、分厚い魔術書を読んでいる　何語で書かれたものだか、頁をめくる手は速い　間宮は感心しながら、隊員たちの様子を大まかに伝えた
中将は満足げにあごを上下させ、
「わかった、ご苦労。——今日から入った餓鬼どもはどうだ？」
「一人、見所のありそうな奴がいました」
「赤羽の餓鬼か」
「……おわかりになりますか」

「俺も会った　っぬの所感を話してみろ」
先ほど教練場であったことを、間宮はできるだけ詳細に説明した
中将はうなずきながら聞いていたが、すべて聞き終えると、豪快に笑い飛ばした
「唾を吐かれてなお、減らず口を叩くか！
されただけではありません　普通、顔面にものが飛んでくれば、目を閉じます
たが、唾を顔面に吐かれたとき、あれはまばたきもしなかった
あいつは、完全に見切っていた
齢　五でかっ　面白い、さすがは空観の子よ　あるいは、雲雀めが叩き込んだか
それにせよ、基本はできているということだ　特に目をかけてやれ」
「はっ！」
敬礼する　間宮の顔は引き締まり、訓練隊員の前で見せた形相とはまるで違った
中将は読んでいた本を閉じ、小窓の向こうに目をやった
果てしなく広がる大海原に、月明かりがきらきら反射している
遠く西の果てをにらみ、中将は低い声で言った
「急がねばならんな　矢吉利であれが生まれる前に、動かねば
「学院は議会に迫る知識を蓄えていると聞きます　あの者の目的が神性機巧ならば、学院と結託する可能性もあります
「ラサノ[illegible]たか　聞けば、相当な野心家だ[illegible]今観の[illegible]
と細な野心家か　利用[illegible]
海千山千の魔術師を敵に回すは[illegible]ら入手[illegible]か[illegible]取られる危険はある
もっとも、案ずるは詮無きこと　日の本からは遠すぎるかな　徳川、白井、この国は
太平にあぐらをかきすぎた――か！
く――、と太い腕を振り上げ、雄々しく言う
それもここまで　次の百年、世界に君臨するは、日の本よ！
何と答えてよいかわからず、間宮は沈黙した
そのとき、控えめなノックが響き、るりが扉から顔をのぞかせた
ぱっと花が咲いたような気がする　暗い兵舎には不似合いな麗しさだ
あら～、間宮教官　お疲れさまです！」
にこっと笑って敬礼する　これまた兵舎に不似合いな、可愛らしい仕草だ
間宮は苦笑で会釈を返す　一方、中将は表情を険しくして、
どうした、るり　ただごとではないな」
るりは表情を曇らせ、後ろ手に扉を閉めて、小声で言った
はい　とうや……、また出たみたいで
中将の顔色が変わる　明らかに、怒気をはらんでいる
間宮も歯噛みした　中将の前でなければ、壁を殴っていたところだ
人はそれ以上言葉もなく、ただちに監督室を出た　るりの案内で兵舎の中を移動する

い、訓練隊員たちは食事中で、二人の動きに気付く者はいない
教練場より一層上、海抜ゼロのフロアに船着場がある　そこは兵舎の裏口であり、発動機つきの船舶がいくつか係留されていた
船着場のすみに職員たちがたむろって、検分に当たっている
彼らが観察しているのは、一人の少年――否、少年だったもの。
皮膚は干からびて、体は枯れ木のように細り、体液をすっかり抜き取られている　死後、一日が経過している様子だ。
少年の人相、着衣を見て、間宮は思わず手すりを叩いた。
「山下だ！」
中将は日本刀の鞘をつかみ、周辺に鋭い眼光をすべらせた
るり、これで何人目だ？」
「ええと、発見されたのは一人目です。ほかに、不明者が一人ほど
るりは顔をしかめ、しかし落ち着いた声で応えた
「隊員たちには『帰郷した』と言ってありますけど　これ以上、隠し通すのは無理ですわ　親御さんにもどこからか伝わるでしょうし　それに、いつまでも隠しておいては、弔ってあげることもできません」
「――ふん、小癪な化け物よ。いっそ、島ごと沈めてやりたいわ」
中将は忌ま忌ましげに言った

無論、[illegible]中将ノ計画ノ[illegible]
ここ数日、加賀見るりはどうしていた。
「監視していましたけれど――どうしても穴があきます」
「ふむ　こうなっては是非もない　彼奴の房に誰か入れろ　人選は――そうだな、あの餓鬼がよい。腐っても赤羽の出、鼻はきくだろう。臭ければ、嗅ぎ当てる」
「それでしたら、実はもう、そのようにしてあります」
るりが誇らしげに胸をそらす。さすがの中将も面食らったようで、しげしげとるりの顔を眺めた。ややあって、ため息まじりにかぶりを振る。
「――配慮ではあるまい　いつものうっかりか？」
「配慮です～　一人センノーなら監視しやすいと考えました
わかった　わかった。では、そちらはうぬに任せる」
[illegible]やり取りはいつも通りだ。少年の死に心を痛めていないわけではないだろうか
[illegible]生粋の軍人、余計な感傷は引きずらない　たか、間宮は――
[illegible]られた死体を振り向き、無意識にこぶしを握る。
[illegible]　爪が食い込むほどに
[illegible]早くに、びり殺さねばならんな、この忌ま忌ましい化け物を」
[illegible]葉は、そのまま間宮の胸中にあった言葉だった

6

意外にも、兵舎の食事は悪くなかった。

本日のメニューは魚のフライ、煮しめ、けんちん汁。濃い目の味つけは、いろりの上品な手料理とはずいぶん違う　街の大衆食堂で食べるような味だが、少年たちの若い体にちょうどいいくらいだ。

初日で緊張していたので、腹はすいている。雷真は詰め込めるだけ詰め込むつもりで、どんどん箸を進めた。

夜々にも食事を勧めたが、夜々は頑として手をつけない

ほかの少年たちの手前、遠慮したようだ　食事をする自動人形など、日本ではなかなかお目にかかれない。確かに、不気味に思われるかも知れない

雷真は無理強いせず、その代わり、夜々のために〈夜食〉の注文を出した。希望者には握り飯と沢庵の軽食が支給されるのだ　これを寝室に持ち込めば、後でこっそり食べられる

温かいものが食べられないのは、何とも気の毒だが

食事を終えると、雷真と夜々は自分たちの〈房〉に戻った。

房は四人で一室　段ベッドが左右に二つ、奥に戸棚がある

入り口は木製ながら頑丈な格子戸で、ご丁寧にも外から施錠できる仕組みだった

「なんつーか　これ――見れば見るほど牢屋だよな」

「桶は何……」

夜々が部屋の隅を示す　雷真は[illegible]

「便器だよ。消灯後は、そこにしろってことだろ」

「へ、べ、べ……っ!?」

「実際に使うのは勘弁だけどな　まあでも、空きベッドが一つあるのは助かるぜ」

「え……どうしてですか？」

「ひとつしかなかったら、俺が床で寝てただろ」

夜々はぼんやり雷真を見ていたが、やがてぎこちなくベッドに向かい、ぴょんと跳んで上の段に上がった。

――ふてくされたのだろうか？

頬が赤かった気もするが……わけがわからない。考えていても仕方がないので、ベッドに放置していた風呂敷包みを広げ、私物を戸棚にしまい込む

私物と言っても、ほとんどが夜々の持ち物だ　着替えが数着に、手鏡や爪切り、櫛など身の回り品。意外に女の子らしいなと感心する

荷ほどきを終えると、雷真はベッドに寝転がり　あれこれと思案した

給与期間は二か月　それまでに、ここで一番の人形使いにならなければ

そして、たった一人だけに与えられるという、密偵の職を得なければならない

そのために必要なことは、何だろう？

まずは機巧戦闘の腕前——だよな。夜々をもっと上手く使えるようにならねえと。とりあえず、やりかけになってる〈強制支配〉の修行から始めるか——

格子戸がガラガラと音を立て、誰かが房に入ってきた。

目だけを動かして確かめる。案の定、汐だった。

びっしょり汗をかいている。どうやら、雷真が馬鹿みたいに食欲を満たしているあいだ、日々鍛錬をしていたらしい。

〈こいつ、めちゃくちゃ真面目だ——！〉

感心している場合ではない。この汐も雷真のライバルなのだ。

昼間のことを思い出す。汐は人形にてのひらを向けることなく、魔力を送っていた。

〈——負けてられねえ。明日から、俺たちも日々鍛錬しよう〉

そんなことを考えているうちに、汐は髪をほどき、濡れた服を脱ぎ始めた。

するするとタンクトップをまくり上げ——はたと目が合う。

理解が追いつかなかったのか、汐は呆け、たっぷり数秒、沈黙した。

「よう」

「——ひゃあああ！」

悲鳴をあげ、胸を隠して飛び退く。しかし、そこは狭い房——後頭部が二段ベッドの角に当たり、汐はその場にうずくまった。

「お——おい、大丈夫か？」

「[illegible]な馬鹿！　痛[illegible]」

怒鳴られる。心配してやったのに[illegible]

汐は治まらず、なおも怒鳴った。

「この馬鹿！　いるならいると言え！　盗人みたいな奴だな！」

「そこまで言うか——つか、おまえの方が盗人みてえだろ。こそこそしやがって」

「こ、こそこそなんかしていない！」

「なら、臆病なだけだな。女みたいな悲鳴だったぜ？」

軽くからかったつもりだったが、汐はやはり過剰に反応した。

例の『黒い』自動人形がすべり込んでくる。ずす[illegible]、と不気味な音とともに、ボディの表面が激しく蠢き、人間からシャチへと姿を変えた。

「[illegible]今の言葉、取り消せ」

「あ？　どれを？」

本当にわからないから訊いたのだが、汐はますます逆上し、殺気をみなぎらせた。

「そんなに死にたいなら、望み通り殺してやる[illegible]——！」

「はあ？　俺がいつそんなこと言った？　あと、俺を簡単に殺せると思うな」

「面白いじゃないか。試してやるよ！」

「う——」

「やめてください！」

「[illegible]トから頭を突き出し、夜々が叫んだ
これで、密真も冷静になった　初日から仲間と問題を起こすような者が、密偵に選ばれるはずもない　勉強は苦手な密真も、そのくらいの計算はできる
密真はぽりぽりと頭をかき、大人しく頭を下げた
「悪かった　からか[illegible]たことは謝る　許してくれ
根性なしめ　どっちか臆病者だか」
「俺だ　ついでに言うと、俺はおまえよりずいぶん格下の人形使いだ」
「[illegible]卑屈な奴だな　でも、ぼくも[illegible]悪かった　下がれ、〈八十宰〉」
汐の命を受け、自動人形が壁際に下がる　表面の鼓動が止まり、マグマが冷えて固まるように　ゴノゴノした塊になった　――それが待機状態らしい
どうやら、汐は矛を収めてくれたようだ　激しやすいが、意外と素直な性格だ
密真は緊張をゆるめ、気さくな調子で話しかけた
「まあ、何の因果か同室になっちま[illegible]たんだし、仲良くしようぜ
「断る
じゃ、普通でいい　普通に付き合ってくれ
それも、断る」
その口癖、頭にくるな　頭ごなしによ」
「口癖じゃない　ぼくはあれこれ詮索されるのが嫌いなんだ」

[illegible]酒だ、俺も[illegible]
わからない奴だな　きみした[illegible]探られ[illegible]ない事情[illegible]
汐は酷薄な笑みを浮かべ、無理につぶしたような声で、こう[illegible]た
なあ、赤羽密真？」
首筋に刃物を当てられたような気がした
「[illegible]っ――知っているのか？　俺の素性を？　なぜっ
[illegible]ばけたところで無駄だろう　密真は両手を上げ、降参のポーズを取った
「[illegible]たよ　詮索はしない」
「[illegible]か賢明だ」
「[illegible]ものは相談なんだが――風呂、[illegible]緒に行こうぜ
[illegible]言葉を失い、次いで、顔色を失った
「[illegible]てっ!?
貴方　まさか、男色のケが[illegible]!?
頭[illegible]で　夜々が思いっきり引いている
[illegible]を無視して、手ぬぐいを引っ張り出し　入浴の準備を始めた

Chapter 2 共犯者の日常

1

風呂、一緒に行こうぜ――
と雷真が言った途端、汐は石化した
「おい、どうした。俺は風呂場がどこかも知らないんだ　案内してくれ」
「あ……案内？　そ、そうか！　わかった！　いいだろう！」
急に元気を取り戻し、先に立って歩き出す。
「じゃあ夜々、行ってくるからな」
胡乱げな相棒に言い置いて、汐の後を追う
風呂は海抜ゼロのフロアにあった　近くに海水の蒸留設備があり、ごおんごおんと仰々しい機械音がする。
擦りガラスの向こうが脱衣所で、その奥にシャワーが八基と、広い湯殿がある。先客が数名ほどいたが、汐に気付くと、全員がそそくさと出て行った
――よほど嫌われている。だが、汐はまったく気にしない

「……案内！」
「――！、何……んな……緒に入……」
な……んだって……！？　何てふしだらな……度しがたい――」
はア？　ふしだらって何だよ！」
雷真はあわてた。妙な誤解をされている！
「別に俺、男が好きとかねえからな？　軍隊はそういうの多いって聞くけどよ
信じていないのか、汐は半眼で雷真をにらんでいる。
「あー、それとも風呂嫌いか？　そんな汗まみれて、入らねえつもりとか」
「と、当然入る！　なぜきみと一緒に入る必要があるんだ！」
「そりゃ、まあ……おまえと仲良くしたいから――」
「いやいやいや！　それでは余計に誤解を招く！」
そうじゃなくて――腹を割って話したいからだよ！
「詮索はしないと言ったばかりだろう！」
詮索まではしねえ！　だが、いがみ合うよりは親睦を深めた方がいい！
断る……きみと親しくなる理由がない」
こっちにはあるんだ……確かめたいこともあるしな。たとえば、おまえがいざなぎ一門の
何なのか……とかさ」
汐はぎくっと肩を強張らせ……それから急いで目をそらした

図星かよ　ほとんど当てずっぽうだったのに
しかし、思い返せば腑に落ちる　雷真の素性や師を知っていて、優秀な瀧術師とくれば
真っ先に思い浮かぶのが「いざなぎ」門だ
汐の切れ長の眼に、底冷えのする殺気がにじんだ
「[illegible]どこまで知っている？」
「何も知らねえよ。それに、素性を隠してるって意味じゃ、俺も同じだ　口外はしねえさ
おまえが黙ってる限りはな」
互いに弱みを握り合った形だ　汐も納得したのか、しぶしぶうなずいた
「[illegible]いいだろう　その言葉、今だけは信じてやる」
「じゃ、風呂行くぞ　そんな汗ひっしょりじゃ、におうんじゃねえの？」
「や、やめろ馬鹿！　か[illegible]かくなあ！」
真っ赤になって逃げようとする。とっさにその腕をつかむと、予想以上に骨が細かった
肌は吸いつくような手触りで、驚くほど柔らかい
雷真は驚いて手を放した　そして、反省した　今のは少々、強引すぎた
「わ、悪い　無理強いはしねえよ。[illegible]緒に入りたくない事情があるみてえだし」
雷真としては助け舟を出したつもりだったのだが、汐はきつく奥歯を噛み、わなわなと
肩を震わせて――脱衣かごに向かった
震える指で上着を脱く　あらわになった肩は白く、思った以上に繊細だ

「[illegible]んな！　野郎の裸になんざ興味ねえ[illegible]」
雷真はさっさと全裸になり、手ぬぐいを持って湯殿へ向かった
湯殿は掃除が行き届き、カビやぬめりもなく、清潔だった　軍の風呂は[illegible]日で汚くなる
と聞いていたが、隊員が良家の子弟ぞろいのせいか、お湯も綺麗なままだ
[illegible]入りにかけ湯をして、湯につかる　そのときには汐も湯殿にきていて、かけ湯もそこ
そこに、逃げるように湯に潜った
「何を意識してんだ、こいつ[illegible]」
[illegible]は赤い顔で雷真をにらんでいる　耐え切れない恥辱に耐えている様子だ　親睦を深める
[illegible]どころか、どんどん関係が険悪になっている
「[illegible]何とか失点を取り返さねえと」
[illegible]の場合、深追いするほど失点が増えるのだが、雷真はまだ十五歳で、そのあたり
の経験が足りなかった
[illegible]が湯船から飛び出して行くのを見計らい、その後ろに回り込む
「[illegible]やるよ」
「[illegible]った！」
[illegible]も嫌いすんな　野郎同士、裸の付き合い[illegible]！」

おとなしくなったので、これ幸いと、汐の背中を洗ってやる。

石けんを泡立て、首筋に触れた瞬間、汐が「ひゃあ！」と悲鳴をあげた。

「さっ、触るな変態！　馬鹿！」

「触んねーで、どうやって洗うんだよ」

「っ!?　うっ……」

「肌が弱いのか？　なら素手で優しく洗ってやる」

「っっ!?」

「くすぐったいのか？　無駄に敏感だな」

「っ……！　っ……！」

「おまえ、さっきから「うっー」しか言ってねえぞ」

和やかに――雷真はそのつもりだ――会話しながら、背中を流す。

華奢な肩甲骨をさすり、締まった腰に泡を盛る。

「おまえ、脱ぐと案外……ひょろいのな。軍服の上からは立派に見えたのに」

「っ！　そ、そんなことはない！」

「いや、本当に……腰だってこれ、細すぎるだろ。肩幅も狭いし。胸板だって、もっとがっしりしてたような――」

正面に手を回す。思った通り、胸板は薄い。おまけに……にゅるんっと肌の表面が動き、やわらかな感触が指先に伝わった。

「……ッ」

「ッ、馬鹿ああああああ！」

いきなり肘鉄が飛んできた。腰の回転を利用した鋭い一撃だ。肘は見事に雷真の横っ面をとらえ、一メートルも吹っ飛ばした。

がしゃーんっ、と派手な音とともに、水桶や石けんが飛び散る。

いくら何でも、怒りすぎた。抗議したいところだが、汐は手ぬぐいで体の前を隠し、眼に涙を溜めて、親の仇を見るような顔をしていた。

「す、すみません、母ーっ……うっ……うわあああああん！」

……から逃げて行く。母親まで持ち出すとは、よほどショックだったようだ。

「……そこまでひでえことしたか、俺」

……れた頬をさすりながら、自問する。察するに、たるんでるとか、男らしくないとか。

……の発言は禁句らしい。自分が女っぽいのを気にしているのか。

ちょっと可笑しくなって、雷真は笑った。

周囲に怖れられる秀才が、実は気弱で泣き虫だ。そのギャップに親しみがわく。

――と、いきなり床が揺れ、ガラス戸ががしゃがしゃと不穏な音を立てた。

……戸の隙間から、夜々が湯殿をのぞいている。

「貴方という人は……！　ここまで下劣なんですか……!?」

「おまえも――おまえもな！　何で男湯をのぞいてんだよ」

「貴方は最低です！　最低の鬼畜野郎です！」
「何でだよ！　何度でも言うが、野郎になんざ興味はねえ！」
夜々はばか、と小さな口を開けた。呆けた顔も愛らしい
雷真はその場に座り直し、自分の体を洗いながら、夜々に言った
「今のは収穫だったな　あいつの弱みを握った」
まあ、そういうことに　なりますけど　」
「あいつはいさなぎ流——どうやら身分を隠して潜り込んでる　そして　思いのほか打たれ弱い　脅しをかけて、こっちの秘密を守らせようぜ」
夜々はがくっとつんのめった
はあ、と聞こえよがしのため息をつく。雷真は急に不安になった
「何だよ、その反応　。ひょっとして、俺はまた鈍い感じになってるか？」
「貴方は馬鹿です　本当に」
「しみじみ言うな！　知ってるけど傷つく！　ともかく、敵に回すと厄介だが、こっちもあいつの弱みを握ったんだ。これなら、仲良くやっていけそうだろ？」
「おまけに外道です！」
「それも知ってる　俺はたった一人の妹も救えなかった　ろくでなしの蛆虫野郎だ」
乾いた笑みを漏らす。
ややあって——何を思ったか、夜々がちょこちょこ寄ってきた

「　吹　　何だよ」
「な　何してんだ　夜々が背中を流してあげても　いいですよ」
「いや、遠慮しとく。背骨折られそうだし」
「また夜々を　怪物扱いして　っ」
「ほらそれ！　それを警戒してんだよ俺は！」
命懸けの鬼ごっこは、ほかの訓練隊員が入ってくるまで続いた

2

翌日から、本格的な教練が始まった。
教練は早朝、午前、午後、夜間の四部にわかれている。
早朝は主に体力づくり　朝食の前に、走り込みや筋トレを行う
午前と午後は座学がメインだ。語学のほか、機巧物理学、機巧工学を中心に、近代魔術の基礎知識を叩き込まれる。訳書が充実しているわけもなく、教科書の多くは英国のものを使う　必然的に、英語の読解力も要求される
雷真は初回から居眠りをかまし　閨宮の叱責をしこたま浴びた。
相変わらずの勉強嫌い　夜々は大いにあきれたが——雷真の真価は、全然別のところにある　それは主に夜間、実戦的な戦闘訓練で発揮された

今、湿気の[illegible]い教練場に、強烈な照明が当てられている。

訓練隊員の少年たちが、グラウンドの外周をマラソンしている。その中央で、黒い雷電——否、夜々が暴れ回っていた。

由良の魔力をうけ、標的の藁人形を次々と打ち倒していく。

教官が魔力を送り込むたび、藁人形はばね仕掛けのことく立ち上がる。それを殴るか、蹴るかし[illegible]、教官に一本——と認めさせればいい。

「すごいぞ、あいつ！」「動きが段違いだ！」「目で追えねえ！」

隊員たちが驚きの声をあげる。ほんの[illegible]分で、夜々はた[illegible]回も藁人形をなぎ倒した。

「やっぱおまえはすげえな、夜々！」

由良が駆け寄ってきて、夜々を褒めてくれた。

夜々の胸に誇らしい気持ちが込み上げる。だが、このくらい大喜びしていては、いかにも女っぽい。夜々は当然という顔をして、澄まして言った。

「[illegible]の[illegible]って、ことありません」

「[illegible]もっとも[illegible]方の俺は、何の役にも立たなかったな」

「[illegible]なことないです。貴方は——ええと、」

フォローの言葉を探したが、見つからない。

確かに、今のは夜々任せだった。由良は夜々に魔力を渡し[illegible]。これでは人形使い

[illegible]

[illegible]と[illegible]いて、夜々の力もなん[illegible]

[illegible]口身が喉まで出かかったが、すんでのところでいみ[illegible]んだ。[illegible]化物扁人形が、

「[illegible]言葉を、こんな子どもに言ってしまっていいはずがない。

「[illegible]ち[illegible]とはやるじゃねえか、蛆虫」

にやにやしながら、間宮が評価を述べた。

「馬子にも衣装、できそこないにも高級人形、ってな」

「その通りだ。情けねえ」

間宮が意外そうにまばたきする。由良は頭を下げ、真剣な顔で言った。

「教官、俺を鍛えてくれ！　蛆虫から銀蝿に羽化させてくれ！　頼む[illegible]」

こんな人に教えを請うなんて[illegible]、と夜々は腹を立てたが、由良の真っ直ぐな眼を見て、[illegible]に思い直した。

違う[illegible]人いない教師だから教えは請わない、なんていう方が、よほど卑小な考え方[illegible]。

由良の誇りはそんな手前にはなく、もっと遠くを見据えている。

[illegible]の瞬間、間宮の眼光がやわらいだ気がした。

見間違いかもしれない。間宮は鬼の形相になり、由良の襟首をつかみ[illegible]げた。

「貴様が！　[illegible]言葉遣いは何だ！？　それが人にものを頼む態度か！？——

[illegible]

「黙れ！　言っていいのは『了解』だけだ！」
怒鳴り声に圧倒される。マラソン中の少年たちが気の毒そうにこちらを見たが、雷真は怯えた様子もなく、「了解！」と答えた。
「それでいい――おい、加賀見！」
雷真の背後に怒鳴る。ちょうど今、夜々がそこを走っていた。
ひどい仏頂面。昨夜の一件が尾を引いていて、雷真を見ようともしない。
「加賀見、この弱虫に貴様の記録を教えてやれ」
夜々は「何でそんなことを！」という顔をしたが、教官の命令では逆らえない。
「……八本です」
「ふぁ、しゅ……[illegible]!?」
雷真がのけぞる。夜々もまた、耳を疑った。
わずか一分間で十本近く倒したのなら、一本につき七・五秒の計算だ。
この教練場には、周囲百メートルのトラックが納まる。いくら夜々でも、端から端まで移動するのに[illegible]秒はかかる――今のところは。
八本を超えるスコアなど、どう考えても不可能だった。
だが、雷真はあきらめない。
「もう一回！　俺たちにやらせてくれ！」
「実戦に二度目があると思うのか!?　甘ったれるな！」

「神[illegible]……[illegible]」
「[illegible]……闘技の鉄拳か!?」
「貴か！　自分だけ特別扱いしろってのか、ああ!?」
「了解……！」
「この《巻き藁崩し》は最終選抜の試験科目になっている。せいぜい対策を練っておけ。次の者、愚図愚図するな！　前に出ろ」
「りょ、了解！」
別の者が運動場の中央に引っ張り出される。雷真は不満そうにしたが、大人しく待ち人の輪に加わった。夜々もそそくさに駆け寄って、ぴったり雷真のとなりにつく。
「夜々っ、おまえは走んなくていいぞ？」
「[illegible]って怒らないんですか？　あんな教官に怒鳴られて、殴られて、[illegible]へらへらして……」
「[illegible]、情けないです！」
「[illegible]教官より、おまえの方がよっぽど怖いし」
「また！　また夜々を化け物みたいに[illegible]……！」
「落ち着け。ひょっとしておまえ、俺の代わりに怒ってくれたのか？」
「しっ、自意識過剰です！　貴方なんて[illegible]、貴方なんて、知りませんっ！」
「いつかよ[illegible]つか、俺の名前は「雷真」だ。そろそろ覚えてくれ」
夜々は黙った。名前など、もちろん覚えている。実際、以前はちゃんと名前で呼んでい

「…たカ今は、恥ずか…くてとても呼べない
雷真はま…すぐ進行方向を見据え、凛々しく…った
「…罵倒されても腹は立たない　実際、俺の魔術は…なもんだ……なあ　夜々　俺
…あの目的はなんだ」
「…れは　…術偵(?)に選抜されること……」
「…ろ　だったら、この程度のこと、気にしてらんねえよ　それにあのオノサン(?)　そこ
…の暴力教師とは違うぜ　ちゃんと加減…て殴ってる
「嘘です！　だって、あんなに思いっきり
「とにかく俺は心配いらない　今は汝を超えることだけ考えよ…
…すみません　夜々が……不甲斐なくて
勇気を出して謝ったのに、雷真は噴き出した
「ハーカ、何を気持ち悪いこと言ってんだ
「馬鹿!?　馬鹿って言いましたね……っ!?
不甲斐ないのはおまえじゃねえよ　俺だ」

——

はるか遠くに目をやり、噛みしめるように言う
「どんな名刀を持ったところで、使い手がヘボじゃ髪の毛一本落とせない　俺は剣術道場
にいたから、そのへんのことはわきま…るつもり…

…日…独…
し……面目ねえ
「たか…　緒に頑張りましょう」
雷真が目を丸くする　今さら恥ずかしくなって、夜々は顔を背けた
耳が熱い　ひょっとしたら、赤面してしまってるかもしれない
果たして、夜々の良心は伝わったのか　雷真は気合のこもった声で…った
「おう！　約束したからな、おまえに相応しい人形使いになる…てよ」
「…そうです！　少…は強くなってもらわないと、夜々まで恥ずかしいです！
たな　今に見てろよ——
「無駄口をきくな！　蛆虫！——
開始の怒鳴り声が響く　びりびりと空気が震え、教練場が静まり返った
雷真と夜々は互いに視線をかわし、共犯めいた微苦笑を浮かべた
雷…ーノをすけ、少年たちを追い抜いてい、
…　夜々は頼もしい気分で追いかけた

…ない　…食べてね

るりの音頭で、隊員たちが一斉に「いただきます！」と言った
良家の出が多いとは言え、全員が年頃の男子　綺麗すぎて食欲もわかない、なんていう
のは新入りくらいで、ほとんどが旺盛な食欲を見せる
彼らの食事は日に二回　朝は粗食で、昼にがっつくと夜間訓練で戻すハメになる。その
ため、晩飯は心置きなく食える唯一の食事と言えた　少年たちの食いっぷりに驚嘆しつつ、
雷真も胃袋にカロリーを詰め込んでいく
「あらあら　いい食べっぷりねえ、雷真さん！」
にこにこと嬉しそうに、エプロン姿のるりが様子を見にきた
雷真の皿がカラになっているのを見て、満足げに首を上下させる
「野菜炒めも残さず食べたのね　感心感心♪」
「野菜を残すって……子どもかよ」
「大人の偏食の方が厄介なのよ　これから体をつくっていくんだから、ちゃんとしないと
ね　みんなも、わかった？」
「了解！」と威勢のいい返事があがる　るりは「よろしーい！」と上官のように胸を反らして
皆を笑わせ――笑わせる以上に、[illegible]ートする物体で視線を釘付けにした
「どこ見てるんですか……」
背後から相棒の冷たい声がかかる　雷真はあわてて目をそらした
「へ、変な視線じゃないぞ。あの人と教官で、見事に結ばれたと思っ……」

[illegible]
隊員たちの輪や[illegible]
「浮気者……！　普段は硝子、硝子、てうるさいくせに……」
「よ……硝子さんの話をしてもキレるくせに――何なんだ!?」
「……！　ご飯どきの喧嘩はよしなさあい！」
るりが再び現れて、夜々を後ろから抱きすくめた
その身のこなしに、雷真は目を見張る　武術の覚えでもあるのか　気配もなく、そして
素早く、一瞬で夜々の後ろを取った
だが、そんな凄みを微塵も感じさせず、るりは優しく声を出す
「夜々ちゃんは食べてないのね　お腹、すかないの？」
「え、ええっと、夜々は……」
「――奥で、お姉さんと一緒に食べましょうか？　まかない出すわよ～♪」
夜々は意見をうかがうように雷真を見た　雷真はうなずいて、
「おう、ごちそうになれ」
「――はい！」
夜々は嬉しそうに首を上下させ、るりに連れられて、厨房の方に向かった
二人の後ろ姿を見送って――ふと、壁際のテーブルに汐を見つけた
同席している者はいない　雷真は食べかけの膳を持って、汐のとなりに移動した

[illegible]はこちらを見ようともせず、ずず、と静かに汁をすすっている
よう、干席さん　相席、いいか？」
「断る　目障りた
何たよ、昨日の風呂のこと、まだ気にしてんのか？
[illegible]と横に汁を噴く　真っ赤になって咳き込む汐は、正直言って面白い
[illegible]あー　赤くなっちまって、まあ）
[illegible]は御前を逆立てたが、自動人形を呼び寄せたりはしなかった　昨日、[illegible]なきの名を
[illegible]かせたのが効いているらしい　雷真とトラブルを起こして、余計なことを触れ回[illegible]
[illegible]は、汐も困る
代わりに、テーブルの下て雷真のすねを蹴る　つま先が青アザを見事に直撃し、さすか
の雷真も汎を浮かせた　涙がこしむほどに痛い
偶然そこに当たったのてはなく、わざとその部分を狙ったようだ　昨日の風呂で鬼色に
気付いたらしい　上席だけあって、観察眼も鋭い
[illegible]はさっさと食事を済ませ、雷真を置いて席を立った
――まさに、とりつく島もない
「あいつにからむのはやめておけ　さわらぬ神に祟りなし[illegible]
横から声をかけられる
精悍な顔立ちの少年が、お茶のヤカンを持[illegible]　肌は浅黒く、体は締ま[illegible]
[illegible]
俺は龍神、名は新人　アノタと呼ん[illegible]れ
アラタさんか　俺は赤ば――赤羽雷真た
雷真だな　ここで会ったのも前世の宿縁、よろしく頼む　座っていいか？
ああ　好きにやってくれ
アラタは対面に腰を下ろし、雷真の湯飲みに茶を注いでくれた
ありがとよ　――あんた、坊さんか？
鋭いな　髪もずいぶん伸びたはずたか
アラタは苦笑して、自分の剃髪をつまんで見せた
俺の実家は東密の寺た　ゆえに、法力に少々、覚えがある
法力とは、修行を積んだ僧侶が身につける異能――いわゆる　念動　や　心眼　なとて、
魔術師のそれと同し効力がある　無論　魔術師同様、自動人形も扱える　密教はいざなき
門に近い　普段している魔術と言えた
かなりの魔力を感じる　このアラタも、厄介なライバルとなりそうた
――しいしの動きは隠[illegible]て、雷真は臆面なく訊いた
汐と関わるなって、どういう意味だよ？」
汐の家は　人形屋だったたろう？
ああ、そこに俺か突っ込まれたんだ

「だが、もともとは人じゃなかっ――」
アラタは何か言いかけたが、途中でやめ、白い歯を見せて笑った
「いや、これは陰口になるな。舌禍を招く。やめておこう」
「何だよ、かえって気になるぞ」
「おい、俺たちも交ぜろ」「おまえ、かなり使うよな！」
アラタに触発されたのか、近くの隊員たちが示し合わせたように寄ってきた。
「さっきの〈巻き藁崩し〉、俺なんかヒイヒイ言いながらの二十体だぞ？」
「ああ……いや、あれは相棒の性能で、俺の力じゃねえ」
「ま～たまた、ご謙遜を！」「おまえ自身、相当鍛えてるじゃないか！」
少年たちは笑った。雷真の身体能力も、ランニングの際に知っている。
「雷真、何かやってたのか？　空手とか？」
「ええと……剣術道場で、剣と柔術を少々」
「なるほど！　それであの動きか！　すげえな！」「少しは手加減しろよ!?」
褒めそやされて、尻のあたりがむずむずした。
持ち上げられるのは苦手だ。それは幼児体験に原因がある。
赤羽本家の子と知れば、最初は誰もが期待をかけてくれる。だが、さしたる才がないと
わかると、てのひらを返したように遠ざかる。魔術の世界は実力主義で、力のない者は軽
んじられる。大きな看板を背負っていれば、期待も失望も大きくて当然だ。

[illegible]
「つーかよ、おまえの人形、あれは一体何なんだ？」
少年の一人が詰問調で言う。禁忌人形とバレた――のではなく、
「あんなに可愛い子、本当に人形なんだろうな!?」
「むしろあんなに可愛い子が本物の女子のはずがない！」
「正直、俺の姉ちゃんより断然色気があるんだが、どうすればいい!?」
「ものすごくうらやましいぞ、おい！」
変に盛り上がる。良家の子弟と言っても、このへんは下町の少年たちと変わらない。
「あー、雷真よ。苦界は一切皆苦――色事に癒やしを求むるは人情だがな」
アラタがしかつめらしい顔をして、冗談っぽく釘を刺す。
「いくら己の人形とは言え、あの子で煩悩を満たすような真似はするなよ？」
カッと頬に血がのぼり、雷真は箸をテーブルに叩きつけた。
少年たちが青ざめた顔で雷真を見る。雷真は折れた箸を茶碗に放り、立ち上がった。
「あいつは俺のものじゃねえ。そんなふうに扱うかよ」
そう吐き捨てて、流し台に食器を下げる。
やっちまった……小せえ男だな、俺は！
自分で自分が嫌になる。さっきのあれは悪意のない冗談だ。新参者の雷真が仲間に入り
やすいようにと、先輩たちが気を遣ってくれたのに。

刺さるような視線を背中に感じながら、食堂を出る。
入り口近くの壁にもたれて、汐が待っていた。
汐「……房に戻ったんじゃなかったのか？」
「今の、きみはどこにキレたんだ？」
さして興味もなさそうに訊く。だが、わざわざ訊いてきたくらいだから、よほど興味があるのだろう。雷真は少し考えて、
「どこって……まあ、何つーか」
人形なんかに欲情するか、って？
「違う！　あいつら、俺の相棒を、俺が好きにできる——みたいに言うから」
「だが、きみの人形だろう？」
「そうだが、違う。夜々には心がある。泣いたり、怒ったりする。自分ってものを持ってるし、誇りにも思ってる。人間と同じだ！」
汐は答えなかった。理解できないという顔だが、別に不愉快でもないらしい。
どちらからともなく歩き出し、自分たちの房へと向かう。
怒っている様子もなさそうなので、雷真も気になっていたことを訊いた。
「なあ。二か月後の〈最終選抜〉って、何が評価の基準になるんだ？」
「考えればわかるだろう。間諜の適正を見るわけだから、まずは——」
「機巧戦闘の腕だよな？」
「いや——」表情も変えず、横目で雷真を一瞥。
「馬鹿。まずは語学力。英語の読み書きができなくちゃ、間諜なんか務まらない。それから広範な魔術知識もいる。潜伏先はあの機巧学院なんだ」
「なるほど……おまえ、頭いいな」
「きみが馬鹿なんだ！　きみが！」
声が高くなる。それから、ごまかすように咳払いをした。
雷真は肩を落とし、重い気分でため息をついた。
必要なのは学問か……。俺の相棒は日本一の自動人形だし、殴り合いなら自信もあるが、オベンキョウはちょっとな。
「問題はそれだけじゃない。きみに欠けてそうなのは、性格的適正だ」
「適正？　性格なんて関係あるのか？」
「大ありだ。忍耐力に洞察力、慎重さ、とっさの機転、計算高さ、全部要る」
「マジかよ……だめだ！　全部、自信がねえ！」
我ながら短気で無鉄砲、計算よりも直感に従うタイプ——に思える。
前途多難……汐はさらに、脅かすように言った。
「密偵を送るのは夜会の開催年度。世間の耳目も集まる。選抜は相当厳しいぞ」
「そうそう、その〈夜会〉ってのは、どんな行事なんだ？」
「……」と油の切れた歯車みたいな動きで、汐がこちらに顔を向けた。

「きみは、それを知らないのか!?」
「あっ、いや、ちょっとは知ってるぞ! ほら……夜にやる会だろ!」
「そりゃそうだろうさ! 浅いんだよ、ごまかし方が!」
さすがに呆れて思ったのか、沙は億劫そうに説明した
「魔術師協会の存在は、さすがに知ってるだろ?」
「お……おう!」
「魔術師の倫理を統制する国際機関だよ 日本だって、開国と同時に加盟させられ、当時の条約の中で、唯一、不平等じゃない条項だった」
近代史はサッパリだ 新聞も読まない富貴が、事情を知っているはずはない
「機巧学院は、その魔術師協会が魔王子の選定権を認めた学校だ」
「ワイズマン――中村も言ってたな 結局、これは何なんだ?」
「大賢人の称号だよ この称号を与えられた者は、禁忌の研究も許される」
「禁忌……って、禁忌人形とかの?」
「そう、それだ 普通はやっちゃいけない研究も、魔王はやっていいんだ」
とすん、と胃袋を殴られたような気がした
魔王――禁忌の研究 それを求める者に、心当たりがある
なぜ、仇が学院にいるのか――察しがついてしまった
「その魔王を選定するのが夜会だよ 魔術師たちが覇を競い、血で血を洗う闘争の宴」

勝者……勝ち残った……魔王……
……なれるのは……人――……
何とも忌まわしい催しだ 力ある者が、さらに力を得るためのお墨付きを得る
だが、意外な希望を得たのも確かだ
学院で宿敵と遭遇しても、暗殺するのは難しい 教員連中は凄腕だろうし、警備だって厳重だろう だが、もし夜会に出場できれば
「封……であいつ……をやれる……誰にも邪魔されずに!」
目標が一挙に具体化し、感情が昂ぶる
何としても、審査にならなくては……のためにも

1

「……ね、夜々ちゃん? 美味しい?」
……に甘ったるい笑顔を向けられて、夜々はどぎまぎした
……のさらに奥、一段高くなった小上がりの四畳半 従業員の休憩室も兼ねたこの部屋で、夜々は夕食をふるまわれていた
「お……美味しい、です」
お愛想を言う 正直に言えば、いろりの手料理の方が好みだが

察しているのか、いないのか　るりはうふふと笑っているだけだ
まるで雷真といるみたいに、夜々の胸がどきどきする
るりの繊細な眉や、黒目がちの瞳や、やわらかな唇を見ていると、気持ちが浮きうき[illegible]
るりは夜々が初めて意識した、外の世界の〈女性〉だった
赤面しながらフライをかじっていると、食堂で　ばんっ　と大きな音がした
夜々は落ち着かない気分になった　まさか、また雷真がトラブルを[illegible]
「ふふっ　そんなに雷真さんが心配？
はい!?　ぜ　全然、そんなことはありません！
「まあ！　雷真さんったら、ひどい怪我だわ！
えっ!?　また!?
ちゃぶ台を飛び越え、休憩室から飛び出そうとして、るりが笑っているのに気付いた
──かつがれた！　夜々はむっとしたが、るりは悪びれもせず、
「今のでっ、わかったわ　ひとつ、雷真さんは生傷の耐えない男の子なのね　ふたつめ、
夜々ちゃんは雷真さんがいなくても魔術が使える　つまり、自動人形
夜々の全身が強張る　だが、るりはあっけらかんとして
「すごいのねえ、夜々ちゃん　見た目も性能も段違いだわ　誰の作？
素直に褒められている　ようだ　少なくとも、るりからは敵意も、恐怖心も感じない
夜々も釣られて緊張を解き、ちゃぶ台に座って、すんなり答えた

[illegible]
[illegible]　眼が　まんまる[illegible]
花柳斎──花柳斎先生!?
「そうですけど　ご存知なんですか？
「ご存知も何も　超有名人じゃないの　あのね、まだご存命だったのねえ
あ　はい、ぴんぴんしてますけど
しぶとい！　憎たらしい！
[illegible]す笑っている　ひょっとしたら、旧知の仲なのか
聞きたいと思ったが、その前に──るりは次の爆弾を投下した
[illegible]て、みっつめ　夜々ちゃんは、雷真さんに恋しちゃってるのね
[illegible]ななっ、なな何を言い出すんですかっ！
[illegible]口を開いて、激しく主張する
[illegible]ありません！　あり得ません！　あり得ないったら、あり得ません！
[illegible]するあたりが図星って感じね　初いわあ、うぶいわあ、愛らしいわ！
[illegible]目を輝かせ、うっとりとした調子で[illegible]た
いいわねえ　恋　女はやっぱり、恋に生きるものよねえ──
夢見心地だった表情が、急に、気遣わしげなそれに変わる
[illegible]身を乗り出して、そっと夜々の手に手を重ねた

優しく問われ[illegible]夜々の瞳から[illegible]
「ち……違うんです　これは……すみません」
「謝らないで　泣いてる理由を話してみて？」
「夜々は……人形です。恋なんて……人間に……恋なんて……」
やっと、わかった。雷真に感じていた不満、むかむかの正体が
箱根の一件以来、夜々の中で、雷真の存在は日増しに大きくなっている
雷真の背中を追いかけていると、どこまでも行ける気になる
夜々にとって、雷真はもうかけがえのない存在、唯一無二の[illegible]だ　もう雷真以外の人間には使われたくない　雷真だけの夜々でいたい
だが、雷真は人間だ
やがて人間の娘を妻とし、子をなし、命を次代につないでいく
その未来に夜々の居場所があるとすれば——ただ「道具として」
ぽろぽろとこぼれ落ちる涙を、[illegible]るりの指がそ[illegible]と拭ってくれた
「確かに[illegible]自動人形は人間と同じもの[illegible]じゃないね　でも、男と女って、同じ[illegible]な[illegible]よ」
ものすごい飛躍だった　あまりの飛躍っぷりに、とっさに言葉が出てこない
「[illegible]でも、男と女は同じ人間でし[illegible]　やっぱり、対等です」

「体つきも、機能も違うのに、どうして対等なのかしら？」
「それは――どっちも必要だから――？」
人形使いと人形は、どっちも必要じゃないの？」
――ヘリクツ！」
るりは包み込むように微笑んで、ちょん、と夜々の鼻を突っついた
夜々ちゃんはお人形だけど、人間と同じ心を持ってるでしょう？」
――
おたがいに必要としていて、お互いを思いやる心がある――だったら、愛し合っちゃいけない理由なんて、ないんじゃない？」
「だけど、自動人形は――戦いのための、道具です」
雪月花は戦うために生まれたのだ。強大な魔術回路を搭載しているのだ。人間は人形を怖れる　愛してくれるはずがない。
るりはすべてを見透かしたように、ゆったりとうなずいた
てうね　人形は生まれたときから道具だわ。だけど、道具っていうのは、目的があって初めて生きるものなの」
目的？」
「あなたの大事な人には目的がある　その目的のために役立つことができたら、あなたはもうただの道具じゃない。そのときはきっと――〈相棒〉って言われるのよ」

「[illegible]雪月花[illegible]り回し申[illegible]
人――〈道具〉として生まれ[illegible]好きな人の相棒として死ねるなら
それはとんなに幸福な人生だろう？
「それにねえ、夜々ちゃん　恋っていうのは戦争なのよ。弱兵だろうと、人形だろうと、関係ないの　徹底的に攻めて攻めて、陥落させなくちゃ！
無茶苦茶を言う　夜々は可笑しくなって、泣きながら笑った
普段はとぼけているけれど、るりは優しい
今初めて、この監獄島にきてよかったと思った

5

それからしばらくは、教練、教練、また教練という日々が続いた。
一週間も経つと、宙良もすっかり慣れてきて、徐々に頭角を現し始めた。
組み打ち術――格闘技の模擬戦ではほかの隊員を寄せつけず、魔術の教練では、大部分の隊員ができない〈念動〉をやってのけた。
少女たちも宙良には一目置いていて、廊下で会えば何やかやと声をかけてくれる　食堂の一件は後味の悪いものだったが、お互いに軋轢があったわけでもなく、わだかまりはすっかり解けていた

雷真が溶け込めたのは、少年仏僧アラタの存在が大きい。

もともと面倒見のいい性格なのか、隊全体に目を配っていて、浮いている者がいれば声をかけ、喧嘩を見れば仲裁し、兵舎の空気が悪くならないよう配慮している。

（あいつはひと回り違う感じだよな　兄貴分っていうのか　）

その高い視点は学業にも反映されている。アラタは汐のライバル格だ。さらに、法力を扱うアラタは挙動も巧みで、機巧戦闘のセンスも――　分

アラタと汐が、首席の有力候補　たな）

少なくとも二人以上の成績を残さなければ、雷真の英国行きは不可能に思われた

その日　夜間の教練が始まる直前、雷真は教練場で汐に声をかけた。

汐、次の小火器教練で何やるか知ってたら教えてくれ」

「知らない――って言うか、何でこっちにくる　アラタと　緒にいればいいだろっ

単語帳をめくりつつ、無愛想に返事をする。明らかに拒否されているが、雷真はへこたれず、後ろから単語帳をのぞき込んだ

お、おっぽちゅにてぃ？　あぱちゅにてぃ？　何だっけ、その単語」

「自分で調べろ」

「しゃあ設問形式で行こう　意味を答えよ

「きみが知りたいだけだろう！」

「集合ー！　[illegible]」

間宮の　喝て　教練が始まる　ますは整列　命じられるまでもなく自発的に点呼　そのあいだは直立不動。全員いるとわかったら、そろって敬礼だ

ここまでスムーズにいけば、間宮の怒声も弱くなる　――飛ばないわけではない。

「どうした、蛆虫ども！　今日はまあまあのデキじゃないか、ああ!?

口をきく必要はない　全員が〈気をつけ〉の姿勢のままだ

間宮はうなずき、「休め！」と怒鳴った。

糸乱れぬ動きて、隊員たちが足を開く　やかて、自動人形が四体、ライフルラックと弾薬ケースを抱えて教練場に入ってきた。

ラックには最新式の小銃と、見慣れない拳銃が収められていた　回転弾倉かなく、上面が角ばっている。単発式――のはずはないが、謎めいた形状だった

こいつは米国の自動拳銃だ。極秘裏に調達したノロモノでな、数年後には米軍が採用を決めるだろう。従来品とは少々勝手か違う　今のうちに扱いを覚えておけ！

まずは雷真、汐、アラタを含む数人が名指しされ、説明なしに拳銃を渡された

最初の命令は「弾丸を排出せよ」、つまり〈弾抜き〉だ　ご丁寧にも初弾が装填されているらしい　暴発させないよう、細心の注意を払う必要がある

雷真は銃を持て余し、がちゃがちゃとスライドをいじった

何だこりゃ　全然わからねえ　つか、どこに弾丸入ってん――
「銃口をのぞくな！　貴か！」
教官殿、これは何がどうなってる　んでありますか？
誰か質問していいと言った！
さらに怒鳴られる　予想の範疇なので、雷真もいちいち動じない
少年たちの顔に不満の色を見てとったか、閻宮は嘲りの笑みを浮かべた
蛆虫の脳みそでは理解できんか？　なら、貴様たちが俺に教えて　れ　ここが戦場なら、
体誰に扱いを教えてもらうんだ？
――そう、これは単なる銃器の訓練ではない
判断力と洞察力を、磨かれているのだ
少年たちが注意深く銃を観察し、構造の把握に努める　沙やアラタなど、霊視――
魔力による透視ができる連中は、すぐに構造を理解[illegible]、すんなり弾を抜いた　それを盗み
見て、ほかの少年たちも次々に弾を抜く
とうした、芦田！　何をモタモタしてやがる！――
閻宮が足を踏み鳴らし、痩せた少年に詰め寄った
初日に閻宮に怒鳴られ、腰を抜かした少年だ　ここの環境にまった[illegible]なじめず[illegible]この
週間で、青白い肌がますます青くな　こいる
[illegible]

弾抜きはできないの[illegible]　キ[illegible]わり・エフティは外[illegible]こいたよった　はあん　・と破裂音
か響き、閻宮の手で火の玉のような光が散った
きゅるきゅると回転していた弾丸が、次第に勢いをなくし、地面に落ちる
弾丸を止めた！　目にしたものが信じられず、雷真は瞠目した
「何た蛆虫　俺を殺したいか？　ええ？
閻宮は涼しい顔た　手には傷もついていない
――念動で受け止めたのか　純度を高めすぎれば、弾丸はそれてしまう　貫通させない
[illegible]の強度を維持しつつ、弾力と粘りでからめ取ったようた
恐る[illegible]き技量と言え[illegible]　おまけに射線を読み切っている
なるほ[illegible]、ろくに知識を与えないまま　子どもに銃を触らせていた理由がわかる　暴発
を押さえ込めるだけの技量か、教官にはあったのた
なら[illegible]芦田よ　上官を撃ち殺そうって奴には、きつ[illegible]仕置きが必要じゃねえか！
[illegible]田をなぶる　芦田はへたり込み、ぶるぶる震え出した
[illegible]　敵地で腰を抜かしてちゃ、なぶり殺しにされるだけ
[illegible]してしまって、雷真は自分の発想に愕然とした
[illegible]の間にか、慣らされている　兵舎の思考に

「よし、仕置きにはこいつをくれてやるとしよう」

間宮が弾薬ケースに手をのばし、げんこつ大の塊を取った。

手投げ爆弾のようだ。ピンを抜き、安全装置を解除して、秒数えて芦田に放る。

芦田の表情が凍りつく。気の毒に、もう火神丁前だ！

強烈な閃光が暴れ、轟音が鼓膜をぶっ叩いた。

隊員たちが目を回し、そろって倒れる。気がついたときには、雷真も死んだカメムシのように引っくり返り、天井を見上げていた。

キンキン耳鳴りのひどい聴覚に、間宮の淡々とした説明が聞こえる。

「——これは我が軍の試作品、〈閃光衝撃投擲弾〉だ。体感した通り殺傷力はない——が、不意を突けば相手を無力化できる。理解できたなら、とっとと起きろ！」

足蹴にされ、叩き起こされる。

雷真はふらつく頭を振りながら身を起こした。ほかの隊員も次々に立ち上がる。だが、芦田だけはもう立とうとせず、さめざめと泣いていた。

心が折れてしまったようだ。間宮はもう芦田には目もくれず、無視して教練を続けた。

小銃の説明に移ろうとして、汐の首に目を留める。

汐の胸元でロケットが揺れていた。——今の衝撃で懐から飛び出したのか。

「貴様！　教練に飾りを持ち込むとはどういうことだ!?」

[illegible]

[illegible]

胸を反らす汐の首から、間宮はロケットをむしり取った。

フタを開け、中の写真を引っ張り出す。絵を写したものなのか、身分の高そうな美少女が、微笑みを浮かべて座っていた。

「ほう……母ちゃんか？　なあ、加賀見。軍の密偵になろうって奴が、素性を明かすようなものを持ち歩くとは、自覚が足りねえよな？」

「あ……！」

間宮が写真を破り捨てる。伸ばした汐の手が、むなしく宙をかいた。

ひらひらと粉雪のように舞う紙片。その紙くずが地に落ちる前に、汐の全身から猛烈な風力が噴き出した。

初日、雷真の前で激怒したときと同じだ。完全に自制心を失っている。

とっさの判断で、雷真は叫んだ。

「何しやがんだ発教官！　没収でいいじゃねえか！」

内心わざとらしいと思いながら、汐を押しのけ、間宮につかみかかる。

隊員たちがぎょっとなり、汐も面食らった様子で、その場に立ち尽くした。

「何の真似だ？　手を離せ、糞が！」

間宮が雷真の手を払いのける。ひとにらみされただけで、冷や汗が出た。

間宮は今日に聞こえるような大声で、自動人形に命令した
「こいつを懲罰房に放り込め！」
しん、と気温が一度も下がったような気がした　おかげて、懲罰房というのがどれほど
素敵な場所なのか、雷真にも想像できた
自動人形が四体、雷真を拘束し、廊下に引っ張っていく
教練場の出口で、相棒の夜々と出くわした
「ええ、貴方、今度は何をやらかしたんですか!?」
「悪いな、夜々　俺、今夜は別のとこに泊まる」
軽口を叩きながら、自動人形に引き立てられて行く　その背中を、アラタも、小田も
沙も、ほかの隊員たちも、そして夜々も、呆然と見送った

6

「懲罰っつか　ほとんど拷問じゃねえか……」
簀巻きにされ、吊り下げられて、自動人形にボコボコにされる
何とも前近代的な「棒打ち　百回」の後、雷真は独房に転がされた
簀巻き状態では身を捩ることもできず、全身に打撲傷を負っている　……ほどくも自由だ
が、寝返りを打つだけで激痛が走り、うめきが漏れるありさまだ

[illegible]
「笑い事じゃありません！」
鉄扉の向こうから、くぐもった夜々の声がした　のぞき窓の格子越しに、夜々の小さな
頭が見える　扉にもたれて立っているらしい
「おまえ、そこで　夜明かしする気か？　風邪引くぞ」
「どこにいようと夜々の勝手です　夜々のことより、自分の心配をしてください！」
俺は大丈夫だって　頑丈なだけが取り柄だし　だから、もう戻れ
「夜々は貴方のお人形です　ここにいたって、問題ないはずです。」
つんとして拒否する。雷真は笑って、まぜ返した
「俺の相棒なら　ちっとは言うこと聞いてくれよ
「結局は命令する気……!?　相棒って言ったくせに、嘘つき！
命令はしてねえ！　お願いしただけだ！
夜々は頑なだ　雷真も扉にもたれ、声を潜めてつぶやいた
おまえがそこにいるとさ、男同士の内緒話が……できねえんだよ
のぞき窓から指を出し、廊下の奥を示す
曲がり角の向こうで、長い黒髪が揺れている
沙の髪だ　どうやら、夜々がいなくなるのを待っているらしい

事情を理解すると、夜々は無言で扉から離れた
お、わかってくれたの——
「貴方は馬鹿ですー」
がいんっ、と鉄の扉を殴る　衝撃がモロに伝わり、雷真は目を回した
痛みのあまり、うずくまる　そこへ、汐が忍び足で寄ってきた
「　いよう、汐　わざわざ　面会にきてくれたのか」
こちらから声をかける　だが、いつもの憎まれ口が飛んでこない
のぞき窓からうかがうと、汐は唇にこぶしを当て、ためらうような仕草をした
その、さっきの　ロケットのことなんだ
「ああ　あの写真、おふくろさんだって？」
「うん　ぼくの母——らしい」
「らしい？」
ぼくは養父母のもとに厄介になってるんだ　親が四人もいるんだよ　いいだろ？
暗い顔をしているかと思ったが、そんなことはなかった
汐はむしろ誇らしげに、まっすぐ雷真を見つめていた
好きなのだろう、養父母のことも
汐は恥ずかしそうに、自らの非を認めた
「さっきは、ごめん　母上の写真はあれだけだったから　頭に血がのぼって、

[illegible]
[illegible]
思いかけず、素直な言葉を聞いた　雷真は驚きつつ、次の言葉を待つ
「あのね　ぼくはきみを、野蛮で、短絡的な、ただの馬鹿だと思ってたんだ」
「罵倒したいだけか!?　おまえ、何しにきた!」
「けど、その評価は改める」
[illegible]口角が上がり、唇がやわらかな曲線を描く
「[illegible]が思っていた以上に、きみは理知的で、思慮深く、複雑な思考の持ち主だ
俺は、懲罰房に入れられるような阿呆だぜ？
「ぼくを助けるために、わざと問題を起こしたんだろう？」
そりゃ買いかぶりだよ　そんなつもりは
「ありがとう」
切れ長の眼をしっとりと潤ませ、汐は微笑んだ
まっすぐな視線がむずがゆくて、逃げ出したくなる　だが、あいにく独房は狭く、逃げ場がない　仕方なく、茶化すことにする
おまえが素直に礼を言うなんて、明日は爆弾でも降るんじゃねえか？
「何だと!?　という意味だ!」
言葉通りの意味だよ!

〜み合っ たが——にらめ〜〜は、ほんの数秒で終わる
〜は噴き出し、屈託なく笑った
こんな笑顔は初めてだ 何と言うのか、やけにまぶしい
〜笑顔を見ているうちに、雷真は鼓動が速くなるのを感じた
何だ、この動悸は 何でこんなに
〜かわからない こんなふうに胸が高鳴ったのは、ここ数年では、硝子と向き合った
〜らいた 硝子相手なら ときめき」と言ってもいいが、今は男——
あまり考えないようにしよう）
とりあえず、新しい自分を発見したとは思いたくない
——監獄島はひどいところだし、先のことには不安もある
たが、雷真には相棒がいて、同じ目標を持つ学友たちがいる
案外、ここでの暮らしも悪くない
久しぶりにほがらかな気分で、雷真は独房の夜を過ごした

それからさらに か月、教練に明け暮れる日々が続いた
し〜、秋も半ばに差しかかった頃、最初の関門 中間試験 が行われたのだ

Chapter 3 月下の[illegible]

〜ん —— こ 何だ〜 遠足？」
〜としい横文字が 雷真の口から出た
飯ごうや糧食を背嚢に詰め込みながら、夕は半眼で答える
「教官の話を聞いてなかったのか 麓の樹海に突入、山中の指定地点を経由して、 〜
〜日以内に出発地点まで戻ってくるんだよ 山林の踏破行軍だ
「何か きつそうだな 山伏の修行かよ
「修行〜なくて、中間試験の〈実技〉課題だ 組分けは房ごと——つまり、きみはぼ〜
組だからな 絶対に足を引っ張るなよ」
「わかった わかったよ
雷真は渋々の真似をして、支給された背嚢に荷物を詰めた
装備もすべて軍の支給品だが、何を持って行くかの判断は任されている 軽〜して速度
を稼ぐか、重装備で安全に行くかは、チームの方針しだいだ」

雷真は頭上の相棒を振り向いた。
夜々は手持ち無沙汰な様子で、上のベッドで足をぶらぶらさせている。夜々の金剛力を使えば、どんな重装備もやすやすと持ち運べるのだが
汐が雷真の思考を読み、先回りして言った。
「言っとくけど、自動人形は連れて行けないからな」
「け！　マジか？」
「本当に話を聞いてないんだな……中間試験は〈実技〉〈学科〉〈機巧〉の三つ。人形を使うのは〈機巧〉だけで、ほかの二つはきみ自身の能力を見るんだよ！」
「何だって……!?　ならもう、望みがねえ……！」
「簡単にあきらめるなよ！」
汐がイライラと髪を振り乱す。今日はいつにも増して情緒不安定だ。試験が近いので、気が立っているらしい。ただし、もう雷真を嫌ってはいない。不手際を見かねた様子で、荷造りを手伝ってくれた。
夜々のほっぺたが餅のようにふくれたことに、雷真は気付かなかった。

翌日、間宮教官に引率されて、訓練隊員五十名が陸軍幼年学校を進発した。
引き潮で露出した桟橋を渡り、陸へ上がる。正午前には、富士南側の丘陵地に到達した。
ここが当面の〈本陣〉となる。ここから富士に向かい、五合目あたりのチェックポイント

[illegible]樹海[illegible]一時間ほどの距離[illegible]
[illegible]の陣地とあって、隊員たちの士気は高い。スタートから[illegible]は[illegible]汐が快調に距離を稼いだ。雷真も清々しい気分で、どんどん歩を上げて行く。
「やっぱ山はいいよな！　気持ちいいぜ！」
剣術道場にいた頃、師範の山ごもりに付き合わされた経験がある。雷真自身は、山にも高地にも慣れていた。
おまけに快晴。色づき始めた樹木が美しく、空気も風景も申し分なしだ。
「いい景色だな。夜々も連れてきてやりたかった」
「物見遊山じゃない。モタモタするな！」
ぼすっ、と後ろから背嚢に体当たりされる。
――汐だ。軽く汗ばんだ首筋が、なぜだか無性に艶かしく見える。
雷真はくるりとあたりを見回し、ほかの隊員たちの様子を[illegible]かった。
お坊ちゃん連中は山道に慣れてねえな。こりゃ、楽勝じゃねえか。
「上を見るな。審官に選ばれるのは[illegible]人だけだ」
細いあごをしゃくって、汐が進行方向を示す。
[illegible]山肌の上、かなり高いところに、背嚢が四つ揺れていた。あれは――
「[illegible]の組だな。俺たちもペースを上げるか」
[illegible]
鉄壁の樹海はかなり歩きにくそうだ。今日は体力を温存しよう。

地図を片手に、慎重な意見を述べる――いつかいれば俺は楽だなあ、などと思いながら、雷真は意気揚々と山を登った
こうして何事もなく二日が過ぎ、太陽が西側の稜線に隠れる頃
「ここまでだ、蛆虫ども！」
どこからか間宮の声が飛び、山道沿いに轟いた
試験そのものが終わったのかと思って、雷真はあわてた。まだ六割も進んでいない！
「明朝の合図まで行軍を禁じる！　野営の準備にかかれ！」
ああ、そういうことか――つか、あのオノサノどこから話してんだ？
オノサノとは舐めた呼び方だな、貴様！
いきなり怒鳴られる。木刀で枝葉を払いつつ、間宮が森から現れた
いかなる魔術の賜物か、間宮は一瞬で現れた。服は綺麗なままで、長距離を歩いた様子がない。先ほどの命令も魔術による伝声らしいが、自動人形は見当たらなかった
――神出鬼没だな。天狗かよ
「俺の声が聞こえる者は集合！　急げ！」
間宮が大音声で呼ばわる。しばらくすると、周辺の隊員たちが息せき切って集まってきた。
一度――ではない。ざっと二十名ほどで、丁寧よく整列する
半日以上同じ班だったアラタの顔と、日焼けしたアラタの顔がない
アラタはずいぶん先に行っていた。苦団の方は――脱落したか
「……目の前の者と、組め。ペアで一つの鍋を――
「優秀な連中は割り込し地点に……ト、……ありがたく頂くがいい」
皆が身を硬くする。差し入れとは何の暗喩だろう？
罰か、叱責か、重い荷物でも渡されるのか
だが、間宮が背嚢から取り出したのは、たっぷりの水と、野菜、肉の塊だった！
食材を各班のリーダーに回しながら、間宮はさらに指示を飛ばした
「秘密裏にカレー鍋を製造する。半刻以内にテントを設営し、ここに取れ。以上！」
――カリー鍋とは何だろう？　よくわからないが、冷えた体に鍋はありがたい。雷真は腹の虫をあやしつつ、沙と二人でテントを設置した
乾いた場所を選び、周辺に溝を掘る。教練で何度もやらされているが、夕刻の暗がりの中では想像以上に手間取った。それでも格好だけは整え、教官のもとへ戻る
間宮は各自にかまどの構築を命じ、火を起こさせた
普段は魔術に頼っているので、これはなかなか難しい。生木にはなかなか火がつかず、煙ばかりがもくもくとあがる。悪戦苦闘することしばし、すべてのかまどに火が起き
ようやく調理が始まった
だが、少年たちの手際は悪い。雷真はタマネギにひっかかれ、思わずうめいた
「何これ――料理ってのは戦場だな――」
「ここ、……しゃないか、蛆虫――ええ？」

間宮が雷良を小突き、横から包丁を奪った
「手本を見せてやる　おい蛆虫ども、見よう見まねでやってみろ！
少年たちをどやし、手本を見せる　その手つきは洗練されていて、割烹の板前のようだ
間宮はたちまち具材を切りそろえ、下味をつけて、ざるに放り込んだ
金色の粉と小麦粉でルーをつくり、野菜を煮込んで、ルゥと混ぜ合わせる
嗅いだことのない香りが漂う　香辛料に刺激され、少年たちの腹がうるさくなった
間宮は苦笑して、噴きこぼれ始めた飯ごうを小した
火を止めろ　米が蒸れたら、各自、勝手に食ってよし！
それから、ちょっと残念そうに言い添えた
「カリー飯ってのはな、もっと煮込んだ方が美味いし、何より二日目の味が……」
誰も聞いていない　少年たちは飯ごうの米を木椀に突っ込み、上から汁をぶっかけ、とっくに食べ始めていた
口の中を火傷し、おこげをハリハリ噛みながら、しかし雷良の手も止まらない
「あち！　あちち！　何だこれ!?　何だこれ!?
「がっつきすぎだ　下品だぞー」
たしなめる汐の口元にも、米粒がついている
間宮が少年たちを見回し、普段の木刀の代わりに、スプーンを振り上げた
「自分で作った飯の味はどうだ？　許す、感想を言ってみろ！

第四 [illegible]

歓声が[illegible]の瞬間、[illegible]疲れが[illegible]吹き飛んだ[illegible]

食後は飯ごうを洗い、後片付けをする
残飯や野菜の切れ端など、生ごみの処理に、間宮は特にうるさかった
「ゴミは残すな！　野営の痕跡は敵に重大な手がかりを与える！」
ということなので、雷良は離れた水場で飯ごうをすすぎ、ついでに顔を洗った
風は冷たく、湿っている　気温は[illegible]じ程度だろう　これも間宮によれば、
「体温が[illegible]し、六度を下回れば死ぬ！　夏場でも凍死できることを忘れるな！」
ということなので、朝露やにわか雨にも注意が必要だ　裸の山肌は特に危ない　吹きつける風で簡単に体力が奪われる
ぶるるっと身震いをひとつ　ふと見上げた夜空に、無数の星々が輝いていた
[illegible]葉を失う　ほんの一瞬、何もかもが馬鹿らしく思えた
星の[illegible]生に比べれば、俺の[illegible]生なんて　それこそまたたきみたいなもの——
雷良はあわててかぶりを振った　聞いたふうなことを！
撫子は死んだ　もう何もしてやれない
たとえ俺の[illegible]生がまたたきみたいなもので、蛆虫程度の命だとしても
〈俺はあいつを殺す[illegible]！　そのために[illegible]軍の密偵になるんだ[illegible]

星空から目をそらし、決然としてテントへ戻る
その途中、岩の上に腰掛けて、人を眺めている者に気付いた
教官だ
確かに、間宮だ　彼の前には缶詰が二つ、縦に重ねて置かれている
雷真はそちらに近付き、異臭に鼻をひくつかせた
「その缶の中身、何だよ？　何か、すげえ変なニオイがするぞ」
間宮は軍手をはめた手で、謎の液体が入った缶を持ち上げた
「上は豆茶、下は空き缶だ」空き缶の腹にナイフで穴を開け、固形燃料を放り込む、
缶の中を見せる　燃えているのが〈固形燃料〉らしい　油を固めたものか
「燃料に火をつけりゃ、即席のかまどになる　冬期は特に重宝するぜ」
「へえ……野営の技術も、どんどん進歩してるんだな」
「……とも　ますます戦争がやりやすくなる
「……にしても、ひでえニオイだ　鼻が痛くなる
「鉄鬼め　この香りがかぐわしいんだろうが　……すぐに言わずに飲んでみろ
……いっと鼻先に突き出される　熱いは熱いが、持てない熱さではない　雷真はしぶしぶ
受け取り、缶に口をつけて、ずず……みた
「に——……けえええ！」
珈琲を飲んだのは初めてだ　思わず吐き出す雷真を、間宮は豪快に笑い飛ばした

「……嘘！……間、……背波よ……な……た……嘘！」
「……不思議な気分……しな……
……こないたあんたにつかみかか……たこと……謝りたい
「はあ？　何を言ってやがる　貴様はもう、ガ……ノリ懲罰を受けただろうが
「……し俺が密偵に選ばれたら、あんな行動、していいはずがねえ
「……しは学習したらしいな　その通り、敵地であれをやりゃ、……発でアウトだ……が、
「……はそのままでいいんじゃねえかと、そんな気がする」
思いがけない言葉だった　見切りをつけられた……かと、不安になるほどに
「なあ、雷真よ　てめえは無駄に勘がいい　おそらくもう、監獄島のカラクリにも察しがつい
ているだろう　だから、言うんだがな
自嘲めいた笑みを浮かべて、間宮はらしくないほど弱々しい声で言った
「戦場は地獄だ　口にすりゃ安っぽい言葉だが……そうとしか言えねえんだ
だから、ああやって、俺たちの根性を鍛えてるのか？
「根性とか、精神力とか、そんな曖昧なもんじゃねえんだよ　たとえば、敵に拘束された
……敵地に潜伏しているとき——長期間にわたって正気を保ち、健康を維持し……意欲
……、注意力を持続させるのは、並大抵のことじゃねえ
……それができなければ、密偵の任務はまっとうできない
怒りや不安、仲間にも苛まれるだろうさ　それでも情動に流されず、合理的に行動でき

るかどうか。まして、戦場じゃ理不尽な状況が続くぜ？」
雷真ははっとした　そう、あの島こそ、まさにその『理不尽な』環境だ。
あんな監獄みたいな、いやーな場所に放り込まれてよ　毎日罵声を浴びせられ、道理に合わねえ仕打ちを受ける――使い物にならねえ奴は、すぐにわかるさ」
雷真の脳裏に、生気の失せた、芦田の青白い顔が浮かんだ　彼は鍛えられてタフになるところか、ますます弱く、脆くなっている。
学校と言いながら、あの島は隊員を鍛えるためにあるのではない
選別するために、存在しているのだ
「中将が課す指導方針は、正直、俺にもよくわからん　だが、俺の経験から言わせてもらえば　理に適ったやり方だな。戦場じゃ、まともな奴こそが異常なんだ
間宮は珈琲に月を映し、手の上でもてあそんだ。
「ためらったら、死ぬ。誇りなんざ喰らえた　躊躇なく、何も考えず、ただ上官の命令通りに引き金を引く　そういう連中でなけりゃ、味方を死なせる」
――自分が死ぬだけなら、本人の責任で片付けられる。
だが、他人の身勝手が味方を全滅させたなら、自業自得では済まされない。
「ビビって勝手に引き金を引けば、待ち伏せがハレて全滅だ　捕虜を逃がしたばっかりに居場所がバレて全滅する　人間性なんざ犬にでも食わせろ。まともな奴は足手まといだから、短期間で異常者に仕立ててあげる――それが近代的な軍人教育だ」

[illegible]
大人の務めじゃねえのかな？」
「そんな教育が正しいってんなら、この世界が――時代が間違ってんだ」
間宮は『そうだ』とも『違う』とも言わなかった。
ただ、どこか寂しげに笑って、雷真の尻を叩いた
「とっとと寝ちまえ、我が！」

そしてもう一人、別の誰かとの距離も、山の魔力が縮めてくれた

2

[illegible]かり夜が更けて、虫の大合唱が響き渡る中。
雷真と夜は、まんじりともできずにいた
「[illegible]」
「[illegible]あのよ」
ひゃあ！　びくひくっ
終始、こんな感じた。雷真は身を起こし、抗議した。

いい加減にしろ！　さっきから何だよ!?」

「た、たって　っ

意識するな！　こっちまで妙な気がしてくるだろ！」

みよ、妙な気ってどういう気だ！　それに、きみを意識なんかしてない！」

い合って、にらみ合う　濡れた瞳にどきりとして、雷真も挙動不審になる

タンクトップから露出した肩と鎖骨が、嫌に美しく見えて、落ち着かない

「い、意識してねえなら、びくびくすんなよ　普段、同じ部屋で寝てるだろうか」

そ、そうだけど　こんなに近く　ないじゃないか

テントは狭い。実質、枕を並べているのと同じ距離だ

テントの布地を通して、おぼろげな月光が落ちてくる

ほどいた汐の髪が光を浴び、神秘的なきらめきを返す

あまり意識したことはなかったが、汐の目鼻立ちは繊細で、少女のようだ

何　見てるんだよ。

「　おまえこそ」

無意識に見つめ合っていたことに気付き、　人は同時に顔を背けた

（な、何だ、この空気は　！　何でこんな感じになってる　!?）

沈黙が痛い　これがいわゆる「間が持てない」という状況か

いや、待て。それは男女のあいだで生じる現象ではなかったか？

胸[illegible]現象——

これはまずい　男も[illegible]何か

「雷真、きみさ　」

「な、何だ!?」ぎくぎくっ

何のために、英吉利に行きたいの？

返事に詰まる。誰かに志望動機を訊かれたのは初めてだ

ほかの隊員相手なら、適当にごまかすところだが、雷真は正直に答えた

妹の——　門の仇を討つためだ」

「　赤羽天全？」

やはり、知っていたか　雷真はうなずき、

「あいつが例の学院にいるって話だ。けど、俺みてえなガキ　人じゃ、英国に行くことも

行ったところで、倒すこともできない　軍の後援がいる」

それはひょっとしたら、軍の思惑とは相容れない動機かもしれないが

「へえ、仇討ちができるなら、密偵になれなくてもいいの？

まあ、そうだな　だが、今のところ、ほかに手段はない」

「　そうか　そうだね」

「　いつおまえはどうなんだ　なぜ密偵を目指す？

汐はためらった　だが、雷真に訊いた手前、自分だけ黙っているのも気が退けるだろう

しばらくして、ぽつりぽつりと語り始めた。
「加賀見の家はね、もう百年も前から、魔性を失ってるんだ」
式神が呼べないってことか？　けど確か、加賀見ってのは名門だろ
かつて名門だったし、今も〈ご家老衆〉――お館さまの相談役だ」
「[illegible]――だからこそ、余計に立つ瀬がないのだ
[illegible]　汐が秘めた魔性は大きい
何年か前、雷真はいざなぎ〈名門〉の子女と相対している。汐から感じる魔力、支配力は、名家嫡出の子ともと大差ないように思えた
「おまえ、血のつながった親は？」
「実の父はどこの馬の骨とも知れない最低最悪のクズ野郎で、実の母は　宗家直系の不良娘
――だってさ　ぼくは身分違いの恋でできた子どもだよ、最悪だろ？」
あっけらかんとして言う　湿っぽくならないよう、敢えて明るく言ったのか
「そんな忌み子を、養父さんと養母さんは、あたたかく迎えてくれた　我が子と同じよう
に大事に育ててくれたんだ　だから、ぼくは二人に報いたい」
汐の瞳に、強い光が宿った
「加賀見の威光を、ぼくが取り戻す」
「それで密偵か　普通に式神使いを目指してもいいんしゃねえか」
「わかってないね。世界はこれから戦国時[illegible]よ。軍人は向こう百年の花形職業。

[illegible]門は貴族[illegible]食[illegible]繁[illegible]　次[illegible]軍閥政治[illegible]
[illegible]たしかたい　まあ　大人たちの耐け足りなんだけどさ
へろり　と舌を出す　言っていることは物騒なのに、仕草は可愛らしい
雷真は、汐の言葉に同意できなかった
軍閥政治に食い込む？　そんなことが可能なのか？　武器として利用されて、捨てられるだけじゃないのか？　かつて、赤羽一門がそうだったように
「要は養父母に楽させたいって話だろ　そこは素直に尊敬するぜ」
真正面から誉められて、汐は居心地が悪そうに目を伏せた
そんな冗談じゃないよ　打算だって、ちゃんとあるんだ。ぼくがほら、ものすごく出世すればさ、クズ人間の方の親父だって　、
雷真が言葉に詰まっていると、汐は冗談っぽく、
金をたかりにくるかもしれないだろ？」
――逞いねえ！」
人は笑った　将来の不安を追い散らすように、明るく
笑いが収まると、ふるふるっ、と汐が震えた
寒いか？」
ちょっとね　平地はまだ寝苦しいくらいなのに、山ってのは無駄に冷えるね」
だな　毛布やるよ　枚がけにしろ」

「いいよ　きみが来いだろう」
「なら、一緒に使おうぜ」
「それなら——って、ためた！　これは近い！」
汐が胸をぐいぐい押してくる。手が小さくてくすぐったい。
「あっちいけってば！　遠ざかれ！　半径一メートルに寄るな！」
「テントから追い出す気か！　無茶言うな！」
押し合いになる。互いに息を乱しつつ、暴れる汐を押さえつけた瞬間、何か「いけない
こと」をしている気になった。大いに狼狽し、あわてて汐を離す。
「だから妙な気にするなって！　男同士だろ！」
「きみってやつは、本っ当の本っっ当に、鈍いな！」
またしても鈍いと言われてしまった。ショックを受ける雷真の前で、同じくショックを
受けたらしい汐が、頭を抱えてうずくまった。
「人形の方はとっくに気付いてるってのに……もう一ヵ月だぞ？　ずっと寝起きをとも
にして……疑われもしないのか？　さすがに自信かな……くる……」
「人形って、夜々のことか？　何の話だよ」
「この馬鹿……これでも……わからないな……ら……！」
やけくそ気味に雷真の手をつかみ、タンクトップの中へと導く。
初日、風呂場での一件が脳裏に甦る。果たして、あのときと同じ、『ふにょり』という

感触が伴
山の一瞬後、違う手触り、やわらかな弾力……の間……違う
餅や猫の腹みたいにやわらかい。感触が癖になり、しばし、雷真はもみしだいた
なあ……これって……ふにふに
「……」
いわゆる……ふにふにふにふに
「……ぴく」
「これはあああああ！」
うおおおお……と叫んで山野を駆け巡りたい心境だった。
うるせーぞ雷真！　『安眠妨害だ！』　黙って寝ろ！
別のテントから罵声が飛ぶ。二人は同時に毛布をかぶり、その下で向かい合った。
「何で!?　何でおまえにそんなもんがついてんだ!?」
「ついてる……違う！　……ついてないんだ馬鹿！」
「ついてない——って、……じゃあ……おまえは……おんな……」
こくり……汐が波打ち、うなずいた……がわかる
これまでの一か月半が走馬灯のように駆け巡り、雷真は気が遠くなった。
恥ずかしいやら、気まずいやら。相手が男子と思えばこそ、女子の前では絶対にしない
ようなふるまいをしてきた。少なくとも、女子を風呂に誘ったりはしない。

あんなふうに、お互い裸で、肌を撫で回すような真似は――

ぼっ、と顔から火が出た。それは汐も同じようだ。山の寒さが一瞬で吹き飛び、常夏の島で毛布をかぶっているような気分になる。

「なるほど……確かに俺は鈍い。鈍いーに、大馬鹿野郎だ……！」

ほかほかと暑くなった毛布の下で、雷真は情けない声を出した。

「何で今さら言うんだよ……最後まで隠し通せよ！　意識しちまうだろ！」

「勝手なこと言うな！　訊いたのはきみじゃないか！」

「夜々のやつ……知ってたんなら教えろよな……ひとことも言わねえで……！」

「……だから、きみたちを信じる気になったんだ」

毛布の中では表情がわからない。だが、汐は――笑っているような気がした。

「きみたちは、秘密を言いふらすような輩じゃない」

「……そりゃ、まあ、おまえもこっちの秘密を握ってるわけだし」

「なら、おあいこじゃないか」

「……そう、かな？」

「そうだよ」

なら、同盟成立……か？

汐は毛布をはねのけ、起き上がった。

淡い月光が、華奢な少女のシルエットを浮かび上がらせる。

「[illegible]細い[illegible]……[illegible]……[illegible]……[illegible]……！」

――！？　魅力的な笑顔だった。

「きみが助けてくれれば、ぼくも助かる……最近、また大きくなってきて……」

最後は消え入りそうな小声だ。だが、雷真にはしっかり聞こえてしまっていた。

さんざんもてあそんだ感触を思い出し、再び頭に血がのぼる。

雷真は思わず念仏を唱えた。南無阿弥陀仏、色即是空、空即是色……

汐がはっとして、あわてて胸を隠した。

「な、なな何を考えてるんだ！　もう触らせないからな！」

「触らせろなんて言ってねえ！　思ってもいねえ！」

「ど……どうだか……！」

お互いに怒った顔で背を向け、毛布をかぶり、テントの端まで遠ざかる。

互いの距離は、背中合わせの五十センチ。

体温を感じ、鼓動すら聞こえそうなこの距離で、二人は眠れない夜を明かした。

3

「中間試験の結果を発表する！」

「……最下位の名か……呼……」……

「俺かよ⁉」

雷真は天を仰いだ　隊員たちがどっとわく　たちまち間宮の叱責が飛んだ

「黄が！　最後に雷値になった奴が勝者だ　間違えるな！」

「了解！」

声がそろう　ぴったり　このあたりに、教練の成果が出ている

雷真もかろうして声を張ったが、心の方はかなりズタボロだった

実技試験も機巧試験も好成績だったのに　どうして総合で最下位なのか　──もちろん、学科試験が最悪だったからだ

ちなみに汐は総合一位、アラタは　位をキープしている

今回ばかりはさすがの雷真も気落ちして、夕食も摂らず、房に引きこもった

「……ふん　る間に勉強しろよ、馬鹿」

不意の声に顔を上げると、汐が雷真のベッドをのぞき込んでいた

「落ち込んでる暇はないだろ　最終選抜まではあと一か月半しか──いや、考えようによっては、まだ四十日以上もあるな、うん！」

わざとらしくガッツポーズを取る　雷真は噴き出した

「何だ、汐　心配してくれてんのか」

「誰が！　きみは馬鹿を自覚して、少しは勉強しろ馬鹿！」
ばさばさと大量のノートを投げつけてくる。
「おいやめろ。何すん——これ、参考書の写しか？」
要点をまとめて、抜き書きしたものだ。新聞の切り抜きも貼ってある。
「書いて覚えるついでにまとめたやつだ。馬鹿は馬鹿らしく、要領よくやれ！」
捨て台詞のように言って、汐は風呂場に向かった。夕食中のこの時刻、風呂場は無人になる。汐が気兼ねせず入れるのは、この時間か、消灯間際のどちらかだ。
雷真はノートを拾い集め、中身を確認した。丁寧な字で、びっしりと書き込んである。
汐は『ついで』と言ったが、雷真のためにまとめてくれたのは明らかだ。
害債の座を争うライバルなのに、敵に塩を送ってくれた。
あいつ、いいとこあるな……
「敵に心配されちゃおしまいです。貴方は本当に勉強した方がいいです」
上のベッドから、ぴょこん、と夜々の首が突き出された。
そのままするりと降りてきて、ノートを開く。
「夜々が勉強に付き合ってあげます。中間試験で間違えたところを復習しましょう」
それより、強制支配の練習をしねーか？」
夜々がぱちぱちとまばたきをする。それから、あきれたようにため息をついた。
「毎日やってるじゃないですか…………今夜くらい、[illegible]をやるべきです」

り！！す[illegible]
してますよ、ちゃんと」
夜々は取り合わず、ノートをベッドの上に並べていく。
「[illegible]そ、それに、頼ってくれていいんです。夜々は貴方のお人形なんですから」
「でもよ……やっぱ、ほら、何つーか」
そんなに勉強が嫌いなんですか？　そんな調子じゃ害債になれませんよ？」
見透かされてしまった。雷真は赤面し、そして観念した。
確かに、優先順位を間違えては駄目だ。魔術師としての技量もあるに越したことはないが、害債には知性こそが必要だろう。
「仕方ねえ……よろしくお願いシマス」
「はい、お願いされます」
夜々は嬉しそうにうなずいて、参考書を手に取った。
それからしばらく、雷真は夜々の監督のもと、汐のノートで勉強した。
「貴方の英訳はめちゃくちゃです。『私は日本人です』って言ってみてください」
「そんなの簡単だろ。あっ……あい、じゃぱにーず、あも！」
「[illegible]ソノコ、待ちてすか？」
「待ってねえ！」

夜々はノートをパラパラめくり、五文型のまとめを示した
「英文なんて基本は五つしか型がないのに、どうして覚えられないんですか？」
「アレン連中、自己主張が強すぎなんだよ　俺が俺が・てうるせぇ」　主語の次は動詞
し　普通、最後に出るのが結論だろ　［illegible］つしみがねえつつしみが！」
「でもそれ、漢語と同じですよ」
漢語ならば、なじみがある　門の奥義書や戦術書も、古いものは漢語で書かれている
のた　英語も漢語の　種だと思えば――
――考えてみたら俺、漢語も苦手だった
ですか
奥義書が全然解読できず、奥義〈紅翼陣〉の内容も理解できていない
本当、あきれるくらいの馬鹿だな、俺は
しょげ返る雷真を見て、夜々はあわてたようだ　珍しく優しい声になり、慰めを言う
「言葉なんて、必要があれば覚えられます　あちらの国では、小さな子どもだって英語を
しゃべるんですよ」　いざとなれば、単語だけでも通じるはずです
「［illegible］たよな」連中、この言語で日常生活送ってるんだもんな
「そうですそうです　英語はひとまず置いておいて、算術を先にやりましょう」
雷真のやる気が消える前に、数学のノートを開く

簡単な方［illegible］
「［illegible］算術はどうな［illegible］
「［illegible］るかめ算です！　日本にもあります」
夜々は懇切丁寧に　解法の手順を解説した
説明がわかりやすく、かろうじて理解できる。雷真は大いに感心した
「おまえって　頭いいのな」
「もちろんです」
夜々は誇らしげに胸を張った　さすがは人形の雪月花、思考能力も高等だ　出会って間
ない頃、雷真を「馬鹿な子ども」扱いしていたのもうなずける
「英語だって、もうペラペラだしよ　この英字新聞、読めるんだろ？」
「あ、はい　知らない単語もありますけど　文法と同じで、段落の最初に結論がくること
が多いので、何となくで読めますよ」
「［illegible］相棒は優秀なのに　俺の力はしょぼすぎるな」
「［illegible］は駄目だ」　いつにも増して劣等感を覚える。
これまでに、［illegible］最下位　という現実が響いていた
良家の子弟たちに比べれば、自分は学がない　それはわかっていたつもりだが　身体能力
圧倒［illegible］は成績1位なの［illegible］はないか　という期待があった

相棒の優秀さもまぶしい　本当に、俺なんかが使い手でいいのか
もう！　今日は全然、貴方らしくないです！
夜々が怒り、雷真に体当たりしてきた
それでも気持ちが収まらないのか、雷真を押し倒し、馬乗りになって怒る
試験の結果が何ですか！　勝てないなら、勝てるまでやる——馬鹿は馬鹿でも、貴方は
ういう馬鹿のはずです！

——」

「貴方に足りない部分は、夜々が補います　そのための相棒なんですから！
訴えるように　それから、恥ずかしそうにまつ毛を伏せた
大体　貴方のすごさは、周囲に見せつける必要なんてないんです　貴方のすごさは、
夜々だけが知っていれば

何をやってるんだよ、へ　ドの」でさ
底冷えのするような声が聞こえ、雷真と夜々はあわてて離れた
格子戸の前に風呂上がりの汐が立っている　ほかほかと立ちのぼる湯気とは裏腹に、瞳
は冷たい　富士山中の冷気なども、比較にならないくらい、冷たい
乳繰り合うのは勝手だけど　ここが　人部屋だってのを忘れるなよ
「乳繰り!?　してねえ！」

竊竹な姉弟　雷真は姉妹を感　、目をそらしかけ
あいつめ　俺を変態扱い　やがって
　本当に失礼です
たよな　おまえはわかってくれると思って——
夜々は古井戸のような目をして、不気味な半笑いを浮かべていた
　なかったよ」
ふふ　ちゃんちゃらおかしいです　夜々の美貌にもなびかないような唐変木、あんな
まな板で誘惑できたなんて　ぼくのときみたいになんて
ぐらぐらと床が揺れる　雷真はひねり殺されるのも覚悟したが、夜々はそうせず、
ひくっ　うわーん！
ひと吠えして　房を飛び出していった
よくわからないが、助か　た
ほ　と安堵したとき、少年たちがどやどやと房に駆け込んできた
おい雷真！　起きてるか!?
先頭はアラタだ　何があったのか、彼らの表情は張り詰めている
アラタは鋭く房内を　瞥した　汐のベッドにも目を留めたが、仕切りのカーテンが閉
気配はない　アラタは仲間たちと顔を見合わせ、雷真の耳元に口を寄せた

「六田が見当たらない　今、皆で探している
は、見当たらないって——」
とある単語に思い当たり、雷真は飛び上がった
「脱走か」

1

し、しくしくと泣きながら、夜々は薄暗い廊下をさまよっていた
勝手に金剛力が起動して、涙がガラスのような粒になる　床を転がり、やがて飛び散る
涙の粒を、夜々はひどく悲しい気分で眺めた
〈あの人は、本当に馬鹿です……〉
山から戻って以来、汐と雷真の関係は、少し変わった
お互いにわかり合っているような、信じ合っているような、そんな感じ
夜々が立ちたかった場所に、いつの間にか汐が立っている
あの夜、懲罰房の前で、雷真と汐は何を話したのだろう？
山で何があったのだろう？　どんな話をしたのだろう？
気持ちが千々に乱れる　何せ汐は、正真正銘、人間の女の子なのだ
[illegible]敵うわけがない

「[illegible]か」
「[illegible]」
「[illegible]初めて[illegible]な想いをするのなら　どうして夜々に心を与えた
のか……　心なんてなければ、こんな気持ちになることもなかったのに
——夜々ちゃん？　どうしたの？　そんなに泣いて」
声をかけられる　自分が泣いていたことも忘れて、夜々は顔を上げた
目の前に、花のように微笑む、るりがいた
答えられず、視線をそらす　そんな夜々の涙を、るりはハンカチでぬぐってくれた　子
どもをあやすような手つきだ　子ども扱いされて腹が立つ——どころか、夜々は[illegible]
甘えた気持ちになり、るりにしがみついた
一人で抱え込むのは、限界だった
だが、ここには硝子がいない　雷真の〈所有物〉として存在している夜々には　相談で
きる相手がいない　そもそも、一個の人格として扱ってくれる者がいない
るりだけだ　夜々を少女として扱ってくれるのは
るりは夜々の手を引いて、食堂の休憩室へと導いた
湯飲みにお茶を注ぎながら、冗談めかしていう
「あんなところで泣いてないで、暇なら遊びにいらっしゃいな　お洗濯とか　お掃除とか、
やることはいっぱいあるんだから」

「た、遊びにきてないです」
「…、勝ち込んでるより、いいでしょう？」
にっと笑う　それだけで、夜々の気持ちは少し軽くなった
「…、夜々ちゃん？　好きな人にはね、好きって気持ちを伝えないとダメ
…り核心を突かれ、夜々は湯気を噴きそうになった」
「ななな、何を言うんですかいきなり！」
「え？　た、て、恋の悩みでしょう？」
「違います！　誰にも言いませんけど、別に、そんなしゃ
必死に否定する　るりは何もかも見透かしている様子で、
伝えないと伝わらないの　あのへ生懸命にえ…てるような男の子は、特にね　ふ
らにで目的の女の子は、すぐ勘違いしてくれるんだけどねえ
でも、伝えるなんて　そんなの　何て言えばいいか
気持ちを肯定してしまったも同然の台詞だが、夜々はそんなことにも気が回らない
るりはくすっと笑って、教え諭すように言った
無理に言葉にしなくてもいいのよ　女の子はね、好きな人の前では、自然と可愛くなるようにできてるの　夜々ちゃんも、もっと素直になれば　眼や、指先や、体全体から、好きって気持ちがあふれるわ」
「……　…　……　夜々…　…ってです…」

「…か可愛く…　…　夜々…　場合…
ならないわね？」
金剛力は人外の力、巨象のようなものだ　雷真が警戒するのも当然だった
夜々を怖れる必要がないくらい、雷真が強い魔術師になってくれればいいのだが　それはまだまだ先の話だろう
「これはもう、意識して可愛くなるしかないわね　頑張って素直になりなさい」
「……軽く言わないでください　大体、どういうのが人間の『可愛い』なのか、夜々にはわかりません」
人形も人間も変わらないと思うけど　夜々ちゃんの目から見て、素敵だな、可愛いなって思う女性はいないの？」
夜々の目から見て……
「その人をお手本にして、仕草や話し方を真似してみるといいわ　あとは、雷真さんをよーく観察することね　雷真さんがほかの子にデレっとした瞬間を、はっきり覚えておくのよ　それが雷真さんの好みってことでしょう」
「な……なるほど……」
そちらは得意だ　雷真の鼻の下が伸びる瞬間は、見逃さない自信がある
一朝一夕に「可愛くなる」ことなど不可能だ

たか　るりが言ってくれたことは、確かに夜々の転機となった　泣いているだけの日々から解放され、努力を模索するきっかけを、ようやくつかんだ気がする
戦う前から負けを認めて　悲劇に浸るだけの　生は、嫌だ
だってそれは、彼の「相棒」に相応しい生き方じゃない
叶わない願いをかけ、敵わない敵に挑もうとする——
彼に相応しい人形に、私もなりたい
夜々は居住まいを[illegible]、床に手を突いて、丁寧に[illegible]
「ありがとうございます
いろりが口うるさく教えてくれた作法だ　今だけは、姉に感謝してもいい
「夜々は頑張って、可愛くなります」
「そう、その意気よ」
るりは太陽みたいに微笑んで、きゅーっと夜々を抱き寄せた
「まあ、夜々ちゃんはもう、十分に可愛いけどね」
「お　お世辞はいいです」
じゃれ合って、笑い合う
るりの言葉を、夜々は今「お世辞」と切って[illegible]
たが、不思議と予感があった

芦田が脱走したという話は、燎原の火のごと　隊員たちに広まった
どこの軍隊でも脱走は重罪だ　訓練隊員であっても懲罰は免れない
[illegible]の座を争う競争相手とは言え、同じ釜の飯を食い、一緒にシゴキを受けていれば、仲間意識は芽生える　隊員たちは今日か芦田の無事を願い　行方を捜し始めた
ひとまずアラタの案内で、芦田の房に向かう
[illegible]は房を見回し、私物がないことに気付いた
「[illegible]つもねえな　芦田はいつ、いなくなったんだ？」
「[illegible]　夜間教練のとき、もういなかったと思うか
アラタが首をひねる　後ろの仲間たちにも確認を取ったが、否定する意見は出ない
山口は芦田のベッドを見た　寝具はきっちり畳まれ、整頓されている
「こりゃ脱走じゃねえ　これから逃げようって奴が、ベッドを作って行くかよ」
俺なら　立つ鳥あとを濁さず　た
「[illegible]が出来る奴だからさ　俺にはオチコボレの考えがわかる　少しも発見[illegible]
「[illegible]、布団を膨らませて偽装——くらいはするぜ？」
俺も[illegible]　芦田がこんな綺麗に畳むかな　あ[illegible]身の

回りのことは下手だった これはひょっとしたら、〈影法師〉の……
アラタがその単語を口にした途端、隊員たちの空気が変わった
全員が黙りこくり、青ざめる 雷真はわけがわからず、無遠慮に訊いた
「影法師って何だよ？」
「……少なくとも二人、それで鬼籍に入っている」
「鬼籍……って、死んだってことじゃねえか！」
アラタは真顔だ。冗談を言っている顔ではない
「おまえがくるまでの……か月で、帰郷した奴が五人いる。形式上は自主退学だ そのうちの一人は、後で遺体が見つかった」
「……!?」
「船着場と、焼却炉。それから、橋に引っかかっていた 細って、干からびた――即身仏のようになってな」
その光景を想像してしまい、晩飯の豚足を戻しそうになった。
「それが本当なら、殺人事件だぞ……？」
「……そうとも……だが、教官たちは何も教えてくれない 連中は全員、ちゃんと帰郷したことになっている 今でもな」
アラタの声は冷め切っている 隊員たちにも、はっきり不信感が漂っていた
……こっ……く

「……死体は本物か…… 誰が見……」
最初の……を見つけた奴は、もう……いない
「もう……って――」
たずねる前に理解する。
「見つけた奴が死んだのか！ 芦田も見つけた……人なのか？」
「これはわからない。……つめの死体を発見したのは汐だ。だが、芦田も目撃した……可能性……おまえが入隊する直前、山王って奴が帰郷してな」
……した 初めてこの島にきたとき感じた、不快なおそ気を思い出す。
「芦田か山王を見つけていたのなら……芦田のビビリにも納得がいく」
雷真は少し考えてから、……周を見回し、はっきりと言った。
「この件、開宮教官に相談しよう」
隊員たちは血相を変えた 自分の自動人形を呼び出そうとした者までいた。幸い、房は狭く、アラタが立ちはだかっているので、戦闘にはならない
「雷真、俺の話を聞いていたか？ 教官が信頼できるか、わからない たとえば――この島に軍の機密か隠されていて、気付いた奴から処分されているのだとすれば」
「そんな、馬鹿げた話が――いや、あり得る……のか？」
アラタは雷真の肩に手を回し、言い聞かせるように言った。
「……考えろ 仮に上の仕業だとすれば、ヤブヘビもいいところだ 俺ら全員を海に沈める

——榊中将には、そのくらいのことができる」
それは隊員たちの気持ちを代弁したものだ　皆おし黙り、雷真と目を合わせない
　なら、おまえたちは大人しくしてろ　俺一人だけで、閻宮に相談してみる　大人を味方につけるなら、あいつ以外、考えられねえ
隊員たちはぽかんとして、珍獣でも見るような目で雷真を見た。
「正気かよ？」「あの教官が？」　信じられるって言うのか　？」
ああ　脱走に気付いたのは俺だけってことにしてくれ　とばっちりは俺がひとりで引き受ける。——て、影法師ってのは？
隊員たちは顔を見合わせ、口にするのも嫌そうに　説明した
「ちらっと見ただけだが　、中いんた」「もやた」　忍び寄ってくる」
要領を得ない　いよいよ怪談じみてきた
たが、それと似た特徴を持つ自動人形を、雷真は既に目撃している。
夜々の自動人形〈八十単〉だ
考えてみれば、八十単の魔術回路がどういうものなのか、精緻には把握できていない
形状を変化させるだけ——ということはないだろう。
〈なるほど　影法師ってのと似てるから、こいつら夜々を警戒してたのか〉
仮に八十単に、イラを作るような能力があるなら、夜々の仕業　とも考えられる
[illegible]くらいの気持ちだ。

[illegible]それぞれ[illegible]調子
[illegible]のか
仏心というやつだ　おまえだけ危ない橋は渡らせない　おまえが教官と話しているあいだ、俺は教官室の近くを見張っていよう　何かあったら呼べ」
「——ああ　じゃ、行こう
頼もしく思いながら、教官室のあるフロアへ向かう。
教官室のドアは開いていて、閻宮が麦酒をやっていた。
どうした、虱虫。ノケた面しやがって」
赤ら顔で胴間声　既に出来上がっている。
あきれる一方、警戒もした　こんな隙だらけの閻宮を見るのは初めてだ。
「おい　酒なんか飲んでていいのかよ？
今夜はもう店じまいだ　かまうもんかよ
投げやりに笑って、ぐいっと麦酒をビンごとあおる
雷真は勝手に部屋に上がりこみ、閻宮の向かいに座った
何だ、てめえもやるか？　飲ましてやるぜ？」
「……、そんな気分じゃねえ。つか、ガキに勧めんな
そんな気分？　はっ、確かに餓鬼の発想だな　飯食えはわかるせ　酒がいらねえくらいイイ気分の方が稀だってな

六田はどこに行ったんだ?
前置きもなく問う　間宮はうすうす察していたらしく、さらりと答えた
「帰郷したよ　ここを放校になり、除籍された
それは本当のことか?」
間宮はつまみの焼き鳥をくわえ、乱暴に食いちぎった
「こっちが放り出したわけじゃねえ　野郎から出て行きたいと[illegible]たのさ　さっき、
挨拶にきたぜ。俺の顔なんざ、見たくもねえはずだが」
「あいつ　何て[illegible]てた?」
「お世話になりました、とさ」
「あんたは、何て応えたんだ?」
「とっとと消えろ、蛆虫」
——やはり、そうか
富真にはもう、間宮という人間がわかりかけていた
「これっきりなら、優しい言葉のひとつもかけてやりゃよかったのに」
「[illegible]か　いいんだよ、あれで」
「[illegible]も、恨まれるぜ?」
「それがいいのさ　この先の人生、あいつは俺を憎み続ける　貴教官が俺の邪魔をした
[illegible]、[illegible]自分[illegible]こまれ[illegible]言わねえ」

[illegible]
[illegible]たか[illegible]道はかなか[illegible]優しすぎるんだよ　気持ちかな　戦場に出[illegible]
[illegible]味方を死なせる奴た　とこの隊にも居場所はない」
[illegible]、敢えて憎まれ役を買って出たのか
[illegible]自分は[illegible]生、憎まれ役で通すというのか
[illegible]このオ[illegible]サンは　信頼できる!」
[illegible]の帰郷したという。先ほどの言葉に嘘は感じられなかった　つまり　六田は本当に
[illegible]て帰郷したのだ。
[illegible]すれば、無事た　富真は安堵して、軽口を叩くように[illegible]
「鬼教官殿にしちゃ、見切りが早すぎるんじゃねえのか?　もとねちっこくシゴいて、
[illegible]り指導してやれば、使いものになるかもしれないぜ　それに、落伍したのをあんた
[illegible]にして、あいつのためになるのかよ?」
[illegible]さあな　何がそいつのためになるかなんて　そいつにし[illegible]わからんし　死ぬま[illegible]
[illegible]んだろうよ
[illegible]冷酒をラッパ飲みする　カラになったビンを放り出し、間宮は天井を見[illegible]
「餓鬼を育てるってのは、難しいもんだな　何が正しいのか、サッパリわ[illegible]
[illegible]けどまあ、これ[illegible]はい[illegible]　教官が悪いとか、学校が悪いとか、[illegible]
[illegible]んた

——どういう意味だ」
「教官が絶対に正しい、なんて時代がきてみろ　信総火の一た
信　火の一?　何だ、そりゃ」
爆弾抱いて敵陣に突っ込め——そんな命令に誰もが従う、狂った時代の合言葉よ
はあ?　さすがに　くるわけねえだろ、そんな馬鹿な時代
「くるんだよ　俺は留学中、―に政治学をやっていた
留学とは初耳だ　語学に堪能なのは、海外への留学経験があるからか
「教授が言ってたぜ　全体主義ってやつか、いずれ起こる」
どんなのだ、それ?
日本は侍の国だった　軍事政権なんぞ珍しくもねぇか、この先、軍人が威張り出したら気をつけろ　そういう国は民衆にも階級をつけたがる　たとえば親父が小隊長、町内会は中隊長、誰も階級が上の人間に逆らえない——そんな命令系統ができちまったら、日本は終わりだ　国が滅ぶまで戦い続けるぜ
うすら寒い風が、首筋を撫でたような気がした
帝国主義が蔓延し、対外侵略と植民地化で自国の財政を支えようとする、この時代
弱みを見せれば列強に敗北し、属国——すなわち植民地とされる
それが嫌なら　強国になるしかない　日本のような小国が大国に勝つためには、国民が致団結しなければならない。

国家そのものが　軍隊　である　軍事政権であり　軍事国家
その成立だけは、さけなければならない
だが、そんな意見を軍人の朝宮から聞くとは、意外だった
あんた、何でそんなことを教えてくれるんだ?
「てめえは軍人にゃ向かねえ」
すっぱり言われる　朝宮は身を起こし、凄むように雷真をにらんだ
「悪いことは言わん　ここを出て、故郷へ帰れ
「　そりゃ無理だ　帰る場所なんかねえし、俺はもう後戻りできない
「だが、待ってるお嬢さんもいるだろう?
許嫁——日輪のことか?
なぜ知っているのか　雷真は目を伏せ、消え入りそうな声で抗弁した
赤羽　門は滅亡したんだ　今さら俺なんか、婿に取るかよ
めえがそう思うのは勝手だが、お嬢さんの方は納得してない　とにかく　喚、会って話し　みろ　実はな、いざなきの連中、外務卿を通して国外の
雷真!　教官!——
切迫した声をあげ、アラタが部屋に飛び込んできた
日焼けした肌は土気色で、ひたいにはびっしょり冷や汗が　ている　芦田　いなく

たときとは、はっきり緊張の度合いが違った。
アラタはらしくなく震え、上ずった声で言った。
「か死んだ！
——は？　何だって？」
「汐が　死んだ！」
声を踏み抜くような勢いで、間宮が立ち上がった。
野牛の猪のごとく、猛烈な速さで教官室から飛び出して行く
雷真もそれに続き、アラタとともに廊下に飛び出した。
（汐が死んだって　何の冗談だよ）
汐が死ぬなんて、そんな馬鹿なことはない　何かの間違いか、誰かの策謀か、とにかく事実ではないと思っている。アラタが漂わせる緊迫感、教官の動揺ぶりを、どこか現実感のない——絵空事のように感じながら、雷真は走った。
アラタは階段を駆け降り、教練場へと雷真を導く
イーが煌々と焚かれ、教練場は嫌に明るい。無数に揺らめく影は、隊員たちのものだ
こちらに気付き、影が道を開ける。人垣が切れてみると、そこに——
半身を食いちぎられた汐が、無惨な姿で、血だまりに沈んでいた

Chapter 4 竜宮城にきたる者

汐

雷真の熱い吐息が首筋にかかり、汐はぞくぞくっと震えた
山の寒さなど、もう忘れている　全身が熱く火照り、燃えるようだ。
薄暗いテントの中で、汐は雷真に組み敷かれている。
——あの夜の続きだ
ときどき、ときどき　自分の鼓動がうるさい。恥ずかしくて、目が合わせられない。
「な　何するんだ、馬鹿　やめろよ　」
「阿呆、俺だって不本意じゃねえんだ　ここまできて　やめられるかよ」
雷真の手が汐のタンクトップをめくり上げる。彼らしくない、荒々しい手つき　汐は布地を戻そうとしたが、手首をつかまれ、押さえつけられてしまった
雷真の手が止まる。——彼に胸を見られている　思いっきり
恥ずかしい　たか、その恥ずかしさが、不思議と心地よく思えた

雷真の手が肋骨に触れる。それだけで、甘い快感が走る。
膝を割って雷真の脚が侵入してくる。互いの内ももがこすれて、くすぐったい。
雷真は夕のひたいにひたいを当てて、最後通牒のように言った。
「……いいよな？」
夕は反射的に「だめだ！」と応えた。恥ずかしいし、軍規違反っぽいし、第一、怖い。
これから何をされるのか、よくわかっていない。
しかし、だ。
彼になら、何をされてもいいかな？　なんて思ってしまって――

夕は、目を閉じたのだ。

[illegible]と跳ね起きて、夕は自分の胸を押さえた。
[illegible]と激しい脈拍を感じる。夢の中と同じように。
夕は兵舎のベッドにいた。雷真と夜々の勉強を邪魔しないよう、大人しくしているだけのつもりで、いつの間にか寝入っていたらしい。
枕に突っ伏して、悶える。
（我ながら……なんて馬鹿な夢を見たんだ――！
[illegible]

[illegible]展開になっていたら[illegible]
「――っあああああ……っ」
夕は布団に頭を突っ込み、じたばた暴れた。
羞恥心で人が死ぬなら、ここで死んでもおかしくはない。
（働けよ、自制心！　理性も仕事しろ！）
いや、これは気の迷いだ。そうに決まっている。秘密を共有しているから、雷真を過度に評価し、頼りたいと思う無意識の何ちゃらかんちゃら――きっとそうだ！
大体、あんなことが許されるはずがない。雷真はいざなぎ家の姫、上門日輪の許婚だ。一方、夕は〈御家老衆〉加賀見家の養女である。主君とも言うべき方の、未来の良人に横恋慕するなど、冗談でも許されない。
ずきっと胸が痛み、夕は正気に返った。
（いや待て。何でぼくが胸を痛める必要があるんだ？）
[illegible]が誰と結婚しようが、どうでもいい。あいつはしのぎを削るライバルであり、同じ[illegible]であり、秘密を握り合った仲間だ。それだけの関係だ。
[illegible]でも、それ以下でもないぞ！
[illegible]あいつは馬鹿だが、利用できる奴なのだ。
[illegible]決して頭が悪いわけではない。味方につければ[illegible]

それに、汐は雷貝が嫌いではない。むしろ好――
「この馬鹿！　死ね！　ぼくなんか死んでしまえ！」
「何を騒いでいるのです、汐？」
ぎくっとして振り向くと、カーテンの隙間から、ヒトみたいな眼がのぞいていた
ボディの表面は黒い流体で、火炎のように揺らめいている。
自動人形〈八士牢〉見慣れてはいるが、いきなり出くわすと心臓に悪い
汐はベッドの上で座り直し、正座で八士牢と向き合った
「別に　どうも、していません」
『そうは見えませんでしたが？』
球体状の首を傾げる　心を読まれている気がして、汐は思わず顔を伏せた
『あの少年に心を許してはなりませんよ』
――許してなどいません　利用できると思っただけです」
八士牢は何も言わなかった　所詮は操り人形――使い手の表情は伝えてくれない
『まあ、よいでしょう　次の命令を伝えます』
「はい。承ります」
『死になさい』
――え？」
『今は死ぬのです。この国の未来のために』

2

暗闇[illegible]

[illegible]い爪が伸[illegible]の視界を闇が覆[illegible]

帝都郊外、古くは東海道の入り口だったあたりに、硝子の屋敷はある。
既に夜は更け、月が庭を照らしている　気の早い鈴虫がかまびすしい。
いろりは縁側に座り、斜めに足を崩して、ぼんやり月を見上げていた
時間がゆったり流れている　いっそ、もどかしいほどに
ほんのひと月半前まで、屋敷はいつも賑やかだった。
雷真は夜半まで修行を怠らず、荒々しい魔力が敷地内を飛び交っていた。体術の鍛錬をしていれば、こぶしが風を切る音や、上を賦る音が聞こえてきた。加えて、夜々が何やかやと騒ぎを起こすので、いろりは妹を追い回し、説教しなければならなかった
それが今は――することがない
十の硝子は、海外から取り寄せた機巧の専門書を読みふけっている。時折り筆を走らせては、思いついた考えを書き留めていた
その充実ぶりがうらやましい　邪魔をしてはいけないと思いつつ、いろりは寂しくなって、のそのそと畳の上を這い、上の方へ膝を進めた。

硝子が気付き、笑い出した
「まあ、いろり　お行儀の悪い」
いろりは頬を染め、歩いて[illegible]に近付き、着物のすそを払って膝をついた
「[illegible]夜々は無事でしょうか」
「無事に着いたと連絡を受けているわ」
「それからもう、ひと月も経ちます」
思わず必死な声が出る　硝子は筆を置き、苦笑した
「心配性ね　何がそんなに気になるの」
「て、それは、屋敷から遠く離れ、一か月にも及ぶ道行きですので　何か間違いが起きたらと思うと　斎貞殿を氷漬けにしてしまいそうで[illegible]」
「物騒なことを言わないで頂戴　間違いって——たとえば、どんな？」
「それはもちろん　破廉恥と申しますか、ふしだらと申しますか」
「男女のことは当人の問題よ　まして夜々は坊やが好きなんだもの　坊やが夜々を女の子として愛してくれるなら、それは喜ばしいことじゃないかしら」
「[illegible]それは　その、　その通りなのですが[illegible]」
反論できない　[illegible]のいうことはもっともだ
ふと　いろりの脳裏に晴れやかなイメージが浮かんだ　角隠しをかぶり　白無垢の晴れ着を[illegible]夜々が、嫁いで行ってし[illegible]。

[illegible]

「[illegible]御剣、[illegible]の際　斎貞殿を[illegible]」
[illegible]が青ざめた顔でぶつぶつつぶやいていると[illegible]
[illegible]目を立てて、行灯の炎が揺れた

[illegible]の声が低くなる　硝子はすぐに状況を察し、目を細めた
「こんな夜更けにひと目を忍んで　風流だこと」
「無粋と言うべきでは？　ずいぶん数がいるようです——小紫！」
「ここにいるよ！」
軒から逆さに頭がのぞく　屋根の上にいたらしい、
敵の陣容を探っているのだ
「[illegible]」
「[illegible]を引き締めてゆけ　ゆめゆめ、警戒を怠るな」
[illegible]に[illegible]の魔術を使い　姿を消した　いろりは落ち着かず　縁側に[illegible]たり、戻ったりしながら、周辺の物音に耳を澄ます
気配は十数人——[illegible]も　明らかに敵意を持って　距離を狭めてくる
「[illegible]何者だろう　[illegible]は　こんなことはなかったのか」

抜ったよ!」
虚空からにしみ出るように、小紫の姿が浮かび上がった
「たくさんいるよ。町内ぐるっと囲まれてる感じ!」
「どのような者たちだ?」
「えーっとね、軍服着てた!」
軍たと――?
子を振り向く 硝子のまわりには、いつの間にか、ねずみや鳩、猫がたむろっていた
いずれも硝子が造った自動人形で、使い魔のように使われる者たちだ。
硝子は左眼を閉じ、機巧眼帯に集中している 使い魔が集めた画像情報を眼帯に転送し
レンズに投影しているのだろう。
「確かに軍人 のように見えるわね 自動人形で武装している」
「では、私が蹴散らしましょうか?」
軽く問う 「この秋刀魚は煮付けにしましょうか?」とたずねるのと同じ調子だ
硝子は嬉しい顔をした
「それも乱暴ね あちらの言い分くらい、聞いてあげましょうか」
賢明な判断です」
不意に、知らない男の声が割り込んできた
いろり、ぎょっとして く。 人、初 にいたかのように、庭

の男 月化の感覚器を一回
端整な 枚目た すっと立つ姿は、俳優のように決まっている
男は洗練された所作で、優雅に一礼した。
「夜分、失礼。花柳斎先生のお嬢は、かねがねうかがっております」
「――こちらもうかがってますわ。ようこそ、加賀見大佐。それとも、〈蛇蝎卿〉とお呼びした方がよろしいかしら?」
硝子が名を呼ぶと、男は麗しい顔をしかめ、苦笑いになった
このあだ名、できればご遠慮したいところです。私を嫌う連中がつけた、忌み名のようなものですから。ただ、上官に『蛇蝎のごとく嫌われている』のは否定しません
女性にも嫌われているのではなくて? 女の屋敷に許しもなく、夜更けに、それも大勢で押しかけるなんて、お行儀が悪いわよ、坊や」
まるで子どもをあしらうような言葉。侮辱も同然だが、加賀見は顔色も変えず、
非礼はお詫びいたします こちらも職務でありまして」
職務――面白いことをおっしゃるのね」
女性に好かれそうですか?」
ええ とても景色のいい坊やだし
光栄ですが、景色がいいとは、そちらのことではと思います 竜宮城かと思いましたよ

見目麗しいお嬢さん方ばかりで——まあ、所詮は傀儡でしょうが
侮るような響き　硝子の表情が翳め、ため息が漏れた　加賀見は微笑み
「本日は花柳斎先生のお迎えにあがりました　どうぞ、ご出立のご準備を願います」
「急な話ね　どちらへ連れて行ってくださるの？」
「それは現地でお答えしましょう
これで話は終わりとばかり、門を示す
門外にはもう、臨戦態勢の軍人、自動人形が[illegible]めいていた
従わなければ攻撃する、という意味だ　高圧的すぎる態度に、いろりは仰天した
「世迷言を申されますな！　それは、連行するということではありませぬか
銀髪に冷気をまといつかせ、挑むように前に出る
「侮られては困る　[illegible]には軍の統義、確固たる後ろ盾があるのです」
後ろ盾——さて、それはどなたのことを申しているのか
加賀見は遠くに視線を投げ、芝居がかった仕草で首をひねった
ああ、先に伝えておきますが、榊中将は明日にも職を解かれるそうで」
「な……っ！」
花柳斎先生に、その逸品をご覧に入れましょう
すっと手を上げる　合図に合わせ、金髪の乙女が天から降りてきた
まるで天女のようだと思う　音もなく宙をすべり、ゆっくりと着地する　きらめく金髪

[illegible]
その顔を見て、いろりと小隼は同時に息をのんだ
大きな眼は円よりひし形に近い　単純な美よりも、作り手の好みが反映された造形だ
ひたいの広さ、頬の丸み、あごのとがり具合、小鼻の感じ……いずれもかすかに崩し
が入り、創造主の洒脱な作風が出ている
それは、ほかならぬ花柳斎硝子の作風だった
「これは……近衛師団の、職員……では……」
主の顔色をうかがう　硝子はさして興味も示さず、無言で加賀見を見つめていた
人形の方もまた、硝子を気にしたふうもなく、無表情で突っ立っている
いろりは怪訝に思った　あれでは本当の傀儡だ　私たち雪月花のような生気が感じられ
ない　意志があるのかどうかも、わからない
加賀見は職員を示し、次々と言葉を継いだ
もちろんご存知でしょう　榊中将の強硬な主張で近衛師団に配備された傀儡です　先日
この職員が陛下のお命を狙いましてね
かくん、といろりのあごが外れた
いえ、どうかご安心を　陛下はご無事です……ここで暴れられても、私が抑えま[illegible]れ
たけの技量がありますれば、現状、私が預かっている次第
——そんなことはどうでもいい　いろりが恐怖したのは、そこではない

騎富士が陛下を襲った？　では、その作者たる硝子の立ち場はどうなる――!?
いろりの疑問を置き去りにして、加賀見は穏やかな声で説明を続けた
「春宮院は事態を重く受け止め、事実確認の密命を下知しました　御禁制品〈禁忌人形〉の製造、流通、ならびに人形罪の嫌疑で、私は人形師花柳斎を拘束、尋問しなくてはなりません。無論、中将も同容疑で手配中です。本来は警察があたるべき事案ながら、軍主導の捜査となりましたこと、どうかご承知おきください」
いろりはすがるように主を見た。だが、硝子は反論するどころか、
「まあ、もう露見したの？　思ったより早かったわね」
などと言い出した
さーっといろりの頭から血が引いた。
「え――事実？　事実なのですか!?」
硝子は無表情の騎富士を見やり、憐むような目をした
「おっしゃる通り、その子は私の作。この花柳斎、痛恨の失敗作よ」
「ならば、ご同行願います。――ああ、ご心配は無用、蛇蝎などとは言われていますが、私は紳士のつもりですよ？」
女と見紛うほどの、妖艶な流し目をくれる
いろりは魔力を蓄えながら、慎重に主の意向をうかがった。

「――」
「仕方ないわ　榊中将が失脚したのなら、私を護ってくれる人はいないもの」
「あ、みんなで旅行行くの？　今から？」
小柴が屈託のない声ではしゃぐ　どうやら、事態の深刻さがわかっていない　主は主で、開き直ったように落ち着いている
（やはり、私がしっかりしなくては）
いろりは表情を引きしめ、静岡の地にいるはずの　大事な妹に想いを馳せた
（雷貝殿、夜々の方は、どうかお頼みいたします――）
つい先ほど亡き者にしようと思ったばかりなのだが、いろりはそんなことも忘れ、祈る――ように、西の方角に頭を下げた

＊

――わき腹まで引き裂かれ、血まみれになった体――
それが汐のものだと認識した途端、雷貝はもう血だまりに飛び込んでいた
「汐！　おい！　何で誰も手当てしてねぇんだ!?　汐　しっかりしろ！」
傷が大きく、どこをつかんでいいのかわからない　生ぬるい血をかきわけ　どうにか胸

に腕を回し、抱え込むように引き起こす
刹那、強烈な違和感が雷真を襲った
——が、その正体をつかむには、冷静さが足りない
雷真は取り乱し、ただ必死に呼びかけた
「夜々！ 目を開けろ！ 夜々！」
「よせ、雷真……御仏を、辱めるな」
アラタが冷静に止める。雷真の肩に置かれた彼の手は、震えていた
雷真は周囲の同輩たちをにらみつけ、怒鳴った
「何なんだよ、これは！ 誰の仕業だ！ 誰がやった!?」
「し、知らない……！」「俺たちがきたときには、もう……」
隊員たちが目をそらす。逆上している雷真には、それがひどく不審に見えた
「まさか、てめえらの誰かがやったんじゃ……!?」
「よせ……雷真……」
こふっ、と血を吐いて、夜々が弱々しくいった
息を吹き返した！
アラタも驚き、後ろからのぞき込んでくる。雷真は夜々を抱きしめ……
「夜々、気を強く持て！ 今助けてやる
島を……出るんだ

焦点の合わない目で　汐はぼんやり雷真を見た
あれは　僕たちには　どうしようも　ない
あれ　って何だ？　誰にやられた？
汐は答えない　意識が混濁しているようだ　ただ、うわごとのように
[illegible]
[illegible]　わかった　俺たちは逃げる　大丈夫だ　心配するな！
[illegible]　約束する　汐は最後の息を吐き、動かなくなった
雷真は呼吸するのも忘れ、しばし、汐の死体を抱いていた
理解が追いつかない　何だ　これは？　どういうことだ!?
耳障りな警笛が響き渡り、閣官が教練場に入ってくる
[illegible]かれ、蛆虫ども！　[illegible]に戻り、別命あるまで待機！　[illegible]歩も出るなよ！
先ほどは猛獣のようだったが、今はもう落ち着き払い、平然とした足取りだ　事務方の
職員をともなって、ただちに教練場を封鎖した
隊員たちは命令に従い、大人しく教練場を出る　[illegible]か雷真の肩を叩き、うながして
[illegible]れたが、雷真は動く気になれなかった
教官　汐が　」
言葉にならない　何を言ったところで、死体が生き返るわけでもない
[illegible]

閣官　[illegible]
[illegible]　度も[illegible]わせるな
[illegible]かよ[illegible]！
[illegible]れ！
強引に雷真から骸を奪う　雷真は激昂した
おい！　何しやがる――
激情は、すぐに消え失せた
閣官の眼の奥に、圧倒的な殺意を見たからだ
閣官は遺体を事務方に任せ、雷真を教練場のすみ　引きずっていった
乱暴に壁に叩きつけ、見た目だけは叱責のように、声を殺してささやく
「貴が！　死にたくなけりゃ、大人しくしてろ！」
反抗的態度を咎めているようで、実際は別のことを警告している
目[illegible]つ行動をするな、と言ってくれているのだ
汐は　誰にやられたんだ　[illegible]
知[illegible]ん
殺ス[illegible]れてもいいだろ！　俺だって、少しは役に[illegible]
平手が飛んで、雷真の頬が鳴る
閣官は雷真を放り出し、顔を背けて、こう言った

蛆虫に語ってやることなど何もない　だから、これは独り言だ。
はっとして、傾聴する　園宮はさらに声を潜め、続きを言った
「この島には、得体の知れん化け物が棲みついている」
――その化け物の仕業、なんてお為ごかすつもりじゃねえよな？
合理的結論だ　てめえらには　猫の鈴――魔力感知器がつけられている
初耳だった　思わず自分の野戦服を確認してしまう　もちろん、素人同然の雷真によく
わかるような、甘い細工ではないだろう
蛆虫の誰かが魔術を使えば　教官たちはすぐさま把握できる　汐を殺した奴は隊員の誰
でもないし、ここの職員でもない」
隊員でも、職員でもないとすれば――
「誰かが、忍び込んでる」
ありえん　中将がなぜ　海の上に兵舎を造ったと思う
侵入りを監視するため、か？」
「そうだ　水ってのは空気よりも魔力伝導率が高く、音や気配を遠方に伝える　まして、
ここは全面を探知魔術の装甲板で覆われている　転移は困難、侵入するには
口部――正面玄関、屋上、船着場のいずれかを通らにゃならん
無論、開口部には専用のセンサーが取り付けられているだろう

閲課
敵中な設備だ　俺が知る限り　日本
誰と、誰だよ？
「一人は花柳斎って人形師　もう一人は、いざなぎ一門のお館だ
雷真は目をむいた　まさか、ここで硝子の名が出てくるとは！
日本一の人形師か、日本一の魔術師――そうじゃなけりゃ、化け物だろうさ
――アラタたちか？――した、形法師――じゃっか、
連中の目撃談が真実ならば、そいつはおそらく　はぐれ人形だ
はぐれ――禁忌人形？
禁忌人形とは、生きた人間のパーツを素材に使った自動人形だ
一般的に使われるのは臓器や筋肉など　それらを自動人形の予備電源として、あるいは
魔力の増幅装置として組み込み、人形の性能を引き上げる　そうして造られた人形は、主
から独立して行動でき、単独で魔術回路を起動できる
ただ、死体からは製造できず、あくまでも〝生きている人間〟からパーツを取る必要
がある　ゆえに禁忌であり、日本でも取り締まりの対象だ
――俺の相棒は――我々は――
その禁忌人形だ　どうやって造られたのかは、雷真も知らない
隊員の誰かが、禁忌人形を持っているのだとすれば

今まさに思っていたことを言われ、心臓がぎゅっと収縮する
「俺の監視をすり抜けて、勝手に魔術も使えるだろうぜ
だが、何のために？　何のために冴を殺す？」
「加賀見冴は密偵の最有力候補だった。どうしても密偵になりたい奴が消した——いや、それはねえな。それじゃ、自分が疑われる。こんだけ派手に暴れて、密偵の話が立ち消えにでもなりゃ、完全に裏目だ」
「なら、ほかにどんな動機がある？」
「俺が、それがわかってりゃ、こんなところで腐っちゃいねえよ」
乾いた自嘲を漏らす。腫れぼったい目元に、疲労と憂鬱がにじんでいた
——悔しいのだ。この男も、雷真と同じように、敵を憎んでいる
「もう行け。後は大人が何とかする。戦鬼は房で大人しくしてろ！」
今度こそ、追い立てられる。雷真は重い足を引きずり、教練場を後にした

4

房では、夜々が帰りを待っていた
血まみれの雷真を見て、顔色を失くす——が、言葉はかけてこない
[illegible]な言葉なら受けとめられ[illegible]
[illegible]
こんな愚は犯した[illegible]ない。夜々が黙っていてくれるのは、正直ありがたかった
血に汚れた上着を脱ぎ捨て、ベッドに上がる。ふと横に目をやると、開いたカーテンの向こうに、からっぽのベッドが見えた
冴は、いない
当たり前だ。だが、現実感がない
冴——本当に、逝っちまったのかよ。冴っ
おまえは密偵になって、親御さんに報いるんじゃなかったのか
「死んじまったら、叶わねえじゃ——」いや、違う！——
天啓のような閃きが生まれる。先ほどの違和感の正体を、今つかんだ
そうか。冴は、殺されたわけじゃない！
何も気付いていないふりをして、布団に潜り込み、頭をフル回転させる
房の中に、八十吽の姿は見当たらない。先ほどの教練場にもいなかった。残骸もない
破片さえ、存在しない！
冴が誰かに攻撃されたのなら、八十吽を使って反撃するだろう。もちろん、敵が事前に十吽を破壊したとも考えられるが
いずれにせよ、抗戦した形跡が認められなかった
あくまで殺人と考えるなら、犯人は冴の顔見知り、ってことだ

たが、教官も訓練隊員も魔術は使っていない、という

では、殺人でないとすれば、どうだ？

あの死体が、汐のものではなく――ニセモノだとすれば？

とある理由で、雷真の直感は、あれが汐本人ではないと告げている

死体に見せかけるだけなら、魔術で何とかできる……だろう

あの場には、閑宮やアラタもいた。彼らを欺くのは、並み大抵のことではない。使い手が一流であるか、使われたのが強大な魔術か、どちらかだ

しかし、動機がわからない。汐の死を偽装しなければならない理由は何だ？

それから小一時間、雷真は必死に知恵をしぼった

生まれてから今日まで、こんなに頭を使ったことがあるかというくらい、考える。状況を推し量り、とるべき手段を模索しているうちに、知恵熱が出た

軍の思惑だとか、神中将の思惑だとか、そんなものは、雷真にはわからない。想像すらできない。今の今まで、そんなことは考えたこともなかったから

この島で密かに人死にが出ていた――なんてのも、今日初めて知ったことだ

思考はどんどんこんがらかる。だが、あるいはそれゆえに、複雑な事象にとらわれないシンプルな発想が浮かんだ

誰かが汐の死を偽装した、とする [illegible] のは、何だ？

[illegible]

「何 [illegible] 手間 [illegible]」

つまり、これはまた、聖騎が求めた成果ではない――

目的はこれから、今から果たされるんだ！

汐が死んで終わりではない。汐の死を使って、誰かが何かを仕掛けてくる！

布団を蹴飛ばし、跳ね起きる

――と、きな臭い香りが鼻についた

いつの間にか、房内に黒い霧のようなものが満ちている

吸い込んだだけで筋肉が萎え、目まいがする。雷真には覚えのある感覚だ

これは瘴気……いざなぎの呪法……

考えているうちに、手足が痺れてきた。ふん、何かの……呪い……を受けている

まずい。一刻も早く、ここから避難しなければ

おい、夜々！　逃げるぞ！

上のベッドに呼びかける。だが、反応がない

せき込みながら背伸びしてみると、上のベッドはもぬけのカラだった

夜々がいない！　一体、どこに――

あせった瞬間、今度は凄まじい爆音が轟いた

足もとから突き上げるような揺れがき一、兵舎が激しく [illegible]

お次は何だよ！？　畜生　わけがわからねえ！
雷真の頭が真っ白になった
自分は死んだことにされ、監獄島は謎の瘴気に満たされている
頼みの綱の相棒もいない。夜々は硝子から預かった、大事な雪月花　夜々がいなければ、
妹の仇を討つなど不可能だ　おまけに謎の地震が兵舎を襲っていて――
思考力が失われ、叫び出したくなる　雷真はまだ十五歳の少年、錯乱しても仕方がない
しかし――密偵の訓練は、決して無駄ではなかった
習った通りに深呼吸を繰り返し、心を落ち着ける
阿呆　落ち着け　考えろ　密偵に選抜されたら、この程度は日常茶飯事だ！
そうして気を鎮め、意識して思考を研ぎ澄ます
今、気になる事象は四つ　汐らしき死体、突然の瘴気、謎の揺れ、相棒の不在！
いっぺんに考えるから混乱するのだ　すべてを同時に対処できるほど、自分は器用ではな
し、そもそも情報が足りていない　ならば――
状況を把握し、相棒の安否を確認する！
結論が出れば、行動は速い　雷真は揺れを振り払い、廊下に飛び出した
まだ揺れている床を蹴り、波音の激しい方へと向かう
ごうごうと渦潮のような音が、外から響いている　どうやら、揺れの原因は地震ではな

閃[illegible]――[illegible]
[illegible]――[illegible]崩れ、海面に砕けた桟橋が浮かんでいた
材木と材木がぶつかり合い、やかましいことこの上ない　艦砲が断末魔の叫びをあげ、
破滅的な衝撃が伝わってきた
何か、大きな力で破壊されたような
銃眼の前を駆け抜け、ようやく玄関口に到着　そこには、先客のアラタがいた　仁王像
のような、いかつい自動人形を従えている
「アラタ！　どうなってる？」
「――雷真か　不良だな　房から出るなと言われたたろう」
「[illegible]までもない！――」
かあんっ、と凄まじい炸裂音が響き、目の前で巨大な水しぶきが上がった
艦砲　射撃！？
着弾は音と同時だった　かなり近い距離からの砲撃だ
身を乗り出して見回すと、黒々とした波間に、城塞のごとき威容が見えた
ほんの数百メートルの距離に、鋼鉄の軍艦がそびえている　機関停止中なのか、静かだ
「こんな距離まで接近されて気付きもしないとは――！」
「見張りは何をやってたんだ！　どう見ても、味方って雰囲気じゃねえぞ！」
「内応か、消されたか　過ぎたことを言っても仕方がない」

「おまえ、何でそんなに落ちついてんだよ」
「諸法無我　そう考えて心安らかにしろ　危機のときこそ」
口ではそう言うが、アラタのこめかみには冷や汗が光っていた　彼もまた、十代の少年にすぎない　完全に平静でいられるはずがない
「なあアラタ　あれ、戦艦か？」
「巡洋艦らしいな。暗くて、型がわからない」
「異国のフネ……なわけねえよな？　日本軍同士なら、何で攻撃されてんだよ？」
「さて　内紛の可能性もあるだろうが、監獄島を狙う理由がわからん」
「まさか——榊中将が狙われたのか？」
榊中将には政敵が多い、とどこかで聞いた
その政敵か、榊中将を追い落としにきたのかもしれない
ならば、こうしてはいられない　あちらにその気があるのなら、こんな人[illegible]も、すぐに沈められてしまう　その前に相棒と合流し、陸へ避難しなくては！
きびすを返す宙真の腕を、くっとアラタがつかんだ
「待て　動く前に、状況をよく見ろ」
「悠長なこと言ってんな！　状況も何も、攻撃されてんだろ！」
「そうではない。砲が狙っているのは、あくまでも桟橋だ
言われて、はっとする　確かに、砲撃は兵舎を直撃したわけではない。
[illegible]
[illegible]の目的は　[illegible]の連絡を断つことだ　多分な」
何のために？
そこまでは知らん　だが、俺たちを閉じ込めるのが目的ならば、当然、逃がしてはもらえない　脱出しようとすれば、容赦なく射殺され——伏せろ！
宙真にタックルをかます。もつれて倒れた二人の頭上を、黒い影が吹き抜けた
運動場の方から、直線に飛び出してきた者がいる　鉤爪のように開いた手が、兵舎の外壁をたやすく引き裂き、無数の破片を宙真とアラタの頭上から降らせた
「不動！　刀乃殺！」
アラタが魔力を飛ばし、自動人形に命じる　不動像が手にした独鈷を振ると　先端から炎の刃が伸び、剣となった。
剣を一閃する　紅蓮の炎が空中に生じ、降りそそぐ木材を焼き尽くした
凄まじい火力！　機巧試験のときとは出力が違う　どうやら、実力を隠していたらしい
火焔を背負った自動人形は、あたかも不動明王のようだ
アラタの人形には驚嘆したが——それ以上に、襲ってきた影に驚いた
「こいつ……何だ！？」
黒く燃える炎のような、影をまとったその姿
細身で、きゃしゃだ。背格好は少女のようで、長い黒髪が燃えている

顔を見定める間も与えてくれず、再び襲いかかってくる　極めて敏捷、かつ怪力の持ち主だ　雷良とアラタは必死に身をかわしたか、そのたびに建材が吹き飛んだ
暗がりの中では正確な姿がとらえられない　たが、敵が動けば動くほど、見知った誰かに見えてくる。
そんな馬鹿なと思いながら、雷良は影に向かって呼びかけた
「おまえ……夜々なのか？」
敵がゆっくりと顔を上げる　黒髪がさらっと流れて、あらわにな[illegible]たその顔は——
確かに、相棒のものだった

5

雷良が最初の襲撃に気付く、少し前のこと
兵舎裏手の船着場に、一艘のボートか入ってきた
乗っているのはわずかに二名　眉目秀麗な青年将校と、その部下らしき大男だ
関宮は背筋を伸ばし、将校を敬礼で迎えた
ようこそいらっしゃいました、加賀見大佐殿！
「ご苦労、関宮大尉。中将はお変わりありませんか？」
「[illegible]しま[illegible]足[illegible]を[illegible]けく[illegible]さい」
[illegible]厳しく微笑み　ふわっと浮き上がる　名刺で[illegible]
関宮の首筋に、チリッと焼けるような感覚が走った
はっきり、嫌な予感がする
つい今しがた、加賀見の——と思われる者が殺された　この監獄島は今、そのせいで上を下への大騒ぎだ　そのクソ忙しいときに、このいけ好かない青才が姿を見せたのは、偶然とは思えない
加賀見は関宮の眼前に降り立ち、琴のように響く声で催促した
さあ、案内を　急ぎ、中将にお目通りしたい
「いや、今すぐ——」
その必要はない
関宮の背後から、ほかでもない、榊中将の声か飛んできた
怒鳴ったわけではないが、黙らせるだけの威圧感がある
加賀見は一歩前に出て、うやうやしく敬礼した
「これは榊中将　わざわざのお出迎え、いたみいります」
何の用だ　小僧！
加賀見はすぐには返答せず、瀟洒な顔をぐるりと巡らせ、船着場を見回し[illegible]
能の舞台のような手の込んだ作りで、質のいい木材が惜しげもなく使われている

実に見事なものですね　かなりの金がかかっているご様子」
そんなくだらぬことを言いにきたわけではあるまい　何をしにきた？
何をしに――ですか？
ゆっくりと、おうむ返しに訊く
無論、軍務のためであります
――それが何かと訊いている
[illegible]はございませんか？
もっともらしく訊き返す　どうやら、故意に神経を逆撫でしているようだ
もしわからないのであれば、こちらの命令書をご確認ください
ふところから封書を取り出し、そっと空中に放つ　封書から[illegible]のように[illegible]
ふわりと、中将の手元におさまった
[illegible]流――
闇宮は舌を巻いた　いつ〈魂離め〉したのかもわからない　見事な召喚だ
この男、かなりできる　[illegible]家嫡流の陰陽師にも劣るまい
中将は封書を開き、ざっと目を通して、せせら笑った
「榊に謀叛の疑いあり　ときたか　くだらん　帝都に帰れ！」
「そういうわけにはまいりません　それに、申してしまえば、謀叛うんぬんは口実なので
す　[illegible]、[illegible]に飲みまして[illegible]　こちら[illegible]、訓練隊員の何人かが行方

不明[illegible]　[illegible]
――[illegible]の急所を突いてきた　[illegible]
隠蔽工作が明るみに出れば、榊中将は厳しく責めを受けるだろう
優男然としていた加賀見の双眸が、ほんの一瞬、凄みを帯びた
ここは口無戦争の英雄、榊中将の直轄施設ですからね　口実がなければ、入ることもかないません　私の目的はたたひとつ、隊員の安否を確認すること　記録上、ここには八名の訓練隊員がいるはず　点呼を取らせていただきたい
闇宮は中将の顔色をうかがった　実際に確認を取られたら、行方不明者の存在はすぐにばれる　確実に責任問題だ
中将は面白くもなさそうに笑った
好きにするがいい　闇宮、手伝ってやれ
拍子抜けするくらいあっさり認める　あるいは、加賀見を暗殺するつもりかもしれない
闇宮は戦地での中将を知っている　そのくらいのことは平気でやる男だ
いずれにせよ、命令を受けた以上、闇宮はそれに従わなければならない
では大佐、こちらへどうぞ
助かります大尉　中将閣下もご協力に感謝いたします　実は少し心配していたのでね
私の弟が死んだのではないかと、不安でしてね
闇宮はぎくりとした　弟とは誰のことだ　まさか

「弟の身に何かあれば、加賀見の家も平静ではいられませんから

やはり――！　この将校は夕の義兄だ！

直感的に、閻宮は事件の全貌を理解した。

夕が死んだのは――口実をつくるためだ。この島を攻め落とすための、口実を。

どう対応すべきなのか。実戦経験豊富な閻宮も、すぐには正答がわからない。

躊躇しているうちに、加賀見はさらに、予想外のことを言い出した。

「ああ、閣下。もうひとつ、先に申し上げておきたいことがあります。貴方の推挙で配備が決まった新兵器――近衛師団の〈戦姫〉について」

「あれが何だ？」

「あれは実に見事な傀儡ですね。戦術的価値は一個師団に相当するでしょう。なぜうちの師団に回してくれぬのかと、ご立腹の師団長もいらっしゃいます」

「その件ならば、事情は報告済みだろう。あれは量産がきかん」

「それが腑に落ちません。人形師は暇を持て余し、遊興にふけっていると聞きます」

「傀儡は俺の仕事ではない。それに、急かしたところで、できぬものはできん」

「禁忌の材料が必要だから、でしょうか？」

閻宮は内心で舌打ちした。なるほど、あれは禁忌人形だったのか。

聞こえてくる性能は常軌を逸している。禁忌人形ならば、腑に落ちる。

そんなものを陛下の近衛に配備するとは、あまりに思いきった施策だ。下手をすれば、

反乱・攻撃の材料なり[illegible]

中将は否定も肯定もせず、悪びれもせず[illegible]答えた。

「どうやって造られたかなど問題ではないし、興味もない。硝子ができぬと言う以上、俺も造らせはせん」

「それは、彼女が貴方の愛人だから、でしょうか？」

「硝子か？　く――くはっ！」

遠慮のない哄笑が降ってくる。中将のぶ厚い胸板が激しく揺れた。

「この年寄りの愛人と聞けば、あれもどんな顔をするか。だが、まあ、誤りとも言えん。わしはあやつの才を、あやつはわしの力を愛し、頼みに思うておるのよ。互いの敵になりそうな者を、排除してやるほどにな！」

き――、と眼光が閃き、途方もない魔力が押し寄せてきた。

閻宮の脚がすくむ。加賀見の部下がボートから転げ落ちそうになった。

中将の威圧を軽く受け流し、加賀見は細いあごを上下させた。

「なるほど。おかげでいろいろと理解できました。化神扇が傀儡を造るには生きた人間が必要ということ。そして、たとえ部品がそろっていても、彼女はもう、誰のためにも働くつもりはないということ」

言いながら、白木の鞘の匕首を取り出す。いざなぎ流の陰陽師、高位の者にだけ許される護り刀。強大な式神を降ろす際、その依り代に使うものだ。

やはり、加賀見は式神を使うのだ。だが、加賀見の家は、百年も前に魔性を失ったと聞いている。だからこそ、汐を養女に迎えたはずで
（——こいつも汐と同じ、養子縁組というわけか）
優秀な血統の者を次々と迎えているのだろう。それは何とも——きな臭い。
中将は加賀見を見下ろし、白い口髭を持ち上げて笑った。
「何の真似だ、加賀見。その短刀で俺の首を獲ろうというのか？」
「お望みとあらば、そうします。貴様はもう——詰んだようですし」
どごんっ、と強烈な爆音が響き、兵舎全体が揺れた。
完全な不意討ちだったが、軍人の間宮には、何の音、何の揺れか、即座に理解できた。
（砲撃——だ！　大筒をぶちかましやがった！）
揺れから言って、直撃ではない。桟橋を落としたようだ。
かなりの大口径砲。ならば、艦もかなりの大きさだ。魔術で隠すとしても、巨体を欺瞞するには、高度な魔術回路と大魔力が必要となる。
巡洋艦を隠せるほど魔術は、日本軍は実戦配備できていない。
にもかかわらず、この距離まで接近を許した——不可解な状況だ。[illegible]のひとつに、[illegible]れかできる人形もあると聞くが。
いや、大魔術などなくとも、もっと単純に実現する方法がある——
たとえば、見張りがもう、いないとか。
[illegible]の警戒をすり抜け[illegible]する必要もない。最初から中にいればいい！
（まさか——！）
加賀見は匕首を抜き、白刃をきらめかせて、間宮にたずねた。
「大尉、点呼の前に隊員の数をうかがいましょう。現在、何名いるのです？」
「……ひとり帰郷しましてね、五十名です」
「数が合いませんね。残り五名はどうしたのですか？」
間宮は両手を上げ、降参のポーズを取った。
「死んだよ」
「それは残念です。——千妖万邪ことごとく奔るべし。急々如律令」
匕首を振り下ろし、空中に九字を切る。閃ごとに軌跡が走り、輝く魔法陣を構築した。
強大な魔性の力が盛り上がり、やがて異界への門となる。
「海神女御竜宮女帝、式権現沙乙姫——きたりませ」
はんっ、と両手を組み合わせ、外縛印を結ぶ。魔力が燃え上がり、門からどす黒い瘴気が噴き出した。匕首の刀身が漆黒に染まり、巨大な影を形成する。
いざなぎ流の奥義、魂籠め呪法。刀剣が依り代となり、大式神が出現した。
上半身は麗しい女で、下半身は黒い大蛇という、奇怪な化け物。
大きい。全長二十メートルはあるだろう。

「竜宮姫――水難の呪をかけるつもりか！

ここは海の上だ。水難の呪いを受ければ、どう考えても不利になる

やらせてはいけない。その一心で腰の拳銃を抜く

立て続けに一発。五メートル弱の距離から、加賀見の胴体を撃つ。

だが、加賀見は倒れなかった。もっと言えば、一発も命中していない

得体の知れない斥力が生じ、弾丸をそらしてしまう

魔力の盾、いわゆる「魔防」のスキルかとも思ったが――違う

「おいでなさい、七號。お披露目のときです」

加賀見の呼びかけに応じ、船着場の海面が盛り上がった

水中から金髪の乙女が飛び出してくる。軍の戦闘服に身を包んでいるが、明らかに日本人離れした

……の意匠、顔立ちを見て、中将がうめくように言った

「[illegible]――か！」

「な……これが!?」

間宮は初めて見る。とすると、先ほど銃弾を弾いたのは、こいつの魔術か

銃弾をそらす魔術。無論、それだけの能力ではない。伝え聞いた話では、[illegible]は皆

演習場の地形を変えたという

間宮は銃を捨て、両手で印を結ぼうとしたが、それは少々、遅きに失した。

……の眼前に迫……いる

……、[illegible]の魔術回路が起動した

名前だけは知っている。魔術回路「大手力」

床に巨大な亀裂が走り、天井がひしゃげ、視界がゆがんだ

見えざる巨人の手で空間が握りつぶされたような、そんなありさま

凄まじい力と言っていい。堅固な船着場が、玩具のように押し潰される

畏怖すべき破壊力の中心に、黒い怪物と、金色の乙女と、麗しい青年将校がいる

「け……そろいもそろって……神々しいしゃねえかよ……！」

悪態をつきた……な余裕もないまま、間宮の体も潰された。

Chapter 5 信ずるがゆえに

迫りくる乙女の鉄拳をかわしながら、雷真は自問した
（こいつは本当に、夜々なのか――!?）
鉄拳が壁を砕く。この威力、夜々の金剛力と思えなくもない。顔だってよく似ている
だが、夜々がこんなふうに雷真を襲うなど――
（いや、あり得るな。むしろ普段、頻繁に襲われてるな）
アタが不動明王に攻撃を命じる。火焔を帯びた独鈷の剣の斬撃を、夜々は片腕一本でいなし、反撃の蹴りを放った。
吹き飛ばされた明王が壁に激突する。脅威を目の当たりにして、雷真は怯んだ
（強え！）
黒炎をまとった夜々が、感情の消えた瞳でこちらを見る
妖刀を前にしたような圧迫感。雪月花がまとう存在の凄みた。まぎれもなく化物武人形
に思えるが、同時に違和感もある。この夜々は、何かおかしい。

――の大月！　何!?か――!
アラタが叫ぶ。雷真はとっさに魔力を繰り上げ、夜々に向かって放出した
強制支配を試みる。強引に魔力でねじ伏せ、言うことを聞かせようとした
だが、夜々は何も感じていない様子で、すたすたとこちらに歩いてくる
（駄目か！　くそったれ、どうすりゃいいんだ――!?）
そのとき、夜々の背後で、ひときわ大きな水しぶきが上がった。
近くに砲弾が着水したようだ。海水が巻き上げられ、さあっと雨のように降りそそぐ
夜々の背中にかかった途端、ぶしゅうっ、と湯気が立った。
夜々が悲鳴をあげる。焼けた鉄に水をぶちまけたみたいに、背中からもくもくと水蒸気
が上がり、ただれた肌が露出した
「何だ……？　海水を浴びただけで」
強酸でもぶちまけられたのかと思う。そのくらいの、激烈な反応だ
山賊の第六感がけたたましく警報を鳴らした
「ノノタ、気をつけろ！　何だかわかんねえが、海水を浴びたら死ぬぞ！」
「馬鹿な、そんなことがあるわけ――」
言いかける頬にしぶきが飛び、しゅっ、と肌が焼けた。アラタは顔をしかめ、あわてて
海水から遠ざかった
雷真の想像通り、海水は今や、凶器になっている

夜々の損傷も広がっている。夜々はうめき、床を蹴って跳躍した。
そのまま天井の配管にまぎれ、見えなくなってしまう
「おい待てよ！　夜々！
とっさに追いかけようとする。そんな畠真を、アラタがつかんで止めた
「追いかけてどうする　おまえには人形がないだろう」
けとよ！」
見失いたくない。操られているのか、畠真を憎んでいるのかは知らないが、あれが本物の夜々なら、取り戻さなくてはならない
アラタともみ合っているうちに、突然、聞き慣れた乙女の叱責が飛んできた
もうっ！　夜々を置いて、どこに行ってたんですか！
「夜々か!?　いいところにきてくれた——
いつものノリで返事をしてから、矛盾に気付いて立ちすくむ。
見事な黒髪をはためかせ、軽やかに跳んでくる姿は、やっぱり相棒だ。
畠真は混乱した。
「な　今、夜々は逃げて行って　アレ？
夜々は怪訝そうに眉をひそめた　——こちらの夜々には黒い炎のような揺らめきがなく
表情がはっきり見える。
「おまえ……夜々か？」

は[illegible]—
おまえ[illegible]を抜け出して[illegible]たような
たちまち夜々の顔が赤くなった。黒髪をうねうねとうねらせて、怒り出す
「お、乙女にそんなことを訊くなんてっ　貴方って人は——！」
「ちょ、待て！　何でいきなりキレてんだ!?
怒った顔がとても怖い。だが、そのおかげで、確信が持てた
これは、本物の夜々だ。
「ってことは、さっきのがニセモノかよ——！」
「待て、畠真　結論を出す前に、その人形をよく見ろ」
アラタが夜々の背中を示す　人に凝視されて、夜々も気付いたようだ
袖から背中にかけて、むしり取られたように着物が破れている
生地の一部が焼けるか、溶けるかして、勝手に脱落したようだ　何か、危険な液体を浴びたに違いない　たとえば、酸のようなものを
アラタの魔力が高まり、不動明王の背中に火焔が生じた
[illegible]の緊迫を感じ取り、夜々は早口で説明する
「[illegible]これは——さっきそこで、海水を浴びて！」
「[illegible]？　兵舎の奥からきただろう。なぜ海水を浴びる？」
「[illegible]真水かもしれませんけど！　でも、しょっぱいにおいしたんです——

「動くな　少しでも動けば、攻撃する」
「え……どうして……」
疑惑を向けられ、夜々は顔色を失った。すがるように雷真を見る。その瞳はいたいけで、無条件に信じてやりたくなる。
「アラタ、やめてくれ。やっぱこいつ、本当に俺の相棒だ」
「だから、結論は早いと――」
「双方、動くなあ！」
カッと強烈なライトが照射され、同時に怒声が響き渡った。
い[illegible]れから顔をかばいつつ、雷真は眼下のグラウンドに目を凝らす。
[illegible]しと肩を揺すり、筋骨隆々の大男が歩いてくる。
はちきれそうな軍服が暑苦しい。目つきは剣呑だが、口元には薄気味悪いほど[illegible]笑みが
[illegible]。訓練隊員たちが十数名、困惑気味につき従っていた。
「ご機嫌いかがかなあ？　花柳斎人形と、使い手の小僧！」
――精一杯知的ぶろうとして、どこか失敗したような、そんな口調だった。
だが、言った内容は衝撃的だ。隊員たちがどよめき、アラタでさえ目をむいた。
[illegible]の視線が、雷真と夜々に集中する。
そういや、誰にも言ってなかったな。夜々が花柳斎人形だってのは。
驚く[illegible]は。隊員[illegible]ちまち納得もしている様[illegible]夜々は[illegible]、どう見ても人間の乙女だ

[illegible]花柳斎人形[illegible]情報[illegible]納得がいく
それを所有する雷真は何者なのか。
[illegible]こその単独の落とし胤か。学園の[illegible]男か
畏怖めいた感情が高まる。彼らの不安をくすぐるように、大男は煽り立てた。
「おまえらも知ってるだろう！　この兵舎にははぐれ[illegible]が潜伏してやがるんだ。仲間が
[illegible]人も喰い殺されてるそうじゃねえか!?」
[illegible]の動揺を見て、大男は嬉しそうに夜々を指差した。
「あの花柳斎人形も、禁忌人形たあ！」
[illegible]さえ寒々しい兵舎の空気が、墓地のそれのように、冷たい湿気を帯びた。
「小僧、その危険な人形を、大人しくこっちに寄越しやがれ」
[illegible]りと夜々を見た。夜々はびくっとして、うつむいてしまった。
[illegible]周囲の敵意などではなく――雷真に疑われることを
[illegible]が決まった。雷真は夜々の手を握り、堂々と言い放った。
「嫌だね！　こいつは何かっちゃ暴力をふるうし、俺を殺そうとしたこともある。けどな
[illegible]喰っちまうとか――そんな化け物じゃねえんだよ！」
[illegible]んがまたった夜々の指先に、ほんのわずかに力がこもった。
[illegible]の指を握り返しながら、雷真はさらに声を張り上げた。
「[illegible]そもそもてめえは誰だ？　いきなり出てきやがって――」

火がついたように、大男の顔が赤くなった。
「じょ[illegible]官に向かって、その口のきき方は何たあっ！」
「だから、こっちはあんたが上官かどうかも知らねえんだって」
「自分は[illegible]戸中尉である！」
「ああ、そうかい。これはこれは[illegible]戸中尉、お疲れさまデス！」
わざとらしく敬礼する。隊員たちから失笑が漏れた。間宮にいたぶられている[illegible]たち
[illegible]ここで[illegible]二戸は少々、迫力不足なのだ。
「この[illegible]笑うなクズどもっ！」
丸太のごとき鉄拳をふるう。誰にも当たる距離ではなかったが、凄まじい爆風が[illegible]
[illegible]りたちが一斉になぎ倒された。
――単なる風圧ではない。近距離にいた者が一人、顔を裂かれて出血した。
風刃を操る魔術か、魔具を隠し持っているようだ。
「クズが、舐めてんじゃねえぞ！ 俺様は大陸で百人殺してんだあ！」
濁った眼で部下を見やる。なるほど、知力はともかく、攻撃力は相当なものだ。
「舐めちゃいねえがよ、中尉さん。理屈で考えてくれ。俺と夜々はここじゃ新参者――俺たちがくる前にいなくなった奴なんて、どうやって殺すんだよ？」
「単独で動けるから〈はぐれ〉人形ってんだよ。先に潜り込ませりゃいいだろ」
「[illegible]一緒に[illegible]！」

「[illegible]証明[illegible]人[illegible]ああ？ ここに[illegible]小笑の名前を[illegible]」
下卑た笑顔でそう言われ[illegible]言葉は黙[illegible]
何の意味もないだろう。身内の証言に、証明能力があるとは思えない。
二戸は勝ち誇り、腕組みをして笑った。
「これ見ろ！ はぐれを連れてるようなクズ、ハナから信じるに足らんわ！」
「[illegible]だが、調べりゃわかることだ」
「[illegible]調べりゃわかる。潔白を証明したけりゃ[illegible]、はぐれを冷遇しな！ 俺様がこの手で優しく抱きしめて、大佐のところへ持っていってやるわ！」
げへへ、と嫌らしく笑う。部員は唾棄したい衝動に駆られた。
「ひっ[illegible]、クズ！ 取り調べが怖いか？ 後ろ暗いところがあるのかなあ？ なら抵抗してみろよ。[illegible]官殿の心証は悪くなるがな！」
「あっ[illegible]とうしましょう[illegible]!?」
夜々が小声でささやく。部員は夜々を引き寄せ、きっぱり[illegible]た。
「[illegible]られねえ。逃げるぞ！」
「は、はい！」
「逃がすんじゃねえ！ 取り押さえろクズども！ 加賀見人佐のご命令だあ！」
「加賀見大佐？」
「[illegible]上官だろうか、加賀見とは[illegible]っ」

汐の関係者だろうか　疑問に思ったが、確かめている余裕はない　ある者はスロープを駆け上がり、ある者は直接壁を登って、訓練隊員たちが迫ってくる

もちろん　と言うか何と言うか、アラタもあちらに加勢した

不動明王が火焔の剣を振り回し、宙真と夜々に襲いかかる

背後は海。逃げ場はない　海水を浴びると、どういうわけか大火傷を負う

明王の燃える斬撃が、夜々をとらえる　今さら口で「よけろ」と言っても間に合わない

夜々は自分の判断で、両手を交差して受け止めた

斬られた――と思ったが、金剛力は宙真が思う以上に強靭だった

夜々の肌には傷もつかない。肌どころか、着物も切れない。

独鈷の剣を受け止めたまま、力比べになる。

その隙に、アラタが素早く顔を寄せ、もみ合うふりをしながら、ささやいた

そのまま聞け。あの中尉、海軍　の嫌われ者、加賀見大佐の部下らしい

「――それが何だよ？」

「頭を回せ！　ここは陸軍、榊中将の指揮下だ。海軍の奴らが好き勝手できるのは、も

と――、幕僚監部の命令を受けてるか、さもなければ――」

「榊中将が　失脚したってのか!?」

「生きていれば　の話だがな。既に鬼籍に入られた　かもしれん」

そうとした　中将は[illegible]。こんなところで退場されては困る。

[illegible]　夜々は絶対、[illegible]

「わかってる！　だが、おまえ　人では説明できない！」

不動明王の出力が上がる。夜々が力負けして、わずかに押された。

アラタは険しい顔で、苦しげに言った

「界みな火宅なりけり――浮世は人面鬼でひしめいている　おまえはハメられた　もはや

どうしようもない　かくなる上は、人形を差し出してでも、己の命を守れ！」

「そんなの、死んでもごめんだね

この――石頭が！」

明王の火焔が噴き上がる　宙真は夜々に魔刀を渡し、きびすを返した。

「夜々、こっちへ走れ！」

強制支配ができないので、言葉で伝え、波濤が飛び散る海へと走る

「アラタが、やめろ！」と　言ってくれたか、人はかまわず、水しぶきに突っ込んだ

宙真は、夜々を信じてくれた

あの不愉快な男――　中尉の脅迫にも、先輩アラタの忠告にも耳を貸さなかった

……ことが今、熱い感情のうねりとなって、夜々の五体を駆け巡っている
「別に、嬉しいというほどでは、ないですけど……っ！」
かぶりを振り、ゆるむ頬を無理やり引き締める　その頬に波しぶきが当たり、夜々の肌をじゅっと焼いた
「うく……！」
「大丈夫か？」
雷真が振り向く　心配してくれているようだ　夜々は痛みもこらえ、微笑んだ
「このくらい平気です　夜々は雪月花です！」
「そうか……つか、この海水は何なんだ？」
「海水が問題じゃないです　おそらく、呪術をかけられたのだと……」
「……やっぱりな　さっきの瘴気か」
単純な攻撃魔術なら、この程度は金剛力で打ち消せるだろう
だが、この酸は夜々のボディをも侵食する　つまり、単純な攻撃魔術ではない
誰の仕業か知らないが、敵はよほどの腕前だ
「ともかく逃げるぞ　俺を抱えて、屋根の上に跳んでくれ！」
「は、……」
自分でも信じられないくらい素直に、雷真の指示に従う　夜々は雷真に肩を貸し、魔力
[illegible]
当然、雷真には殺人的な負荷がかかる　それでも夜々を信じて　身を任せてくれる
雷真が気絶する前に、どうにか、屋上に飛び移ることができた
波が月光を反射して、あたりは意外なほど明るい
眼下には隊員の頭が見える　だが、上がってくる者はいない
橋は完膚なきまでに破壊されている　その向こうの陸地には　人里の明かりが見えてい
た　そして沖――、百メートルほど右手に、巡洋艦の巨体があった
呪いの効果はまだ続いていて　潮風が肺を焼き、気管がひりひりと痛む　人間の雷真には
もっとつらいだろう　夜々は心配になって　雷真の顔をのぞき込んだ
「[illegible]……体は平気ですか？」
「何……ことはねえ　それより、これからのことを考えよう　何がどうしてどうなってるの
か、俺にはさっぱりわからねえんだ」
「……さっきのアリスさんの話ですと、榊中将はもう……」
「あのジジイは化け物だ　こんくらいで死ぬはずがない」
[illegible]だが、それは願望であって、観測された事実ではない
「……たもんか……連中、すぐに上がってくるよな」
[illegible]教練塔は人目が吹き抜けなのだ　内部から階段で上がることも[illegible]中尉も、
[illegible]

先ほどの浮ついた気持ちが消え去り、夜々にも緊張感が込み上げてきた
硝子の庇護者、榊中将は失脚したという　夜々が禁忌人形であることも、軍には割れているらしい　夜々のニセモノとやらが兵舎で暴れていて、雷真は軍に追われている
状況は混沌としている　一体、どうすればいいのだろう
雷真はまだ十五歳の少年にすぎず、魔術の腕も未熟なら、体格だって大人に劣る　夜々との連携も上手くいかない　考えれば考えるほど、絶望的な状況だ
あの［illegible］やっぱり、夜々が投降します
は？　どんな扱いを受けるかわからねえぞ　最悪、殺されちまう
「いいんです　夜々は所詮、人形です　貴方の命の方が大事です
「ふざけんな！　その理屈で言えば、俺みたいなガキ一人より、雪月花のおまえらの方が、よっぽど価値があるだろ
夜々もそう思ってました　でも、やっぱり、人形の命と、人間の命では――
阿呆、却下だ却下。つまんねえこと言ってんな」
なっ［illegible］つまらない［illegible］!?
むかむかと込み上げる　真剣に悩んで、彼のために言ったのに！
雷真は夜々に背を向け、軍艦をにらんで言った
あのな、人形とか、人間とか、関係ねえんだよ」
「――――」

[illegible]人間より［illegible］なんて［illegible］俺は［illegible］
か知らねえか　鏡を見ろ鏡を　おまえ、器量は人一倍、ふたし　運動神経は抜群、とんでもなく高性能の魔術も使える　おまけに、頭のデキは俺よりはるかにいいんだぜ　人間とか、こうじゃないとか、そんな区別に何の意味があるってんだ？
ひび割れた大地を潤すように、雷真の言葉は夜々の胸に染み込んだ
その上、自分を犠牲にしてても、こんな俺を守ろうとしてんだ　おまえの方か、俺よりもはるかにできた［illegible］人間［illegible］だよ」
［illegible］口では何とでも言えます！　だって、たとえば、夜々が［illegible］人間に恋をして
［illegible］の人のお嫁さんになりたいって言ったらどうします!?
［illegible］できるだろ、そんなの！
［illegible］あっさりと、雷真は答えた
［illegible］取られるくらい、ごく当然であるかのように
［illegible］愛し合［illegible］、関係ねえよ　夫婦にだってなれるさ
［illegible］お嫁さんにしてください
――
夜々［illegible］貴方のお嫁さんにしてください！
放心したまま、三秒　雷真は狼狽し、兵舎の入口から転げ落ちそうになった
［illegible］俺のことだ［illegible］たのか!?

「……だけは許してください、
そういうわけにはいかないんだから
嘘だったんですか!? この――嘘つき! こ、こんな辱め、耐えられません」 も……
貴方を殺すしか――っ
「嘘じゃねえ! 嘘じゃねえが、そんな場合でもねえ! えええ――そう! 俺は……
たちが愛し合ってりゃ って言っただろ!
――
や」
おまえの気持ちは嬉しいが、俺はまだおまえを愛してない!
夜々は立ち尽くした しわっと涙が目尻に浮かぶ
しかし、めげない
夜々は雷真の首に手をかけ、冷えた声で言った
「命が惜しかったら、今すぐ夜々を愛してください」
「脅迫じゃねえか!
「だって! だって…… それじゃ、一体どうすればいいんですかっ?
可愛くしろ! 相手に好きになってもらえるよう、努力するんだよ!
奇しくもそれは、るりに言われたことと、同じ言葉だった
「わ……わかりました 今日から夜々は、可愛いお嫁さんになります」
「心がけはいいが、嫁になるのはまだ早い」

まずは……!
……の……
雷真は夜々の肩を両手でつかみ、じっと見つめた
夜々の心臓が跳ね、甘い感情が込み上げてくる
「嫁じゃないか、おまえはそれ以上に信頼できる、俺の相棒だ そうだろ？
――先ほど皆の前で言ってくれた言葉が、まだ夜々の耳に残っている
身に覚えのない敵意を向けられて、立ちすくむ夜々に、雷真は言ってくれた
こいつはそんな化け物じゃないと そう言って、信じてくれたのだ
さっき、夜々のこと……信じてくれましたよね？
「当たり前だ 実際、おまえは俺と一緒にいたんだ
はい でも……嬉しかったんです すごく
「そうか…… いや、偉そうなことは言えねえ 一瞬でも疑っ……、悪かったな
雷真は照れくさそうに笑って、謝った
直前におまえのニセモノと遭遇してよ――なるほど、失脱しくニセモノが現れる可能性はある あらかじめ備えておかねえとな ま、ここを切り抜けてから考えようぜ」
切り抜けてから、と雷真は言った 切り抜けられたら、ではなく
夜々の胸にも、不思議と確信が芽生えていた
雷真は、こんなところでは死なない ここはきっと、切り抜けられる!

ほんの数か月前、雷真は術較で夜々を打ち倒している　それを可能にしたのは、機転と度胸　そして計算だ

夜々は若干でも、頭が良いわけではない

このわけのわからない苦境も、雷真はきっと、切り抜ける――はずだ

雷真の手に自分の手を重ね、夜々はそっとつぶやいた

「夜々は、貴方の――雷真の、力になりたいです」

初めて、素直に自分の気持ちを伝えることができた

雷真は驚いたような顔をして、

「――おう　アテにしてるぜ、相棒！」

破顔一笑、厚い信頼のにじんだ声で、そう言ってくれた

心臓がもう一つ生まれたみたいに、夜々の体に活力がみなぎる

「安心してください雷真　訓練隊員全員が敵に回っても、あの軍艦が大砲を撃ってきても、夜々は雷真を守ります　勝って見せます！」

「ありがとよ　なら訊くが、おまえ、ここから陸まで跳べるか？」

「――え？」

「跳べるなら、頼む　この舟を出て、硝子さんのとこに行け」

夜々は絶句した　言葉がつかえて、なかなか喉から出てこない

「[illegible]……夜々だけ逃げろだなんて……信じてくれない[illegible]」

「違う　信[illegible]　硝[illegible]が狙われ[illegible]」

「それは、どうい[illegible]」

予想もしないことを言われ、困惑する　こんな夜々に、雷真は順を追って説明した

「さっき、俺は影法師ってのと戦った　そいつは本当に、おまえそっくりだった　だから軍はおまえを狙うわけだが――思うにこれ、逆じゃねえか？」

「逆って？」

「だからさ、おまえを捕まえるために、ニセモノを仕込んだとは考えられねえか？」

「夜々をつかまえるため、影法師を利用した？　雪月花には価値があると思いますけど、そこまでするとは――」

「〝讖言〟を知ってるだろ？」

「ええと……名前だけ」

夜々は、ほとんど知らない　硝子も、いろりも、詳しく教えてくれたことはない

「俺も見たことはねえが、本当にとんでもねえ人形らしい　だが、硝子さんは一体造ったきり、増産要請にも応じず、代わりに雪月花を造った　造っておきながら、世には出さない　雪月花は花柳斎の真作って話だけ、伝説みたいに広まってる」

あるいは意図的に広めたのか　雪月花の名は、確かに広く知られている

「でもって　中将は硝子さんの古なじみ――っぽかったよな？」

ようやく　夜々にも雷真のいいたいことがわかってきた

硝子の非協力的な態度に直面し、軍上層部はおそらく、こう考えたはずだ
「榊中将が花柳斎の技術を独占し、雪月花をも手にしているのでは？」
中将が密かに雪月花量産に着手していれば、軍にとって見過ごせない脅威となる　当然、抑え込もうとするだろう
たから、中将の身柄を抑えた　となれば、次に狙う相手は、もちろん――
「硝子を狙う」
「ああ、むしろそっちが本命じゃねえかと思う　どのみちこの状況、俺とおまえだけじゃどうしようもねえ。硝子さんに連絡をつけて、指示を仰ぎたい」
「それなら、雷真も一緒に逃げましょう！」
「だめだ　俺と一緒じゃおまえの動きが鈍る　それに」
何か言いかけて　やめる　雷真は軽く笑って、たぶん別のことを言った
「難しく考えるな　どこかで電話を借りて、硝子さんの判断を仰げ　硝子さんなら何とかしてくれる　俺のことなら大丈夫、連中、すぐには俺を殺せねえ」
そんなの、わかりません」
わかるさ　軍はおまえを影法師に仕立て上げたいんだ　おまえに逃げられちまったら、俺から[illegible]を引き出すしかない
――つまり、雷真の真価は実戦下で発揮される　この土壇場で　この思考力[illegible]英語
[illegible]
真――[illegible]を大人数が駆けつけ[illegible]いる暇はない
雷真は夜々を見つめ　手を握った
「行ってくれるか？」
「[illegible]行きます！」
強くうなずく　それが雷真の決めたことなら、夜々は全力で遂行する！
待っててください　すぐに戻ってきます！
おう、任せた！」
雷真の魔力が膨らむ　[illegible]のありったけを、彼は夜々に渡してくれた
握り合った手を通して、膨大な魔力が流れ込んでくる
二人はごく短い時間、見つめ合う
隊員たちが扉口に現れると同時、夜々は窓に向かって跳躍した

3

加賀見が職員[illegible]を用い、閃宮を消し飛ばすさまを見て、榊中将は目をむいた
《閃宮を倒した？　この青二才が、…？
床板は文字通り粉砕されている　兵舎の構造体が軋みをあげ、外壁の装甲が紙のよう

破られた　それこそ、艦砲射撃を受けたようなありさまた
やがて爆風が過ぎ去ってみると、そこにクレーターが生じていた
その中央に、金髪の乙女――瀧宮十が無表情で立っている　閻宮は影も形も見当たらず、ただ飛び散った鮮血だけが残っていた
加賀見は端整な顔を崩さず、半人半蛇の大式神も健在だ　筋骨隆々たる加賀見の部下も、腰は抜かしているものの、外傷はない
「ふん　血迷うたか、加賀見　瀧宮十まで持ち出すとは」
中将は半ばあきれて、加賀見を見下ろした
「行き渡らぬと苦情がきている、とぬかしたな？　それを持ち出して何とする？」
「今は私が預かっております　この人形、陛下のお命を狙いましたので
耳を疑う　思わず目を見張り――そんな自分を中将は笑った
「ふ――驚嘆したわ。この俺を、これほどまでに驚かすかよ」
先ほどの封書、「謀叛の疑いあり」などという世迷言にも、きちんと裏付けが用意されている。あれは単なる口実ではなく、こちらの首を狙う、仕込みの一手だったのだ
一重、二重に、厳しい指し手が用意されている　ただの首[illegible]ではない
その間にも爆音が轟き、断続的に兵舎が揺れた
中将はこうべを巡らし、魔力を飛ばして周辺の海域を探った
[illegible]軍艦の行動が視える。この時代の[illegible]は帆船と大差なく、これも排水量[illegible]を超[illegible]大型艦[illegible]
加賀見が艦長を任されている艦だろう　いざとなれば　ここを沈める腹らしい
「砲撃を命じたのはうぬか？　何のつもりだ？」
「荒っぽい手段で申し訳ありません。はぐれ封じ込めの策です」
「封じ込め？　笑わせる。橋を落としたくらいで、あれが封じ込められると？　俺に気配も気取らせぬ、忌ま忌ましい化け物ぞ？」
「橋を落としただけではありません。既に〈水難の呪〉を仕掛けております」
となりの大式神を示す　確かに、半人半蛇の女から、濃い瘴気が発散されていた。
その式――竜宮の〈大磯女〉だな　水難の厄呪の効果は、『呪いを受けた生体が海水を強酸として感受する』だったか
「さ[illegible]か　博識でいらっしゃる」
「[illegible]加賀見さん　水難の何とかってのは、体[illegible]」
[illegible]が申し訳なさそうに、しかし図々しく割り込んできた　中将ならば怒鳴り[illegible]ころだが　加賀見は苦笑して、全動力で海水をすくい上げた。
「[illegible]海の水に触れてはなりません　こうした威力が働きますゆえ」
[illegible]かせた海水を瀧宮十にぶちまける　じゅっと湯気が立ち、瀧宮十の肌が焼けた
[illegible]ただれて血がにじむ　相当な苦痛だろうか、心を持たない瀧宮十は、表情も変えず、[illegible]を見[illegible]ているだけだ　もちろん　加賀見の所業を恨んでもいない

その現象に度肝を抜かれ、一戸はあわてて水際から飛びのいた。
——小者だ。中将は一戸を意識から追い出し、再び加賀見に向き直った。
「それで、俺をどうする？　その鑑識で殺すか？
それは閣下のお心ひとつ——でありましょう？」
「ほう。俺が「一切抵抗せん」と言えば？」
「我が〈単艇〉にご乗艦いただきます」
「この俺を連行すると申すか。豪気だな」
艦は敵のテリトリー。行けば離脱は困難だ。しかし、断れば兵舎を沈められる。
この兵舎には、中将も正体を把握していない怪物〈影法師〉が潜んでいる。
どうせ加賀見の仕込みだろうが、それを立証できる者がいない。
闇宮は消えた。るりはアテにならない。今、中将がここを離れれば、隊員は指揮系統を失う。それこそ加賀見の思惑通りに、ここは無力化されてしまうだろう。影法師の正体を暴ける者は、もう一人も残っていない——ということになる。
中将は感心した。この若造、周到に準備をして、一手ずつ退路を封じてきた。蛇蝎と嫌われるのもむべなるかな。敵に回せば、これほど嫌な男もおるまい。
「加賀見さん、返事を待つこたあないぜ。自分がとっ捕まえてやりますよ」
盛り上がった肩を叩きながら、[illegible]がしゃしゃり出てきた

聞いたり[illegible]の[illegible]の闘宮人形が、餓鬼ども[illegible]
痛めつけて餓鬼どもを調教してたんだろ。あんたの私兵にするためによぉ？
「——私兵だと？」
「あんたに絶対の忠誠を誓う、傀儡みたいな連中にするのさ。でもって、意に染まぬ奴ははぐれ人形の材料にしちまったってわけ。造ってるんだろぉ、この島で。臓器したとか、当刀花だとか——胸糞の悪くなる話だなぁ！」
うぬも同じ見解か、加賀見？
加賀見は答えず、ただ冷ややかに中将を見据えていた。
中将は深く息を吸い、吐き、先ほどの答えを言った。
「抵抗はせん。この命、うぬに預けてくれる」
「加賀見さんに偉そうな口をきくじゃねえか、叛逆者風情が——」
「餓鬼はすっこんでおれ！」
喝されて、[illegible]戸は引っくり返った。
そのわきを悠然と歩き、中将は加賀見に歩み寄る。途中で刀を投げ捨て、投降の意志を明確にした。だが、加賀見の顔にはむしろ、警戒の色が浮かんでいた。
どうやら、疑問に思ったようだ。簡単に行き過ぎてはいないか、と。
加賀見はおそらく、まだ切り札を残しているのだ。用意の手札をすべてさらす前に投了

されるのは、篠上にとって気持ちのいいことではない
たか、敢えて駄目押しはせず、加賀見はくるりときびすを返した。
「は、艦にご案内いたしましょう。一戸中尉、君は〈影法師〉を探せ」
「はっ、自分ははぐれ補給に向かいます！」
敬礼して復唱。意気揚々と兵舎の奥へ駆けていく　それを見て、今度は中将が身構えて
しまった　これはおかしい　あんな阿呆に好き勝手させるのか　？
加賀見はボートに足をかけ、中将を招いた。
「どうぞ、閣下。黒斑にお連れします」
「艦は好かんのだがな」
「新鋭艦ですので、快適ですよ　閣下もお気に召すでしょう
「そう願いたいものだ」
いえ、本当に。あの方もいらっしゃることですしね」
「何だと？　まさか――あやつを」
「私は効率を愛します」
艶やかに微笑む。さすがの中将も、この展開には意表を突かれた
（硝子がむざむざ捕まるはずが　ないとは言えんな）
苦笑してしまう　硝子は酔狂を好むところがある。
（俺もいよいよ年貢の納め時か？　さて……）

オーイの神楽におさ！　運命ノリをゆだねん！
月明かりのもと、ボートはエンジン音を響かせ　高潮な波　く　！

4

兵舎屋上のハッチが開き、自動人形が飛び出してきた
人を模したもの、獣を模したもの、大小さまざまな自動人形が當真を包囲する　使い手たる隊員たちも、次々に姿を見せ、油断なく陣形を整えた
當真は両手を上げ、降参のポーズを取る　それで隊員たちは緊張をゆるめたが、
「この　どクズがあああー」
隊員を押しのけ、一戸が突進してきた
當真の胸ぐらをつかみ、顔面に鉄拳を叩き込む。當真は屋根のへりまで転がされ、かろうじて
降伏した相手に、まったく容赦しない
手すりに引っかかって止まった。その　4メートル下で、波が砕ける
落ちたが最後、呪いの効果で焼け死ぬだろう
一戸の怒りは治まらない　當真を蹴り、踏みつけ、泡を飛ばして叫ぶ。
「クズめが！　クズが！　おい、てめえらも何をぼさっとしてやがる！　人形を出せ、クズを！　早く追え！」

それは無茶というものだ。夜々はとっくに陸にいるのだし、途中には酸にも等しい海が横たわっている。隊員たちに不信感が広がり、士気が地の底まで落ちた

一戸もさすがに察したか、歯噛みしつつ、雷真を屋上に引き上げた

「おい貴様、人形をどこにやった!? 言えっ——!」

必死な形相は滑稽ですらある　雷真は笑いを噛み殺し、

「夜々は〈はぐれ〉なんだろ。勝手に動いて、どこかに行っちまったんだよ

再び鉄拳が飛ぶ。雷真の頭がぐわんぐわん揺れ、意識が飛んだ

目を回した状態で、猫のようにぶら下げられ、いずこかへと運ばれて行く

そうして、どのくらいの時間が経ったのか。

意識が戻ったとき、雷真は懲罰房の中にいた

少し前、棒打ち百回を食らった部屋だ

人間を吊るための鎖があり、壁のラックには梶棒のような鞭がかかっている　ペンチや万力、五寸釘に金槌まである　大きな水溜めには濁った水が溜まり、そこに一人な檻か設置されていて——雷真自身が蝶にされていた。

「水責め　江戸時代かよ　？」

こんな趣味のいい部屋が、近代国家を標榜する日本に現存しているとは驚きた

「お目覚めか、クズ野郎　ご気分はいかがかなあ？」

にゅっ、と三戸のごつい顔が視界を覆った。

「貴様のような面倒か無しだぜ　加賀見ちゃんの微妙な面倒が……」

「微衝？　穴だらけだから、しくじったんだろ」

口答えした途端、ぶん殴られる。こぶしと歯車に挟まれて、口の奥で火花が散った

「まあ、口が回るのは大歓迎だ。回らなくても、これからたっぷりしゃべらせてやるさ　せっかく俺のノンイがこんなステキな部屋を用意してくれたんだからなぁ」

げらげらと楽しげに笑う　こいつとは生涯わかり合えそうにない

「せいぜい、頑張って我慢しろよぉ？」

三戸が取っ手を回す　それで歯車が回転し、雷真は逆さにされてしまった。

どっと頭に血がのぼる。呼吸が苦しい　自分の体重で鎖が食い込み、骨に激痛が走る

これは想像していた以上にキツい

「さ、まずは簡単な質問から行くか。名前と所属を言ってみろ」

三戸が気まんまんの嗜虐的な笑みを見せる　雷真は顔を背け、

「そんなの　知ってるだろうが」

三戸が歯車を蹴った　衝撃で鎖が骨を圧迫し、きりっ、ごりっ、と嫌な音がした

うめき声が出る　その声に、三戸は心地よさそうに聞き入った

「ん～　いい声だ　——で？」

「赤羽　雷真だ」

「赤羽ね。ほうほう　誰の差し金でここにきた？」

「　さあ　　な」

二戸は水溜めにバケツを突っ込み、それを雷真にぶっかけた

古典的な水責めだが、あいにく、今は海水が酸のように効く。鼻から入った水が粘膜を焼き、脳天まで痛みが抜けた

「オラ吐けよ、クズ！　花柳斎の指図だろ!?」

「俺は　　俺の意志で　　きた　硝子さんは　　紹介してくれただけ――ふおっ！」

再び水が飛ぶ　水は運悪く気管に入り、内部から雷真を蹂躙した

痛い。呼吸ができない――死ぬ！

意識を飛ばす寸前、二戸が手を止めた

咳き込む雷真の顔を踏みつけ、さらに問う

花柳斎は誰の命令を受けてんだ？　え？　あのはぐれをどこへやった？」

「あ　？　硝子さんが　　命令　　？

吐け！　はぐれ人形は、どこの司令部に駆け込んだあ!?」

皮肉なことに、拷問を受けている側の雷真が、極めて重要な情報を得た

どうやら連中、雷真や硝子か、ほかの司令部の回し者だと思っている

――なるほど、中将と同じように、あの加賀見にも政敵がいるのだろう　夜々が仏令に走り、政敵が中将奪還に助けば、加賀見の計画とやらが破綻しかねないのだ

[illegible]も、[illegible]の訓練隊員たちに、ここで

[illegible]

党は軍の内部抗争　山内にも　訓練隊員たちにも　まるで関係のない話だ

そんなくだらないことで　何人もの隊員が犠牲になったのか　　！

雷真は鼻で笑って、二戸をあしらった。

「知るかよ、糞野郎」

二戸のこめかみに血管が浮き出した

もはや殺気を隠そうともせず、こぶしを振り上げる。何かの魔術が発動し、二戸の拳頭か鉄槌のごとき強度を得た　例の、『斬れる鉄拳』を繰り出すつもりだ

その鉄拳が、雷真の頭を西瓜のように割る――寸前。

ずずんっ、と重い物音が天井から響いた

「何だあ？　地震か？　それとも、砲撃か？」

「　あんた、切り捨てられたんじゃねえか？」

ああ!?

砲撃で、あんたごと沈めちまう腹だろ　　あるいは、俺の応援がきたか」

見今なハッタリだったが、それは二戸の不安を煽るに十分な台詞だった。

二戸か雷真を蹴飛ばす　口の中を切り、雷真は血を吐いた

貴様の相手は後だ　大人しく待ってな、クズ！

捨て台詞を残し、二戸が部屋を飛び出して行く

――千載一遇の好機だ。すぐにも脱出しなくては

だが、脱出手段がない。体は鎖で固定されている。魔術師を拘禁するための道具なので当然、念動の効きも悪い。魔力をふりしぼってみたが、装置は全然、動かなかった

力んでいるうちに血がのぼり、頭がぼーっとしてきた

まずい。脱出できないうちに、一戸が戻ってきてしまう

あせる雷真の鼻先に、いきなり墨汁が降ってきた

墨汁――いや、違う。海苔でも、昆布でもない。強いて言うなら――影だ

影は見る間に形を変え、シャチのような姿になった

シャチが牙で鎖を断ち切り、雷真の拘束を解いてくれる

鎖が外れ、水溜めに落下する雷真を、小柄な体が受け止めた

「いいさまだな、雷真。ぼくに感謝しろよ。命の恩人だぞ？」

恩着せがましい奴だな。けど、感謝はするぜ

思わず笑ってしまいながら、雷真は彼女の名を呼んだ

「汐」

「……捕れば、夜々が帰還し――」……攻撃して……その仕業だ

小夜を救出するために、一戸の気を逸らしたのだと

それでも、夜々が戻ってくるとすれば、この扉――近くに身を潜めるのが得策だ

無論、敵も同じことを考える。通路の向こうに一戸の姿を見つけた

血走った眼でこちらを探している。雷真は汐を抱き寄せ、ハーッすとも、手近な部屋に身を隠した。気配を殺し、そっと扉を閉める

息を潜め、足音が遠ざかるのを待つ……幸い、扉が開くことはなかった

ほっとして室内を見回す。そこは洗濯室で、半機巧化された洗濯装置が置かれていた

ここで洗ったシーツや衣服を、揃え、干すのが兵舎の決まりだ

「おい。いつまで抱いているつもりだ」

腕の中の汐に言われ、雷真は我に返った

いつの間にか、汐を抱きしめてしまっていた

「わ、悪い！ 他意はねえぞ、他意は！」

「わ、わかってる。こ、このくらい、騒ぐほどのことじゃない……」

赤い顔で野戦服を払う。汐はやはり、どこからどう見ても、生きていた

恐る恐る、その頬に触れてみる

汐は少し驚いたようだが、されるがまま、雷真のしたいようにさせてくれた

体温があり、弾力があり、脈がある。確かに、生きた人間の手ざわりだ

「おまえ　やっぱ、無事だったんだな？」
「まあね。その節は、その　お騒がせしました」
「加賀見の部下なのか？」
正面から、たずねる。たちまち汐は身を硬くした　雷真はさらに踏み込んで、
「あんなでかい軍艦が近付いていたのに、警報も鳴らなかった　当直の見張りを黙らせたのは　おまえたろ？　殺しちまったのか？」
「殺しては　いないよ
雷真はほっとした。よかった。汐は[illegible]のような男とは違う。たとえ加賀見人仏の部下だとしても、悪党ではない　現に、雷真を救い出してくれたのだ。
何で俺を助けた？　加賀見は俺と夜々を捕まえたがってるはすた
知ってる。でも、あのままじゃ　きみが殺されるのは、目に見えていたからさ。
——全然、答えになっていない　たが、それは望んでいた以上の答えたった
友達を助けるのに理由はいらない。敵も味方も関係ない
汐はやはり、雷真の仲間であり、友なのだ
すっと胸が軽くなる。雷真はあたたかい気持ちで、汐の肩を叩いた
「心配かけやがって　おまえが死んだときは、本気で絶望したんだぜ？」
汐の頬にも微笑が浮かぶ。それから、照れ隠しのように、つんとして言った
[illegible]だろう？
[illegible]何を
抱きしめて——なれなれしいっ
「いいだろ、男同士なんだからさ！
知ってるくせに
抱きしめられたまま、汐は雷真の胸にひたいを当て、くすりと笑った
「きみ、『やっぱ』って言ったね　ぼくが生きてるって、なぜわかった？
「ああ、死体を抱いたときに、違和感があってさ
「違和感？　あれは完全な複製だっただろ？
それはだな　つまり、その　何つーか

「違和感？　あれは完全な複製だっただろ？」
それはだな　つまり、その　何つーか
「はっきりしない奴だな。言えよ」
胸か　なくてさ
汐の顔が下から徐々に染まり、最終的には耳まで赤くなった
「変態！　馬鹿！　やらしいっ　馬鹿！」
おまえが言えって言ったんだからな！
ぽかぽかと打ちつけられるこぶしを払い、雷真は訊いた。
あのダミー、魔術だろ？　誰が造った？」
「造ったというか　『造り変えた』んた　見た目を変える魔術があって」

──よくわからねえか、あれを盗った奴は知らなかった、ってことだな　俺がもみ心地を知っている、てこと

つまり敵は、雷真と汐が山でどんな話をしたのか、知らなかったのだ

こ、こら！　もみ心地って何だよ！

汐はヤカンのように湯気を出し、雷真を突き飛ばした

やっぱりきみは油断ならない男だなっ……下半身も含めて！

含めるなよ！　つかそれ、どういう意味だ！

もう島を出ろ、雷真

いきなりいわれ、雷真は面食らった

汐は真剣な口調で、重ねていった

八一八で送る　わかるだろう？　きみがいたら、邪魔なんだ

俺が逃げちまったら、おまえが逃がしたって、すぐにバレるぞ」

いいから出ろ！　今すぐ！

汐は雷真の襟を両手でつかみ、ぐっと引き寄せた

接吻しそうな距離から、必死な顔で雷真を見つめる

雷真はかぶりを振り、汐の眼を見返していった

「そうはいかない　俺は密偵になって、英吉利に行かなくちゃならない

[illegible]ねじ山[illegible]

[illegible]ぜ[illegible]すぐ[illegible]よう

汐の瞳に、痛みをこらえるような光が走った

それで、雷真も理解する

彼女が山で語った[illegible]、嘘はない[illegible]　あのとき、汐は本気で密偵を目指していた

そうでなければ、あれほどの努力はできない　汐は放課後も日々鍛錬に励んでいた　雷真のために、ノートをまとめてくれた[illegible]やは[illegible]、汐は利用されているだけだったら

「連中のいいなりになるのはやめろ　おまえのやっていることは汚れ仕事だ　そんなやり方で[illegible]家の威光が取り戻せるもんかよ！

よ、汚れ仕事じゃない！　兄上はただ、加賀見の威光を取り戻そうと──

九賢──加賀見大佐が！

[illegible]と汐の手が離れる　その手を逆につかみ寄せ、雷真も語気を強くした

[illegible]なおさら縁を切れ　黒幕はそいつだ　影法師、てのを利用して[illegible]

悪党だ！

[illegible]んなことするか　兄上は　このお番を解放[illegible]にきたんだ[illegible]

解放、て何だよ！

[illegible]ん教官にならいれ[illegible]！

いらだたしげに――どこか無理をしたように――言葉を叩きつけてくる
「榊中将は異常なんだよ！ こんなトチ狂った施設を作って、教練と称して暴行を加える
――教官や中将が正しいとでも思うのか！」
「間違ってる！ だが、こいつよりは百倍マシだ！」
汐が怯み、視線をそらす 雷真はその顔をこちらに向けさせ、さらに言った
「いみてえな奴を平気で使う――加賀見がまともなわけがねえ だから、もう縁を切れ
加賀見大佐をふりきめて、榊中将の庇護を仰ごう――」
汐はうつむき、しぼり出すように言った
「馬鹿言うなよ 世の権化は中将の方だ それに 考えが浅すぎる 肝心の中将が
……いるか、きみは知ってるのっ」
「それは、わからねえけど そのへんにいるだろ」
「外の、軍艦の中だ
――――」
あの軍艦は加賀見の指揮下にある では、加賀見に捕まった……？
意地の悪い教師のように、汐はひとつひとつ、雷真の至らぬ点を数え上げた
「入って乗り込むのは大変だろうね 海水に触れた途端、きみは大火傷だ よしんば到達できたとして、きみには自動人形がないじゃないか あっちには小銃で武装した乗組員が……大勢いるよ ……こちも……」

「おま……考えが浅すぎ……ノノタメ……乗り……は……」
雷真は汐の顔を両手で挟み、説き伏せるように言った
「だから、おまえも力を貸せ！ この兵舎を、今日で終わらせるな！」
その瞳が左右に揺れた はっきり、苦悩している
――汐もまだ、あきらめきれていないのだ
自分の夢を 密偵の任を得て、出世して、父に会うという、ささやかな夢を
加賀見の手駒となって、この兵舎を壊してしまうことに、躊躇している
だけど、兄ーが…… それに、勝ち目が――
「ある！ 俺の相棒が必ず、勝ちの目を拾って戻ってくる！ だからこっちにつけ！ 俺たちで加賀見を追い落とすんだ
「夢みたいなこと……言うなよぉ！」
雷真の胸を突き離し、汐は苦しげに叫んだ
「ぼくのことはほっとけよ！ きみだけ逃げて、生き延びろ
勝る ――これ、おまえの口癖だったよな？
からかうようにそう言って、笑いかける
一緒に行こうぜ 俺たちで、仲間の仇を討つんだ
雷真――」

「無理ね。できっこないわ」
出し抜けに、八千華が言った
いや、八千華ではない。その背後、廊下に続く扉の陰に、相棒が立っている
た[illegible]て、雷真さんは私が殺しちゃうもの
黒い炎が肌の表面をすべり、相棒の姿が変わった
夜々の皮の下から現れたのは、春の日差しのような、うららかな女性――
気付いたときにはもう、るりは間合いを詰めていた
雷真をつかみ上げ、壁にぶつける。それだけで、意外なほどあっさり壁が破れた
凄まじい膂力。骨という骨が砕けた気がする
るりさん……あんたが[illegible]
[illegible]よ、雷真さん。お姉さんが、はぐれ人形――影法師
大地が逆転し、まばゆい月が視界に入る。それが空の月ではなく、夜闇に映った[illegible]
理解したときには、雷真はもう海面に叩きつけられていた

Chapter 6 再会、いくつもの

1

くるぞ！ 備えろ！
かがり火が煌々とたかれた街道に、下士官の怒号が響いた
先遣隊から連絡！ 標的は毎時百哩超で疾走中！
急ごしらえのバリケートの中で、男たちがざわつく。彼らを護るのは土嚢を積んだだけの貧弱な掩体だ。そんな速度で突入されては、たやすく吹き飛んでしまう
き[illegible]、きました！ はぐれです！
若い兵士が叫ぶ。そして、上官の命令を待たず、めったやたらに引き金を引いた
暴れる小銃から弾丸が飛び、標的に命中する。しかし、貫通しない！
弾丸は表面に傷をつけただけ[illegible]、後方にそれていく。おまけに、食ら[illegible]のは可憐な少女だ。兵士たちが驚いて射撃をやめた――その一瞬に、夜々は彼らの頭上を飛び越[illegible]、はるか後方に着地した
足を止めず、兵士たちを放置して先を急ぐ

走りながら、夜々は自分の状態を感覚で探った
雷真にもらった魔力は、もう残り少ない　かれこれ　時間以上、機関車より速く駆けているのだから当然だ　それでも速度をゆるめず、砂利をまきあげて、駆ける、駆ける　破れた肌から血がしたたり、痛みで涙がにじんだが、それも我慢した。
帰りのことは考えない　硝子と合流すれば、魔力の補充ができる
そして、硝子なら、雷真を助けてくれるに違いないのだ。
（もう少し　あと少して――見えました！）
懐かしい匂いの街並み　ここまでくれば　見覚えのある光景だ　月明かりのもと、硝子の屋敷の屋根瓦を認め、目頭が熱くなった
ときどき壊してしまう立派な門　何度か折ってしまった、松の植え込み　また　カ月も経っていないのに、十年も離れていたような気がする。
夜々はぼろぼろ涙をこぼしながら、塀を飛び越え、敷地に入った
「硝子！　姉さま！　小紫！」
叫びながら縁側に近付く　――と、そこで異変に気付いた。
動くものの気配がない　眠りについているのとは違う　普段、硝子が侍らせている小鳥や猫など、小動物型の自動人形が一体も稼働していない
血の気が引いた顔で、夜々は敷地を見回した
[illegible]痕跡がある。

[illegible]では　硝子はもう連れ去られた後[illegible]
両膝から力が抜け、目の前が真っ暗になった
それでは一体、何のために、ここまできたのだろう。
もう兵舎に戻るだけの魔力がない。帰り道は行きよりに警備が厳しいはず――
泣いている場合ではないとわかっているのに、涙が止まらなくなった
こらえきれず、しゃくりあげる　こぼれる涙を何度も手の甲でぬぐう
雷真の力になりたいのに。彼の相棒でいたいのに
なのに、何の役にも立たないなんて
（泣いていては、だめ　何とかしなくちゃ　　ため！）
まだ終わりではない。夜々はまだ、壊れていない　できることがある。
どうにか心を立て直し、涙を振り払って、立ち上がる
すると、夜々の意志に呼応するように、屋敷の中で青白い光がともった
かしゃん、かしゃんと歯車が回り、何かのカラクリが動作を始める
硝子？
おっかなびっくり、音のする方へ向かう。
縁側から上がり、長い廊下をわたって、大広間に入る　するすると御簾が巻き上がり、床が割れて、地下へと降りる階段が現れた

誘われるように段を下りると、その下には意外な光景が広がっていた
地下のはずなのに、まるで屋外だ
ーがあり、空がある
箱庭とも言うべき、もう一つの庭。夢でも見ているのかと思う
石灯籠の明かりが、玉砂利を幻想的に浮かびーがらせている　飛び石伝いに進んだ先に
は、つくりの古風な庵があった
何か、武器となるものが隠されているのだろうか
一縷の望みを懸け、夜々は庵の戸を開けた
玄関、上がりかまちにかかるように、漆塗りの化粧箱が置いてある
夜々はごくりと息をのみ、そのフタを開けてみた
中には一本の巻物が収められていた
書名「金剛力之書」これは、金剛力の解説書――夜々の仕様書だ
創子はきっと、こうなる可能性も見越していたのだ　もしものときには、これを當真に
渡すつもりで、前もって用意していたのだろう
現状、當真は夜々をまったく使いこなせていない　この書を夜々が読み解いて　當真に
わかりやすく伝えることができたら　人の戦力は跳ね上がる
夜々は巻物を手に取り、大事に懐にしまい込んだ　この見知らぬ庵を探索したい気持ち
[illegible]

[illegible] 駆けつけの体力がない [illegible]
[illegible] ーまいそうになりながら、必死に知恵をしぼる
「當真のところへ　何とかして　ー」
無理をすれば、休眠状態へ移行してしまう　疲労の具合から、まず朝
までは目覚めない　兵舎までもたせるのは不可能だ
心細い　けれど、もう心が折れたりはしない
少し前に、るりがくれた言葉が、夜々の心を支えている
道具は、目的があって初めて生きるもの
當真には目的がある　そのために夜々がいるのだ
夜々が生きるときは、今このとき　そうでなくてはならない
[illegible]人形と胸を張ったところで　人では何もできずにいる
半端になることはない　お互いに必要としていて、お互いを思いやっているから
[illegible]人が　夜々の帰りを待っている
[illegible]ために　素直に　可愛く　[illegible]すれば
[illegible]決し、通りに走り出た
人の多い繁華街の方へ駆け　声を張り上げる
誰か、助けてください！

恥ずかしいのを我慢して、心のままに訴える
「助けたい人がいるんです！　世界で一番、大事な人なんです！」
果たして、人形の想いは、人間に通じるのだろうか
通行人が一人、また一人と集まってきて――

2

「雷真っ！」
汐は必死に手を伸ばし、落下する雷真をつかまえようとした
が、るりがそうさせない　汐の肩をつかみ、怪物じみた腕力で引き戻す
と水音が響き、雷真は海中に消えた
「るりさん　なぜ!?」
るりは頬に手を当て、困ったように眉根を寄せた
「まあ、怖い顔。そんなに怒ってどうしたの、汐さん？」
こっちの台詞だ！　どうして、雷真を殺したんだ。話が違うじゃないか！　貴女が手助けしてくれるっていうから――
こっちの台詞よ　汐さんったら、ほだされそうになってたじゃない

ない、とは言い切れなかった。

雷真に迫られて、心が揺れた。義兄を裏切り、雷真の言う通りにしたいと思った。

だって――雷真と、ずっと一緒にいたかったから。

「兄ーは……ぼくを……騙してた……」

「全部、汐さんのためよ」

「隊員に危害は加えないって……情報収集だけが目的だって……言ったくせに！」

「お兄さまの理想は知ってるでしょう。そのための犠牲だわ」

「隊員を殺していたなんて、ぼくは知らなかった！」

「お兄さまが守ってくださったんじゃない。汐さんが傷つかないように」

「そんな理屈っ……信じられるかよぉ！」

その場に崩れ落ち、汐は泣いた。自分の愚かさが許せず、床を叩いて悔しがった。

雷真を死なせてしまった。

鈍感で、無神経で、勉強が嫌いで。でも、ひたむきで――

根性が据わってて、度胸があって、自分の道をまっすぐに生きる――

そんな男を、ぼくが死なせてしまったんだ……！

しゃくり上げる汐の頬に、るりがいきなり平手打ちをくれた。

「泣いてないで、非情に徹しなさい。すべてはお兄さまの大願のためでしょう？」

……りか姉にもたれかかる。貧血を起こしたようだ。

……しい呼吸を繰り返しながら、洗濯室の出口に向かって歩き出す。

「……さっきので、力を使いすぎたみたい。ちょっと、補給してくるわ」

「補給……って、何を？」

「血をもらうのよ。聞いたことない？ 生き血を魔力に変換できるって話」

「……血がいるなら、ぼくのを使えよ」

袖をまくって、投げやりに突きつける。

汐の白い肌を見て、るりは一瞬、ごくりと生唾をのんだ。

「馬鹿なことを言わないの。まだ加賀見さんの戦いは終わっていない。むしろ、これから始まるのよ。今あなたを貧血にしてしまって、どうするの」

「だけど、ほかに血をくれる奴なんて――」

恐ろしい考えに突き当たり、自分でもわかるくらい、血の気が引いた。

るりは普段通り、にっこりと優しく微笑んだ。

「心配いらないわよ。狩りは慣れているから」

「……りさん……隊員を殺したのは……まさか……っ」

そうだ。先ほど、るりは雷真に言ったじゃないか。「わたしが影法師よ」と。

影法師の正体が、るりならば。

行方不明の黒錬隊員たちを殺していたのは
―そう、わたしが食べちゃったのよ、汐さん
無邪気に肯定され、めまいがした
汐の動揺など意にも介さず、るりは洗濯室を後にする
汐は足首のあいだに尻を落とし、へたり込んだまま、ふるぶると震えた
るりは今から隊員の誰かを襲い、生き血を抜き取るつもりだ　また、誰かが殺される
わけがわからないまま、[illegible]の[illegible]いいなりになっている彼らが
それは、誰の命令だ？
るりは義兄の部下で、[illegible]も義兄の部下だ　だったら、当然――
精神が平衡を失う　じっとしていられず、汐は頭を抱えた
うぁ　あああああ！　ああああああ！　あああっ！
わからない　わからない　わからない　何も信じられない！
[illegible]りか破れた壁の穴から、波の音が響いてくる。ざざん、ざざん　とささやくように
[illegible]いけ[illegible]汐の嗚咽と混じり合い、濁ったハーモニーを奏った
[illegible]の首は、突けば折れそうなほどに細い、かよわい[illegible]

3

夏[illegible]
[illegible]
お兄さま　お兄さま！
雷真はまどろんでいる　初夏のそよ風が心地よく、なかなか起きる気になれない
しびれを切らしたのか　声の主は遠ざかり――
しばらくして、ばしゃっと大量の水が降ってきた
雷真は飛び起きた　ずぶ濡れで顔を上げると、黒子の衣装の自動人形がタライを持って立っている　そのとなりには、ふくれっ面の妹がいた
察するに、妹が人形を操って、雷真に水をかけたようだ
「何すんだ撫子！　ひっでーな！」
「ひどいのは兄さまです！
[illegible]で叱られて、雷真は鼻白んだ　妹の剣幕に怯んでしまう
何怒ってんだよっ
兄さま　今日は何の日ですか？
あっ、えーと……晩飯が天ぷらの日？
撫子の怒りに反応し、人形がタライを持ち上げる　雷真はあわてた
落ち着け　今思い出す――ええ、と……あ、虫取りか！

「そうです！　かぶとむし、つかまえてくれるって言ったのに！」
雷真は縁側から顔を突き出し、空を見やった
——山際が赤い　もう夕刻だ　今から出かけるのは、父母が許さないだろう
「何だよ　それならそうと、もっと早く起こしてくれりゃよかったのに」
「だって」
撫子は濡れた縁側に座り込み、寂しげに眉根を寄せた
「兄さまったら、すごく……気持ちよさそうだったから」
……から——起こせなかったのか
そのくせ、水はぶっかけるのか　傀儡の術まで使って
……貫しない優しさが、むしろ妹らしい気がした　意地っ張りで、わかままで　甘えん坊
……なのだ　雷真は可笑しくなり、優しい気分で、妹の頭を撫でた
「明日行こうぜ、明日！」
「……はい」
……にかんだ顔で、撫子はうなずいた　機嫌を直してくれたようだ
はっとした拍子に、雷真は明日の予定を思い出す
「あ、でも明日は、師範の道場で稽古の日だ」
「兄さま……っ！　嘘つき！」
「[illegible]ないだろ!?　その傀儡をしまえ！」

まるで猫の相撲のように、取っ組み合いになる。
撫子は雷真を押し倒し、ぺちぺちと頬を打つ――

4

わい、いつまで寝てる！ 糞が！ そろそろ起きろ！」
乱暴に頬を叩かれて、雷真は覚醒した
肺が焼けたように痛む 何でこんなに苦しいのかと考えて、少しずつ記憶が戻ってきた
確か るりに叩き落されて――
身を起こそうとして、激痛にあえぐ。
全身に打撲を負っている。それでも、折れているところはない
自分自身の頑丈さにあきれた 壁を破るような一撃に、とうやって耐えたのだろう
「よう、死に損ない 悪運だけは強いようだな」
目の前で、闇音が笑っていた
――どうやら、この男が海中から引き揚げてくれたようだ
あたりを見回す。雷真が寝かされていたのは、丘の裏口にあたる船着場だった
「あんだ とうやって、海水 えほっ！」
[illegible] は [illegible] にさすった。

闇朱、魔力 [illegible]
言われるまま 魔力を集中する 驚いたことに それだけで呼吸が楽になった
闇音は目を細め、まぶしそうに雷真を見た
「すぐにコツをつかんだな。そう、てめえはそれで助かった 無意識にそれをやったから、水を飲まずに済んだんだ 大した才能だぜ
――魔術の才を誉められたのなんざ、生まれて初めてじゃねえかな」
苦笑してしまう 幼少の頃から、才能がない、才能がないといわれ続けてきたのだが
――墜場で身を護れる程度には、命根性が汚かったらしい
闇音はそれとなく周囲に気を配り、探るように言った
「あの娘っこ人形はどうした？ てめえが連れてた、綺麗な嬢ちゃんは」
ああ [illegible] って野郎が欲しがってたから、陣に逃がした
は [illegible] そいつは利口な選択だ 加賀見の丁に渡ってりゃ、勝負が決まってた
[illegible] おかけで戦力かねえ これからどうすりゃいい？
――は情報収集だ 敵情を知らなけりゃ、作戦目標も立たんぜ
[illegible] た なら、俺が偵察に――」
[illegible] け簀 てめえが寝こけてるあいだ、俺が怠けてたと思うのか？
[illegible] いっと指で招く 合図を受け、八方から黒いねずみが走ってきた
「[illegible] 何だこいつら」

「騒ぐな　俺の式だよ　兵舎の様子を探らせている」
雷真は目を見張った。ねずみの数は三十匹かそこら——これほど大量の式神を、一度に操っているのか？
「すげえな、あんた」
「すげえもんかよ　てめえの許嫁さまに比べりゃ、蟻みてえなもんさ」
——日輪を知ってるってことは、あんた　いさなぎ流か？
閻宮はふっと表情を翳らせ、吐き捨てるように言った。
「古い話さ　俺は破門された身の上だ」
「破門？　何をやったんだ？」
てめえにゃ関係ねえ、と　蹴してもよかったはずだが　閻宮はそうしなかった
黒いねずみを手に乗せ、情報を読み取りながら、昔話のように語る。
「今も大概だがよ、若え時分の俺は、最低最悪のクズ野郎でね　色恋にのぼせちまって、いいとこのお嬢さんに手をつけちまったんだな」
「——意外と隅に置けねえな」
最低最悪のクズ野郎——その言い回しは、別のところでも聞いた気がする。
苦み走った顔をだらしなくゆるめて、閻宮はのろけた
「ありゃあ、天女みたいな女だった　べっぴんで、ちょいと抜けてて、心根のまっすぐ
俺たちはす　氷を誓い合っ……」

「身分が違いすぎた　あまりにもな」
雷真は奥歯を噛んだ。身分違いと言うなら、雷真と日輪もそうだ　たか、雷真は婿入りを望まれた身の上。閻宮にはそれがなく、ゆえに引き離された
「で、俺は半殺しにされて、一門を放逐されたってわけだ」
「話が飛んだぜ　何でいきなり半殺しだよ？」
「察しろ、阿呆　餓鬼ができちまったんだ」
閻宮は笑った。意外にも屈託がなく、我が子の行く末を憂う様子はない
「その子ども、今はどうしてんだ？」
さあな。だが、まあ、幸いなことに母親似だ。おつむの方も母親似みてえだが
ともかく、俺は破門になった。今しゃ人殺しよ　とこまでも粋な親父さ
笑いにまぎらせて言う　自嘲の表情が　瞬、記憶の中の光景と重なった
汐のロケットを見とがめ、与真を破り捨てたときと、同じ表情だ。
あのとき　与真の女性をひと目見て、閻宮は言った　母ちゃんか、と。
あんた　ひょっとして、汐の——
おっと　無駄話はここまでだ
閻宮の顔つきが変わる　今にも魔術をぶっ放しそうな、殺気を帯びた表情に
瞳が右に動き、何かを目で追う　使い魔と視覚を共有し、異変を察知したらしい

——貴が！　また餓鬼どもが襲われてやがる！
弾かれたように立ち上がり、駆け出そうとする。雷真はその上着をつかみ、
「俺も行く！」
「てめえは足手まといだ」
「決めつけんなよ！　俺は正直、魔術より斬り合いの方が得意だ！」
聞宮は雷真の胸ぐらをつかみ、言い聞かせるように言った。
「聞け！　神中将は加賀見に負けた——が、英国行きの話はなくならねえ。——[illegible]さえしなけりゃ、てめえはまだ密偵になれるかもしれねえ」
「英吉利には行く！　だが、加賀見もぶっ飛ばす！」
「餓鬼が！　駄々こねてんじゃねえよ！」
「『そのままでいい』と言ったのはあんただろ」
聞宮は言葉に詰まり、忌ま忌ましげに舌打ちをした。
「減らず口たな。上官のいうことが聞けねえ奴は早死にするぜ？」
「俺はとびきりデキの悪い蛆虫でね、命令に従うのは苦手なんだ」
「貴が。犬死にが許されるのは大人になってからだ。急々如律令、きたりま従！」
いきなり祭文を唱える。刹那、雷真の足もとに瘴気が集まった。
樹の根を逆さにしたような、不気味な形の式神が生まれ、雷真の足にからみつ[illegible]。
「うっわ、何だこれ!?　小せえくせに……抜けねえ！」

[illegible]

聞宮は雷真の腕を振りほどき、稽古場を飛び出して行った。
追いかけたいところだが、式神がゴムのように伸び縮みして、雷真をその場につなぎ止める。人間の筋力ではどうにもならない。無論、拙い念動でも同じことだ。
「くそったれ！」
狂おしいほどの焦燥が雷真の胸を焼いた。
ほかの訓練隊員たちがやられているというのに、身動きも取れないとは。
仲間の危機を救いたい。夜のことも心配だ。あのまま加賀見の言いなりになって、取り返しのつかない罪を犯したらと思うと、心が凍える。
夜々、頼む！　早く戻ってきてくれ！
たまらず、叫ぶ。
——あるいは、その想いが通じたのだろうか。
[illegible]ん、と凄まじい音を響かせて、何かが天井から降ってきた。

[illegible]の向こうに、四角いシルエットが見えている。
[illegible]を眺めながら、いろは[illegible]は気をもんでいた。

いろりは今、硝子、小紫とともに、軍艦〈雪斑〉の一室に閉じ込められている
床は緋色の絨毯で、テーブルセットはアンティーク調。艦長の趣味を反映しているのか、食器類の趣味もよく、居心地は悪くない　ただし、煙草を取り上げられてしまったので、硝子はご機嫌斜めだ
無言でいろりにカップを差し出す　いろりはティーポットを取り、硝子のために紅茶を注いだ。それを見て、小紫もカップを出す
「姉さま、わたしも！　ミルク多めで！」
無邪気におねだりする　こんな場合だというのに、気楽すぎる　小言をいいたくなったか、いろりが説教を始める前に、大勢の足音が近付いてきた
小紫が可愛らしく首をひねり、指を数える
「ニーんと……五人？　七人？」
「二人とも、気を引き締めよ　ここにくる」
いろりが予言した通り、足音はこの部屋の前で止まった
おざなりなノックの後、いかつい軍人たちが続々と顔を見せる。中でも一番いかついのは、両腕を金属の枷で拘束された、白い髭の将官だった
硝子は微笑んでカップを置き、そちらに向き直った
「まあ。これはおかしなところでお会いしたわね、榊中将閣下」

[illegible]
「軍艦の中なんておかしいわ　まして私は拉致されてきたの」
「それは奇遇、俺もだ」
「お二人とも、ご冗談を　拉致とはずいぶんなおっしゃりようですよ」
中将の背を押し、眉目秀麗な青年将校が現れる
――加賀見大佐だ　大人の身柄を押さえて、少しばかり機嫌がいい
「巡洋艦雪斑へようこそ　どうぞ、我が家と思っておくつろぎください」
痛烈な皮肉だった　硝子が冷笑を、中将は苦笑を浮かべる　煙草が吸えないのに、我が家と言われて硝子が納得できるはずもないし、中将に至っては魔具で何重にも拘束され、魔力を徹底的に封じられている
加賀見は端整な顔を硝子に向け、慇懃にたずねた
「さて、花柳斎先生　道中のお話、大変興味深く拝聴いたしました　魔導士には致命的な欠陥がある――そうでしたね？」
「ええ、あれは失敗作よ
その件、いま一度うかがえませんか。魚心あれば水心、と申します　ご協力いただけるなら、こちらも相応のはからいができようというもの」
身の安全と引き換えに、協力しろと言っている　加賀見の狙いはあくまで中将――もし硝子が中将に責任を押しつけたなら、その証言を鵜呑みにするつもりだ

「……うされるのか」いろりは息を詰めて、硝子の言葉を待った
「醜器は確かにひどい出来だったわ　死なず、老いず、迷いもない　主に絶対忠実で、人間らしい心がない、完全無欠の殺人兵器——美しさのかけらもないわね　あれが陛下の身を危うくしたと言うのなら」
ここまでの鬱憤を晴らすかのように、硝子は意地悪な微笑を見せる
「操った者がいるんでしょうよ　そして、それは陣中将ではないわ」
「ご協力……いただけませんか」
「意味がわからないわね　正直に答えたつもりよ
何とも残念です」
口ぶりこそ残念そうだが、加賀見の顔には落胆の色もない
「……つきいたたきたかったのですが——第一警戒水準で拘束せよ」
……を受け、軍人たちが行動を開始した　魔力を絶縁する縄や枷、破魔の力を持つ手錠など　おなじみの拘束具を一斉に広げる
まだ怖いもの知らずの小娘か、初めて怯えた顔をした　いろりは反射的に飛び出して、軍人の前に立ちはだかった
「……に乱暴は許しませぬ　どうか……にはお手を触れず」
「この傀儡　出来栄えは見事ですが——邪魔をしますね」
「……、……な眼をし、……」

……い敵意も仕入……しまり　反動で魔力が高まり　勝手に溢れ出し……一触即発の空気が漂う　いろりが魔術回路を起動しようとした、まさにそのとき——
「あらあら　こんなところで喧嘩しないで」
緊迫した場に不釣り合いな、やわらかな声が聞こえた
声の通りの、ほやほやとした女が部屋に入ってくる
肌の色艶がよく、都会的な化粧をしている　ひと目見て、……と同じ匂いを感じた　己の美を一人に見せる」ことを知っている女だ
「貴女　瑠璃——」
硝子のあごが外れる　下のそんな顔は、夜々が最初に庭木を折ったとき以来だ
女——るりというのか——の肌に、どす黒い炎がまとわりついた
圧倒的な魔力の高まり　いろりがこれまで対峙した、どの敵よりも脅威を感じる　そう、たとえていうなら、紫月花と同じ格を——
「姉さま…っ」
小紫が青ざめた顔でいろりを見る　ようやく、危険な状況だと理解できたらしい
夜々とは違う意味で、小紫も自分の価値に驕っている　まさか自分たちが倒される可能性かあるなどとは、思ってもみなかっただろう
「さあ、わたしが脅かしてるうちに、あの子たちを拘束してね」

女の言葉を受け、軍人たちが乱暴に縄をかける　いろりは叩き伏せたい衝動に駆られたが、女のにらみが利いているし、肝心の硝子が抵抗する素振りを見せない
人はたちまち縛られて、中将ともども、拘束されてしまった
「うふふ。どうかしら、加賀見さん？　ごほうび、もらえそう？」
加賀見の首に手を回し、女が甘ったるくたずねる。加賀見は気乗りしない様子だったが、軽く頭を倒して、女の唇に自分の唇を重ねた。
「せせ接吻!?　ひひ人前でははは破廉恥な！」
いろりは大いにうろたえた　たが、妹の手前、素知らぬふうを装う
「あ[illegible]姉さま、頼まっか」
「くっ、くだらぬことを申すな！　ここっ、このようなときにっ」
それっきり何の説明もなく、加賀見と軍人たちは船室を出て行った
ただひとり残った女が、拘束された硝子に近付き、親しげに笑いかける
「久しぶりねえ、化柳斎先生――いえ、硝子姐さん」
「そうね　るり　いえ[illegible]瑠璃奴」
いろりはまばたきした。この女はやはり、ト の知己なのか
驚いたのはいろりだけではない　人のやり取りを聞き、中将も目をむいた
「硝子　この者を知っているのか？」
「[illegible]姉と呼ばせたこともある――」

[illegible]

るりはにっこりと優雅に微笑んで
「おかしいと思ったわ　花柳斎先生がまだ生きてるって聞いて
「[illegible]それは、坊やが言ったの？」
「夜々ちゃんよ　それまでわたし　臨終は贋作だと思っていたの　基礎理論は同じでも、作風が全然違うんだもの　あんなの、とんでもない駄作だわ
「そうね　私もそう思うわ
たから、花柳斎は騙りたと思っていたのね。けれと、夜々ちゃんは全然違った」
るりの視線がこちらに向く。小柴は身をすくめ、いろりは思わず身構えた――が、るりの瞳に加賀見のような冷たさはなく、むしろあたたかな光があった。
「本当に、化柳斎の理想を体現したような人形たわ　ほかの誰が認めなくても、わたしが保証する。あなたはあの人の先に行ったわよ、姐さん」
それは、どういう意味たろう？
硝子はふっと微笑んで、冷淡につぶやいた
「お褒めの言葉は嬉しいけれど、貴女の方は何とも無様ね」
容赦ない口ぶり　冷然とるりを見据え、言葉の寸鉄を繰り出す
「浅ましいこと。あんな男に取り入って、人の生き血をくすねているの？
「くすねる？　違うわ、姐さん。わたしは収穫してるたけ」

その瞬間、硝子の瞳に激情が閃いた　主がこれほどはっきり感情をあらわにする場面は、いろりの記憶回路に存在しない
るりは面白がるような目をして、硝子を挑発した
「家畜と一緒　あとで美味しくいただくために優しくするの。それに、青い坊やを一人前の男にしてあげるっていうのも、女冥利に尽きるものよぉ？　姐さんたって、雷真さんを育てて、神の子の材料にしたいのよね？　ねえ、孔雀斎先生？」
出て行って
いつになく弱々しい声で、硝子は言った
「そんな貴女を見ているのは、とてもつらいわ」
あるいは罵倒されたなら、受け流せたのかもしれない
るりの表情が凍りつき、次いで、苦しげにゆがんだ
「──から言ってくれるじゃない　でも、そうね、負け犬は退散しましょう」
「どうして──変わってしまったのかしらね、私たち──こんなに」
「どうして？　そんなの、決まってるでしょう！」
振り向いたるりの瞳から、涙のしずくが飛んだ。
あなたが選ばれたから──わたしが選ばれなかったから！──
溜め込んでいたものを吐き出すように、一息にまくしたてる
「だから、わたしは決めたの。わたしを選んでくれる人のために、この命を捧げようって。

わたしにしかできない、ためなことなの。そうしなさいわ　けれど、貴女は──」
「お説教はやめて！　姐さんとは違うのよ！」
るりは肩で息をしていた　事情を知らない姉妹の目にも、それはひどく痛々しい──気の毒な女の姿に見えた
硝子は無言だ。るりもそれ以上は何も言わず、船室を出て行った
静寂が戻ってくる。船底から響く波の音と、機関部のタービン音だけが、しばらく室内を満たしていた
「──すまぬな　硝子」
ふと、しわがれた声で中将が言った
「並ならぬ技量の女がいると聞いて、一作員に引き抜いたのだが──それが俺の不見識。よもや、あやつが蛇蝎の手の者とは──うぬの大事な人形と、あの小僧を預かりながら、このような事態を招いてしまった」
そのことなら、お礼を言いたい気分よ　こうして懐かしい顔に会えたのだもの　それに、このくらいの張り合いがなくては、うちの子たちも本気を出せないわ
いろりと小紫は互いに顔を見合わせた　雷真と夜々の本気？
中将も意外だったようだ　呆けたように硝子を見やる
小僧はいまだ実戦を知らぬ　他方、加賀見は頭が切れる　魔術の腕前は何をかいわんや

——これは赤ん坊と関取の相撲だぞ？
「これはどうかしら　坊やを甘く見ているのは、私たちだと思うのだけど？」
託宣を告げる巫女のように　絹子は迷いなく言った
「赤羽一門は千年、殺しの業にまみれて生きてきたわ　ゆえに　その魔性は生死の狭間でこそ目覚める　私は神にも仏にも頼らないけれど、こんなところで坊やが殺されるなんて結末、天はお認めにならないでしょう」
絹子はくすっと笑みをこぼし、船窓の外に視線を投げた。
「坊やは死なない　だって、私と賭けをしたんだもの」
「賭け　となっ」
「赤羽天全を討てればよし　倒せなければ、坊やの命をもらう　とね　賭けが始まる前に賭け禄を失くすほど、あの子も甲斐性なしではないはずよ」
兵舎を眺める　はかったように爆発が生じ、パッと火花が散った
いろりが腰を浮かせ、船窓にかじりつく　兵舎から黒煙が上がり、潮風にあおられて揺れている。何かが陣から飛んできて、兵舎に激突したようだ
「花火かな？　それとも、砲弾？」
小柴が明るく言う　確かに、何か砲弾のようなものが飛んできた
もくもくと上がる煙の向こう、兵舎の屋根の上に、ひとりの乙女が立っている
漆黒の髪が潮風をはらみ、薔薇のように見える。それは、もちろん——

6

……の中ほどまできて、沙は戦慄に立ちすくんだ
むせ返るような血の臭いで、胃液が逆流する。
廊下には点々と血痕が残っている。るりの仕業に違いない
萎えそうになる心を奮い立たせ、吐き気に耐えて教練場を目指す　そうしてたどりついた教練場は、既に地獄絵図だった
「オラオラ！　としたあ、クズども！　手が止まってるせえ！」
戸が戦っている　どういう経緯でそうなったのかは知らないが、訓練隊員と交戦中た
戸に躊躇はないらしく、容赦なく鉄拳を浴びせ、隊員たちを切り裂いていく
鮮血があふれ、人形の残骸が飛ぶ。
はっきり、隊員たちが劣勢だ。三戸自身の強さもさることながら、連れている自動人形が驚異的だ　金髪の乙女が竜巻のごとく暴れ回り、人形を破壊していく
それは、夜々によく似た雰囲気の、乙女型自動人形
「瀬篤才　」
帝国軍に一体しか存在しないという　最高級人形た

雅富士は両手を差し向け、魔術回路を起動した
ぐんにゃりと空間がゆがみ、吸い込まれるような圧力が生じる
壁がひしゃげ、地面が割れる　部はせり上がり、・部は沈んで、断層ができた
重力の変動　地点にかかる重力の落差で、地形が変わる
いいぞお、雅富士！　クズどもを裂きイカみこえにしろ！
の命令を聞いて、汐の脳髄が灼熱した
なト衆野郎を部下にするなんて　！
カに残っていた義兄への信頼が、完全に消え失せた瞬間だった
の命令に従い、雅富士は手近な隊員をつかまえた
隊員は恐怖で絶叫する　その体が、ばり　と縦に引き裂かれる前に、
「虫の舞」　急々如律令！
黒い羽虫の群れが乙女に殺到し、魔術をかき消した
（あれは式――煩悩虫！）
最下級の式神だ　何の力もない、うるさいだけの式神だと思っていたが　攻に人量に
召喚すれば、相手の集中を乱し、魔術効果を減殺できるらしい
魔力をたどって術者を探す　卯一、正面玄関に続く通路に、間宮がいた
雅富士がそちらに狙いを定め、飛び上がる　いや、上がる　というより、「落ちた」感
重力方向を切り替えて、すっ……すると天井に落下した。

闇か　中　雅富士　潰し
よく見ると、喉から飛び出した無数の糸が、雅富士にからみついている
蜘蛛の糸！　土蜘蛛――いや、蜘蛛の子か！）
土蜘蛛は強力な式神だが、よほどの術者でなければ召喚できない　間宮は小さな蜘蛛を
あらかじめ人員に潜伏させ、雅富士の接近を待ち受けていたらしい
雅富士がもがく　その頭上に、人面の浮き出した奇岩が出現した
式神、威和頭　巨岩と呼べるものを持たず、落下するだけの下級式神だ
戸か一流であれば、かわすことも、魔術で防ぐこともできただろうが――
あいにく、鈍だ　奇岩は雅富士のひたいを直撃し、そのまま地面に叩きつけた
汐は舌を巻いた　間宮は恐るべき戦術巧者だ　下位の式神を使いこなし
「雅富士ーい、何チンタラやってやがる、この木偶があああ」
戸か壁を殴り、怒り狂った
汐は雅富士に同情した　操者があれでは、人形は不幸だ
間宮「てめえ、このクズが！　俺が加賀兄さんに叱られちまうだろうが！」
「その心配はしなくていいぜ」
言葉は、頭上ではな――　の真後ろから聞こえた
いつの間に移動したのか、その場の誰にもわからない
誰の理解も追いつかないうちに、間宮が　の背後を取っている

「そういや、自殺してやがったな　百人殺したとか何とか」
とぼけた調子でそういって、とん、と軽く　戸の後頭部を押す
「俺はまだ、　人目だ
ことり、と　戸の頭が地面に落ちた
いつ、どうやって切断したのか、やはり誰にもわからなかった
「すげえ！――さすが教官！」「――勝ったぞ！――
隊員たちの興奮が一挙に高まる　だが、　戸を倒して終わりではない
ふおー、と爆風のごとき魔力が降ってきて、隊員たちをなぎ倒す
天井の吹き抜けから、ゆっくりと加賀見大佐が降りてきた
軍靴に翼羽――重ね鷹の羽）の式神が宿り、加賀見に浮力を与えている
加賀見は命岩の前に着地して、そっと岩肌に触れた　それだけで威和頭が割れ、臓器[illegible]
が息を吹き返す　ボディは血だらけだが、傷は見る間に塞えていった
加賀見は開宮を見下ろして、にこやかに言った
「お見事です、開宮大尉。この件、貴官の功として、上に報告しましょう
功――とおっしゃいましたな？　そりゃ、どういう意味です？
開宮が問う　加賀見は凄惨な相好を崩し、やわらかく笑んだ
「見ての通りです　瀬宮Ⅰを勝手に持ち出し、狼藉を働いた悪漢――戸中樹を討ち取り、

[illegible]
[illegible]か餓鬼どもを喰っちまったのも　知らぬ存ぜぬで通すのかい
「彼女が？　そのようなことを？　それは聴取の必要がありますね――」
再び開宮の姿が消え、加賀見の眼前に出現した
加賀見の首を落とすつもりだ　肉眼では追えないほど鋭い手刀を、加賀見は指一本動か
さず、視線だけで受け止めた
強大な念動の盾――[illegible]の効果だ
「これは叛逆ですか　大尉？
「――俺に訊くより、てめえの胸に訊いてみな
「示唆に富む答えです　さておき、この程度の力で歯向かうのは――無謀ですよ」
加賀見から瘴気があふれ、開宮を弾き飛ばす　瘴気は途中で鴉に変化して、くちばしと
鉤爪で開宮を切り裂いた
そして始まる式神の応酬　鴉だの、蜘蛛だの、瘴気で作られた生物が激しくぶつかり合う
隊員たちは開宮の援護に回ろうとしたが、それは[illegible]が阻んだ
強烈な加重がかかり、隊員たちが一斉に膝をつ
――重力操作で、体重を増やされた　地面がへこみ、落ちくぼむ　隊員たちは大地に押
さえつけられ、身動きが取れなくなった

敵の力は圧倒的だ　このままでは全滅する
「僕が何とかしないと」
きい、汐のところまでは重力効果が届いていない
「汐！　何を呆けている！」
教練場のすみを駆け、アラタが近付いてきた　飛んでくる瘴気の塊を不動明王で払い
進路を切り開く
「雷真はどうした？　姿が見当たらん！」
答えられない　汐は唇を噛んだ　アラタは鋭く事情を察し、
――おまえ、あちら側か？――
斬りつけるように訊く　事実その通りなのだが、汐はやはり答えられなかった
アラタは背中を向け、さらりと言った
「見逃してやるから、失せろ」
「――っ」
それは、呪いの言葉を吐かれる以上に、汐を打ちのめす言葉だった
どうして　　たよ
落ちていく雷真が網膜に甦り、汐の心をぐしゃぐしゃにする
「雷真は　ぼくのせいで死んだ！　いなくなった隊員も…　ぼくのせいなのに！」
「[illegible]」

背中越し[illegible]アラタ[illegible]口調[illegible]
同・[illegible]は[illegible]加賀見の人[illegible]本音をすれな[illegible]
「他宗門の話だが、鬼人単機というのが――いや
アラタは照れくさそうに頭をかき、力強く言った
こちらが謝るところだ　おまえにはくれの疑いをかけたこと、すまなかった
日焼けした顔に、晴れ晴れとした笑顔が浮かぶ
「やはりおまえは、俺らと同じ訓練隊員だ
アラタ
「弔い合戦と行こう　やられちまった連中の
「――っん！」
よーし　蛆虫ども！
大気を震わせるような、間宮の怒声が響き渡った
「この悪党を撃滅しろ！　返事は――
「了解！」
訓練隊員たちが歯を食いしば　て立ち上がる　地面が沈むほどの重力に魔力で逆らい、
再び攻撃を再開した　火炎が空気を焦がし、銃弾が加賀見へと走る　加賀見は適当にいな
いたが、体力の浪費を嫌ったか、自らは後退し、機体に魔力を渡した
それと共に闇がゆがむ　加重方向がくちゃくちゃになり、振り回されるような違和感が

襲ってきた　嘔吐する者が続出し、重力で肉体がねじ切られそうになる

外壁が崩れ、建物が悲鳴をあげた　めきめきっと嫌な音がして、兵舎が傾き、片側の壁が破れて、海水が押し寄せてくる

兵舎の〈脚〉——躯体を支える杵が折れたらしい。隊員が傾いた地面をすべり落ち、波にのまれていく　呪いの効果はいまだ健在なので、現状、海水は猛毒に等しい。

「みんなっ　くそおっ！」

「これ、汐。そんな言葉を使うものではありません」

いきなり義兄の声がして、汐はぎょっとなった。

真上、折れた水道管の上に、加賀見が立っている！

加賀見はふところから拳銃を取り出し、汐に向けた

「おまえは思っていた以上にできる子でした　が、とうも密偵には向かないようです

飼い主の手を噛むようではね」

引き金に指をかける。刹那、誰かが横から飛び込んできた

必死な形相で加賀見を蹴飛ばしたのは——閻宮だった

靴底が加賀見の脚をとらえた　か、それは加賀見本人ではない

蹴られた加賀見が黒く変色し、粘り気のある瘴気に変わる

瘴気は閻宮の足にからみ、動きを封じた。蹴られたのは加賀見本人ではなく、八土牢を

[illegible]

本物の加賀見が閻宮の背後に回り　[illegible]り拳銃を抜いた

、ると思いましたよ、大尉。鬼と呼ばれた教官も、已の子は見捨てられませんか」

「——!?」

汐は目をむいた　已の子？　ぼくのことか？　では、閻宮教官は・!?

発砲音が一回、連続的に響き渡った

魔力を帯びた弾丸が閻宮の胸を貫き、穴を二つ、うがつ

汐の顔に血がかかり、硝煙の臭いが鼻についた。

式神が閻宮を放り出し、斜面の下へと投げ捨てる

波間に落ちていく閻宮と、一瞬　目が合ったような気がした

「と　父さああんっ！」

海に飛び込もうとする汐を、加賀見がつかみ上げる。

「無分別はよしなさい。おまえに銃を向けたのは演技です。私は怒っていませんよ」

「兄上　よくも　っ！」

「何を荒れているのです？　まさか、親子の情　ですか。理解はできますが、冷静になりなさい　上官を殺そうとした叛逆者を、やむなく射殺しただけです」

加賀見は汐をなだめ、そして　褒めた

「閻宮はかなりの手練れでした。彼を仕留められたのはおまえの功です。おまえはよい囮となりましたよ」

側頭部を金槌でぶん殴られたような気がした
そうだ　ぼくを護ろうとして、教官はやられた
眼下の海面に、もう間宮の姿は見えない
やっと実父に巡り会えたのに
正真を死なせたぼくが　父さんまで　殺してしまった　!?
実母のことを訊きたかった　汐のことを、どう思っていたのかも
か、それはもう、　度と叶わない——
「うう　うっう　っ—」
情けてくる　情けなくて、悔しくて、それ以上に自分自身が許せなくて
隊員と雌石の戦闘はまだ続いている。間宮を失った今、一方的な展開だ　その光景を
満足げに見下ろして、加賀見は機嫌よく言った
「私は間宮を憎んでいました。良家の姫君をたぶらかすような下衆ですからね。おまえにもその血が流れているのかと思うと、若干の嫌悪を禁じ得ませんでしたよ
「　　っ」
ですか、今はおまえを愛せもしましょう。おまえは血の因縁を断ち切り、新たに生まれ変わったのです　兄として言祝ぎを述べますよ」
にこやかに笑っている　本心からそう思っている顔だった。

魔術の力量はあちらがはるかに上だ　あちらは軍の将校で、大勢の部下を従えている。まして八卦牢を取り上げられてしまった。いさなぎ流の覚えはあるが、汐が普段扱う式神のレベルでは、義兄をぶっ飛ばすことなど、とてもできない
それでも
「さあ、汐　ともに黒斑に帰還しましょう　この兵舎は、これから砲撃て沈めます
「——断る」
「おや？　今、何と言ったのです？」
汐は顔を上げ、叫んだ
「断る—　あんたの言いなりになんて、　度となるもんか！」
加賀見は大した未練もなさそうに、汐のひたいに銃口を当てた
残念です。軍に処刑されるのは忍びない　せめて、兄の手で眠りなさい——
発砲の寸前、先ほどと同じように、誰かの蹴りが加賀見の顔をとらえた
既視感のある光景——だが、蹴ったのは間宮ではない
着物姿の可憐な乙女だ　跳んできた運動エネルギーすべてを消費するような、重い　撃を加賀見の顔に食らわせる
加賀見は兵舎の壁をぶち破り、監督室の方まで吹っ飛んでいった
くるんっと華麗な宙返りをして、乙女が汐の前に着地した

言うまでもなく、夜々だ
人丈夫ですか、汐さん！
ぼくは　平気だけど
俺がちょいと勉強してるあいだに、兵舎もずいぶん様変わりしたな」
聞きたかった声が、背後に聞こえる
すぐにも振り向きたくて、振り向いたら消えてしまいそうで、汐はためらう
だが、結局は——振り向いてしまった
間宮を肩に担いだまま、彼が立っている
また意識があるなら、質問許可を願えませんかね、銀鋼教官殿」
担いた間宮に向かって、彼は軽口のように訊く
もしも加賀見をぶっ飛ばせたら——俺が密偵になれそうか！
こらえきれず、汐はしゃくりあげた
赤羽雷真が、そこにいた

Chapter 7 月の光と、その下分

1

その少し前——
夜々！
船着場で立ち往生する雷真の前に、相棒の夜々が降ってきた
雷真　何をしてるんですか？
不審そうに雷真の足を見る　間宮の式神が足首にからみ、　歩も動けない
これが抜けなくて難儀してんだ　おまえ、取れるか？
たぶん　できます　雷真の足がもげなければ」
もげる！　も　と安全な方法でやってくれ！
でも、触れないです　何ですか、これ？
式神を知らな　のか、夜々は気持ち悪そうに、　瞬でちょいちょい触っている
式神を破壊するには、依り代を壊すか、魔術を用いるしかない　たが、夜々の魔術回路は金剛力、物理的な破壊力しか持たない

……ん……金剛力のこと、もっと詳しく聞いとくんだった

……したら、これを

ふところに手を差し入れ、巻物を取り出す。受け取って、雷真は仰天した

金剛力之書──って、金剛力の指南書か！

仕様書ですね。金剛力のこと、詳しく書いてありました

「屋敷で、硝子さんが渡してくれたんだな？」

あ、いえ、そう……なんですけど、違います

かいつまんで、夜々は道中のことを説明した

軍人に妨害されたこと。屋敷が無人で、もう踏み込まれた後だったこと。そして、夜々

は何のゆかりもない人間たちが、大勢、力を貸してくれたことを

夜々が帰還できたのは、乗り物を手配し、魔力を持つ者を捜し、軍からかくまってくれた

名も知らぬ善意の人々のおかげだった

そうか。大変だったな」

……。大変なのは、これからです

きりっと不敵に笑う。ほんの数時間で、ずいぶん大人びたように思えた

相棒も成長しているのだ。自分も負けてはいられない

「そうだな。硝子さんは心配だが、中将を助けるのが先決だ。中将が復帰しさえすれりゃ、

硝子も……！

夜々は……雷真に従います

ありかとよ。とは言ったものの、この巻物、とても全部は読んでられねえな」

そう思って、道中、夜々が目を通してきました

──マジか。俺に教えて……くれるのか？」

夜々はこっくりとうなずき、微笑んだ

もちろんです。雷真に足りないところは、夜々が補います」

──勉強が苦手なとことか？

……覚えの悪いとことか！

……も気付かないうちに、雷真は笑顔になっていた

……た。何も自分一人で背負う必要はない

こいつが、となりにいてくれるなら──

夜々……俺はもう、誰も死なせたくねえんだ

……夜々も、同じ気持ちです

……周囲も、アラタも──いつもこいつも守りたい。そういう力が欲しい

……きます。たって貴方の相棒は、日本一の──いえ

……んと自分の胸を叩き、誇らしげに言う

世界一の自動人形です！

……等だ。行くぞ！

「はい!
魔力を高める 二人の熱がからみ合い、競い合うように、天井へと立ちのぼった

2

涙でにじむ汐の視界に、間宮を担いで、雷真が立っている。
海中から引き上げたらしく、人そろってずぶ濡れだ 呪いの影響はまだ残っていて、
衣服や肌がしゅうしゅうと焼け落ちていく。
「この数 死にてえのか —
血を吐きながら、間宮が雷真を罵った。
「俺のことなんざ ほっとけ! 汐を連れて 逃げろ!」
言っただろ。デキの悪い蛆虫は、命令に従うのが苦手なんだよ」
雷真は傾いた足場を器用に渡り、器具室の床に間宮を横たえた
朧富士はまだ健在で、隊員たちの戦闘は続いている。そちらを警戒しつつ、夜々と汐も
器具室に入った。
間宮は雷真の襟をつかみ、かすれ声で怒鳴った
「ことごとく逆らいやがって てめえは 審値失格だ —
知っ る、だから、みっちり仕込んでもらうさ。これからも、な」

目の指から力が抜け とさり と床に落ちた
「 甘ったれるな この先は てめえで勝手に羽化しろ」
視線が泳ぐ。もう目がかすんでいるらしい
「俺は ここまでだ てめえは 無駄なことをしたぜ
「そっちこそ甘ったれんな! 何とかもたせろ! あんたにはまだ、やらなきゃならね
ことが残ってるはずだ。たとえば、息子にワビを入れる——とかさ」
雷真が視線でうながしてくれる 汐は間宮の前に膝をつき、間宮を見つめた。
しばらくのあいだ、間宮の不規則な呼吸だけが聞こえていた。
ややあって、先に口を開いたのは、汐だった
お父さん、なの?」
間宮は小刻みに震えた。それから、ふう、と長い息をついた
決してひと言では言えないはずの想いを、ひと い 口にする
悪かったな」
汐の体の奥底で、熱く、熱く、何かが燃えた
お父さん —」
初めてしがみついた実父の体は、気の毒なくらい、冷たかった
へっ、泣き虫野郎が みっともねえ —
そういう実父の声もまた、涙で湿っている

父の大きな手が、汐の肩を抱き寄せる　汐は闇宮にすがりつき、嗚咽した
汐を抱きしめながら、闇宮は雷真の足をつかんだ
「おい雷……雷真……！
ずいぶんだな　何だよ？
またまた……息子と……話し足りねえんだ
歯を食いしばり、しぼり出すように言う
「だから……俺たちを、頼む……！
ああ　任せろ
力強くうなずく　それで、闇宮は安堵したらしい　まぶたを閉じ、静かになった
お父さん？　お父さん！　お父さん……！
ゆさぶるな　気絶しただけだ……たぶん
とはいえ、闇宮の胸には貫通銃創がある　いつ死んでもおかしくはない
一刻も早く手当てしなくては　処置の方法を探し、あたりを見回したとき　視界のすみ
で瓦礫の山が吹き飛んだ
崩れた壁の向こうで、加賀見が立ち上がる
ひたいを切ったらしく、顔が血で染まっている　だが、消耗している様子はない　全身
に妖気がまとわりつき、加賀見の体を護っていた
……は……見……事……尋常ではない剛力ですね　軽く　万貫を超す衝撃でした」

……が……く　と　波が凪いだような　不自然な静寂が……
加賀見がわずかに目を見張る　斜面に引っかかっていた訓練隊員たちも、彼らをなぶ
った朧富士も、一斉に静まり返った
そ……とするような寒気。雷真から、猛烈な魔力を感じる
夜々
は……
床が砕け、夜々の姿が消える　直後、加賀見の後ろで朧富士が吹き飛んだ
蹴りが当たったのだ　汐も、訓練隊員たちも、加賀見さえ、驚愕の表情で夜々を見
夜々の瞬発力は今、加賀見の予測すら上回った
まして、朧富士は思考力が弱い　なす術もなく、海中へと叩き落とされる
戻れ、朧富士――戻りなさい！
加賀見が叫んでも、浮上してくる気配はない
……の破壊――よくて稼働停止に追い込まれたようだ
……なことに、加賀見が施した呪術の効果が残っている　海中で気絶したりなら、無事
……はずがない　急いで回収しなければ、永遠に失われるだろう
……は感心した様子で、ふところに手を伸ばした
……どうやら私は、敵を見誤っていたようですね
護身刀を引っ張り出す　あれを依り代にして、人式神を呼び出そうというのだ

召喚の隙を与えては、勝ち目がない　汐は声を張りあげ、警告した
「雷真！　それを呼ばせちゃ駄目だ！」
「だとよ夜々。させるな！」
「はい！」
再び夜々が地を蹴り、一足飛びに加賀見に迫る。
速い、が、力任せの単純な蹴りだ。加賀見は見切って身をそらし、体をかわしざま、足でその場に召喚の魔法円を描いた
「式権現沙乙姫、きたりま征！」
蛇身刀を掲げて命令する　刀身が輪となり、巨大な式神が召喚された
上半身は美しい女性で、下半身は大蛇の首という、おぞましい怪物だ
夜々は臆さず、蹴りにいく。だが、蛇はやすやすと蹴りを止め、弾き返した
同時に瘴気の霧が噴き出し、夜々を包み込む。
沙乙姫は水蛇の式妖――海水を酸や毒素に変える性質がある　あの霧の中では、潮風も致死性の毒ガスとなる！
夜々が霧から飛び出してくる。案の定、肌は真っ赤にただれていた
しかし、あきらめない
雷真が魔力を送る　夜々はさらなる力を発揮して、みたび加賀見に突進した
小細工もへったくれもなく、毒霧を正面突破して、沙乙姫にぶち当たる。沙乙姫は大蛇の上半身で迎え撃ち　力任せの押し合いになった
腕力では夜々が勝る。沙乙姫の巨体がよろめき、隙が生じた　夜々はすかさず追撃を仕掛ける――
だが、黒い影がすべり込んできて、夜々の進路を阻んだ
「お手伝いするわよぉ、加賀見さん♡」
妖しいほどに美しく、影が笑う
それは、はぐれ〈影法師〉の正体であり、訓練隊員を襲った危険な化け物
「るりさん――！」
夜々がうめく　その言葉通り、現れたのはるりだった。
るりの衣装は胴回りが腐蝕され、肌が露出している。なまめかしい曲線を描く腰には、何やら刺青が彫られていた
月光を浴びて、白い肌に浮かび上がるのは――銘だ。
雷真と夜々が同時に「あ！」と声をあげる。
その銘は、化鯨斎、と読めた。

3

夜々が人形に弾き飛ばされた瞬間、小紫はびくっとした

「ひょっとして――夜々姉さま、やられちゃうのっ」

いろりもまた、小紫と同じくらいに狼狽した。船窓に張りついて、必死に夜々の姿を目で追った。

艦橋――に破壊され、具合はすっかり傾いている。こちら側の壁が大きく崩れ、おかげで戦いの様子がよく見えた。

張り出した壁や倒れた柱などに、瀕死の隊員たちが引っかかっている。彼らの自動人形は、もう大半が失われたようだ。少年たちも満身創痍で、とても戦える状態にない。

たまりかねたように、いろりは硝子に訴えた。

「主、もう我慢できません！　どうか、私の拘束を解いてください！」

「駄目よ」

硝子は取り合わず、ふーっと紫煙を吐き出した。

彼女だけが拘束具を外していて、完全に自由の身だ。どこから調達したのか、ちゃっかり煙管まで取り戻している。稀代の名――花柳斎硝子にとっては、この程度の拘束具など玩具みたいなもの――ということか。

いろりは焦れて、切なそうに身をよじらせた。

「いつまでこうしていればよろしいですか！　こうしているあいだにも、夜々が――！」

「それは俺も聞きたいところだな、硝子よ」

中将は青い口髭をゆがめ、ひどく苦い顔をする。

「なぜ俺を自由にしてくれん？　待ちに待った好機到来――加賀見はあちらにご執心だ。今ならこの艦、すぐにも掌握してやるものを」

「この艦を押さえてしまえば、形勢は逆転できる。兵舎の安全は確保されるし、訓練隊員を収容し、手当てもできる。艦には砲撃能力も、治療の設備もあるのだ」

「そうでしょうね。なればこそ、解放するわけにはいかない」

硝子は紫煙をくゆらせているだけで、あくまでも動こうとしない。

「今は坊やの戦いを見物しましょう。きっと、なかなかの見せ物よ」

「主！　そのような悠長なことで、夜々にもしものことがあったら――」

いろりが涙ぐむ。硝子は笑い出した。

「おまえは本当に夜々が好きねえ！」

「ですから、そのようなことではなく――主の身を案じて、申しているのです！」

「もう少し辛抱なさい。これは夜々のためでもあるの。夜々と坊やが真に〈相棒〉となれるかどうか――ここがその分水嶺。誰にも邪魔はさせないわ」

硝子の切れ長の眼が、刃物のように鋭くなった。

きゅう、と、おへそのあたりが苦しくなって、小紫は少し震える。

今夜の硝子はちょっと怖い。いろりとかいう女性と会ってから、様子が違う。

夜々と雷真のことも心配だ。けれど、小紫には無事を祈ることしかできない。そのことがもどかしくて、生まれて初めて、護られるだけの自分を不満に思った。

1

るりの胸に〈花御斎〉の銘がある
夜々の腕にあるのと同じものだ　それが何を意味するのか、誠真はすぐに理解した
るりさん　あんたは
そうよ　私も花御斎人形」
やはり　！　るりは人間そっくりで、操者なしに魔術を行使できる　花御斎プラント
の最高級人形なら、納得だ
誠真よりも夜々が受けた衝撃の方が大きい　夜々は呆然と立ちすくんだ
るりはにっこりと、普段通りの優しい微笑みを浮かべた
そういうことよ、夜々ちゃん　わたしは雪月花のお母さん世代なの
だったら、どうして　!?　どうして、そんな人に味方してるんですか!?
「そんな人って――失礼しちゃうわ　ねえ、加賀見さん」
加賀見に抱きついて甘える　加賀見は苦笑しただけだ　興味深そうに、花御斎人形同士
の会話を聞いている
るりと加賀見は恋仲のようにも見える。夜々はますます狼狽した
「その人から離れてください！　その人は、隊員を何人も殺したんです！

「[illegible]よ　こ[illegible]は命令した[illegible]」
「どうしてそんな命令に従ったんですか!?」
「愛してくれたから」
「――」
愛してくれる人のために戦うのが、人形としてそんなにおかしなこと？」
夜々が怯み、後ずさる。――二人の議論は自然なようで、まるで噛み合っていない
互いに立脚点が違う　るりはもう、殺人に罪悪感を抱いていない
好きになった人が、好きになってくれるとは限らないわ　愛されること、必要とされる
ことがどれだけ嬉しいか、夜々ちゃんにはわかるでしょう？
それは
大切な人のためなら、どんなことでもしてあげたいでしょう？
だけど！　人殺しなんてっ
かぶりを振る　夜々はぎゅっと目をつむり、細い肩を震わせた
私が……夜々が好きだったるりさんは、そんなこと……する人じゃなかった……
るりは夜々を見つめ、やがて切り捨てるように言った
誤解していたのよ　自分に都合のいい、幻想を見ていただけ」
だって、貴女は夜々に優しくしてくれました！　そんな必要はなかったのに――人形の
心得を教えてくれました！　泣いている夜々に、大事なことを教えてくれて……るりさん

は！ 優しい人なんです！
一人じゃないわ 人形よ
「――――！」
夜々のまぶたから、涙がこぼれ落ちた
夜々がここに戻ってくるのを、色んな人が……助けてくれました…… 見ず知らずの人
か人物 それは るりさんがしてくれたことと、同じで
るり さっさと使い手を始末して、はくれを奪いなさい
加賀見の冷たい声が、夜々の言葉をかき消した
るりは困ったような顔をして、
雷真さんは貴重な血族の子よ？ 殺していいの？
飲んでしまってはどうです？ 君にとっては「美味しい」でしょう？」
ほんの一瞬、るりの顔に痛みのようなものが走った
そうね そうするわ
るりは加賀見の手を離し、泣きじゃくる夜々に歩み寄った
…と夜々に手を伸ばす その手が、妖気の刃に変貌した
闇色の刃が夜々の頸動脈を狙う だが、夜々の首には傷もつかない
雷真がとっさに夜々を抱き寄せ、攻撃範囲から引き戻している
雷真は相棒の胸を抱きしめ、るりに向かって言った

「……くりぃ」
「……お姉さんの方が強いのに 逃げる道理なんてないわよぉ？
「俺たちは善人だと、俺の相棒が信じてんだ 俺もそっちに賭ける」
…の表情が強張る いつも笑っているような顔に、初めていら立ちがにじんだ
「……賭け事はやめた方がいいわよ、雷真さん あなたは――」
その続きは、真後ろから聞こえた
隙がないわ
自分の影から雷真の影へと、一瞬で移動した――ようだ
るりが内蔵する魔術回路の効果であるのは、間違いない だが、…が使うのは、
物質の形状を変える魔術だったはず
考えている暇はない るりの右腕が影となり、今度は大鎌に変貌する
大鎌が雷真を襲う 追い立てられて下がった途端、背後の水道管が槍に変化 た
あやうく串刺しにされるところだ 夜々が穂先を蹴飛ばして、どうにか命を拾う だが、
…に夜々が貫かれ、ふとももから出血した
「…ア…」
「…です！ それより あの魔術 影を操ってるんです！
相棒の指摘で気付く なるほど、るりが操るのは物質ではなく、影そのもの――
…は実体とリンクしている 影を操作することで、実物にまで影響を与えるか それは

魔術に特有の、「因果関係が逆転した」理屈だ。

これは恐るべき魔術と言える——影なんて、どこにでも落ちている——

相手に魔術を使わせまいと、夜々はるりに猛攻を仕掛けた。

るりは影から影へと移動して、やすやすと蹴りをかわす。かわしながら刃を振るい、夜々の足を裂く。そうした攻防が幾度も続き、夜々は血だるまになった。

〈駄目だ——! この敵には、金剛力の隙を突かれる——!〉

雷真は歯噛みした。敵の攻撃を防ぐには、夜々の体を硬くするしかない。だが、常に鋼の強度を維持していては、まったく筋肉が動かず、身動きが取れない。

相手の攻撃タイミングが読めていればいいのだが。夜々には体術の覚えも、戦闘経験もない。この相手には、簡単に隙を突かれてしまう。

雷真が強制支配で制御してやれば、攻防の切り替えはまだしも上手くいくだろう。だが、雷真はまだまだ未熟で、強制支配がうまく使えない。

八方塞がりだ。対策が見つからない。

必死に考えているうちに、ふと、月が消えた。

見上げると、雷真に覆いかぶさるように、蛇女が立っている。

加賀見の式神だ。間合いに入られていた——!

大木のごとき尾で叩きつぶされる。斜面をすべり、雷真は海面へと転がり落ちた。

じゅうっ、と左腕が海水に焼かれる。あまりの痛みに、絶叫がほとばしった。

「雷真!? しっかり——ああっ——」

雷真と同じように尾で打たれ、夜々が落ちてきた。夜々は雷真を巻き込み、二人仲良く海中へ没するハメになる。全身を焼かれる苦しみに、そろってもがく。

〈駄目だこりゃ——俺たちは全然、力が足りてねえ——!〉

今の雷真と夜々では、金剛力が生かせない。

どの標的を、どういう手段で、どう攻撃するか。フェイントをどう挟むか。相手をどう崩すか。実戦のさなか、口で言えるものではないし、言えば相手に筒抜けだ。

魔力で伝えるだけの技術はなく、あうんの呼吸で連携できる信頼関係もない。

今さらながらに、赤羽一門の戦術書を思い出す。陣形や攻撃手順、魔力の質を、口頭で伝える技術があった。せめて、あれを習得しておけば——

心が萎えかけた、そのとき。

「千妖万邪ことごとく奔るべし——式権現千藻媛、きたりま征!」

いざなぎ流の祭文が聞こえ、誰かが式神を召喚した。

瘴気が色彩を帯び、巨大な神像——如来像へと変貌する。

黄金とも白金ともつかない淡い色合い。神々しくも威風堂々。体躯は人間の二倍ほど。巨人というほどではないが、みなぎる存在感に圧倒される。衣装はまさしく仏像のそれで、ゆったりとドレープの溜まった布を巻いている。

あふれる魔力が輝きを帯び、後光のように見えた。

如来か指を立てると、そこに光の輪か［illegible］し、高速で回転を始めた
光輪 それを、るりめがけて投げつける るりは影に潜ってかわしたが、光輪はそのま
ま飛び、加賀見の大式神に激突した
兵舎が揺さぶられ、［illegible］ートに揺れる 軍艦の砲と大差ない、凄まじい威力だった
すけえ―― 何だ、ありゃ
「雷真！ ぼさっと するなよ！
滝のような汗を流しつつ、汐が器具室から顔を出した
沙乙姫は ぼくたちが押さえる！ きみは るりさんをやれ！」
たち って――
そら、加勢しろ！ 汐を護れ！
応！
アラタの号令とともに、決死の少年たちが攻撃を仕掛けた
爆炎が噴き荒れ、瓦礫が弾け飛ぶ 銃弾の火花が流星群のようだ
その程度の攻撃では、加賀見の式神には傷を負わせることもできない たが 八方から
矢継ぎ早の攻撃を受け、加賀見の動きが鈍った 慎重な性格が災いして、防御を解くこと
かできないようだ 加賀見は生身の人間であり、銃弾が直撃すれば命に関わる
アラタの不動明王と、汐の如来像か、敵の虹女を押さえ込んでいる
彼らの奮闘を見て、萎えかけた雷真の心に、再び闘志が戻った。

輪 ［illegible］足りなか たと 愚痴った ところで意味はない
今できることをやるしかない 死力を尽くすしか――ない！
雷真は夜々を担ぎ上げ、足場に這い上がった
あら、まだやるのね 強い子ねえ、感心感心
いつかのように るりが優しく褒めてくれる
けれど、実力の方はまだまだね それに、夜々ちゃんか弱すぎる。姐さんもつまらない
魔術回路を編んだものたわ 旧作のわたし――〈胡蝶炎〉に劣ってるしゃない
す、すみません 雷真 っ
〈す と鼻を鳴らし、雷真の胸で夜々が泣いた
同じ花柳斎人形なのに 夜々は全然 歯が立たなくて っ
違う あっちの方が強えなら、硝子さんはおまえを作らなかった 勝てない理由はただ
一つ、使い手の俺がヘボなんだ
…っ、と夜々の顔がゆがむ 雷真はその背に右手を当てて、魔力を送った
な相棒 考えるのは俺に任せろ 俺が何とかする！
はい！
もう結構です るり、ここは任せました
爆音が轟く中、加賀見の冷ややかな声が、はっきりと聞こえた
［illegible］けた顔で加賀見を振り向く

「それは……どういう意味？」

「総て始末をつけます　私のために時間を稼いでくれますか」

るりは言葉に詰まり――しかし微笑んで、うなずいた

「ええ、もちろん」

「では、頼みましたよ」

加賀見は呪符を放ち、足もとに式神を召喚した

黒い紙絵のような式神だ　瞬く間に加賀見を引き込み、消えてしまう

（転移の式神――軍艦に戻ったのか　何をするつもりだ？）

その答えは、すぐにわかった

巡洋艦の甲板で、カッと光が閃いた

何かが兵舎を貫き、空間をぶっ叩いたような、凄まじい衝撃が走る

汐の如来が霞のようにかき消され、瓦礫が噴水のごとく噴き上がった

――砲弾が兵舎を直撃したのだ

巻き上げられる木材、鉄塊、少年たち。雷真も衝撃波でなぎ倒され、吹っ飛ばされた

腹に瓦礫が当たり、引きちぎられるような激痛が走る

爆風が収まったとき、雷真は水道管に引っかかっていた

朦朧とする頭を振り、巻き上げられた埃の向こうに目を凝らす

あたりは静かだ　隊員たちは倒れたまま動かない　ようやく汐を見つけたが、汐もまた

……から外れ、静力を下敷きに……て転が……

下敷きになっているのは、彌宮だった

偶然か、必然か　気絶していたはずなのに、娘を庇ったようだ

そのせいで、出血量が増えている　汐は取り乱し、父にすがりついた　――あのふんて

は、汐ももう戦えない　如来像を失い、魔力を大きく減らしている

洋上では、きゅるきゅると砲身が鳴き、角度の微調整が行われていた

がこん、と金属音が響き、次弾が送り込まれたのがはっきりわかる

「夜々！　どこだ、夜々！」

雷真は天に向かって吠えた

力が欲しい。どうしても今、相棒の力が欲しい！

想いが通じたのか、燃える燐を蹴飛ばして、上から夜々が姿を見せる。

「夜々！　無事でいてくれたか！」

「夜々は……天下の花嫁人形……このくらい、屁でもありません！」

「年頃の娘さんが屁なんて言うな！　すぐにあの軍艦を――」

「どうする？」

「……たるん、発射間隔が短い連装砲だ　今から跳んで、止められるか！」

立ちつくす雷真に、夜々が言った

「魔力をください　あの大砲、夜々が受け止めます」

なに……

「早く……たまがきてしまいます」

「無茶だ！　おまえ、人砲がどんなものかわかってんのか。まわりを見ろ！　鉄だろうが何だろうが、ぶっ飛ばして、穴をあけるような――」

「雷真こそ、雪月花がどんなものか、わかっていません」

ぴしゃりと叱るように言う。――半年前のような、険しい顔ではない。えほどるりと相対していたときの動揺も、微もない。夜々は心から雷真を信じ切った声で、はっきりと言った。

「夜々を信じてください。爆発しないよう、上手くいなしてみせます」

「そんなことが……できるのか？」

「できます。雷真が夜々を信じてくれるなら。二人の呼吸さえ合えば、全潮力の、真の力を引き出せるなら――」

雷真は覚悟を決め、渾身の魔力を燃やした。髪が逆立つ。自分のどこに、これほどの魔力が眠っていたのだろうと思う。それを丹田で練り上げ、気迫とともに、相棒へ送り込んだ。

「頼む！」

「はい！」

人……を入れた、その刹那。

由伴……チ超の砲口が火を噴き、鉄の塊が超音速で飛んできた。

……は自分の目を疑った。

この時代、陸戦――とりわけ白兵戦では、機巧魔術が猛威をふるっている。……れは海戦にも当てはまり、大艦巨砲主義が衰退する……助となった。さすがに巨砲を用いれば、大半の自動人形は破壊できる。

……たが今、その……般論を否定するような光景が広がっている。

戦艦の主砲を、たった……体の自動人形が受け止めた。

砲弾は……瞬だけ夜々の抵抗を受けたものの、するりとウナギのようにぬめり、斜め上……とすべっていった。そのまま後方の洋上に着弾し、巨大な水柱を立てる。

砲弾の通過で衝撃波が暴れる――が、それだけだ。夜々は傷……負わず、さほど足場を崩しもせず、そのままの姿で立っていた。

月光を弾く黒髪。肌は真珠のようにきらめき、その立ち姿は神秘的ですらある。

あれが、雪月花……！

惚れ惚れするような自動人形だ。隊員たちにも感嘆が広がった。

人形に比べたら、雷真の方が無様な状態だ。彼方へ弾き飛ばされ、すり傷だの切り傷だ

ノ、全身血まみれ　そんなさまでも、彼は戦いをやめようとしない
どれだけ生命力が強いのか、重傷の体に鞭を打ち、立ち上がる
いいぞ、夜々……！　次の装填前に、軍艦に飛び移る！」
いえ　それは困るわ　ここにいてもらわないと
――夜々の返事ではない　にゅっと雷真の影が変形し、るりが這い出してきた
肩で息をしている　どうやら、魔力切れが近いようだ
雷真はるりを見つめ、哀切を帯びた声で言った
あんた、脱出はどうする？　あの艦まで移動できるのか？
「……さすがに、無理かしら　でも大丈夫、加賀見さんが助けにきてくれるもの
これよ　いい加減、気付いてるんだろ　あいつはあんたを捨てて　たんだ
「まあ、ひどい　加賀見さんはわたしを信じて、託してくれたのよ」
あいつの目を見なかったのか？　あいつはあんたを捨て駒としか思ってねえ」
ふふ――別に、それでもいいんだけど　そんなことを言い争ってる場合？
確かに、そんな場合ではない　るりが少し時間を稼げば、次弾が飛んでくる
次は受け止められるかわからない　砲を沈黙させなければ、いずれ全員が死ぬ
夜々はあせった　無理して召喚した上薬姫は初弾でやられてしまった　もう一度召喚する
ほどの余力は　夜々にはもうない　魂鎮めに使う依り代もない
絶体絶命――だが、雷真は相棒の肩を抱き、何やらささやいた

一体、何を……なのか　夜々は正気を疑うような目をした
「そんな……まるっきり博打です！
「博打上等、俺を信じろ　俺も、おまえを信じる」
夜々は一瞬　躊躇した　たが、きりっと顔を上げ、
はい！」
よし！　頼んだぞ！
魔力を渡す　夜々は金剛力を得て、一直線に駆けた
かまいたちが生じるほどの、猛烈な蹴りをるりに見舞う　そこらの人形なら　撃てスク
ノブだろうが、るりは影の中に逃げ込み、簡単にかわした
体が泳いだ夜々に、反撃を叩き込もうとする――
その瞬間、夜々はこれまでにない反応を見せた
るりの刃をかわしざま、蹴りを放つ
蹴りは見事にるりをとらえ、よろめかせた
強制支配――いや違う！
合図を送ったんだ！
夜々には相手の位置が見えなかったが、術者の雷真には見えていた　雷真は攻撃すべき
――グレ　敵のいる方向だけを　魔力で伝えたに違いない
強制支配ができなくても、その〈らい〉ならできる

互いに足りない部分を、工夫と絆で補った！
気に流れが変わる　両者がぶつかるたびに、るりは目に見えて消耗した　夜々の動き
は次第にるりを凌駕して、防戦一方に追い込んでいく
「くっ　これならどう!?」
るりが叫んで、影に潜った
しん、と静寂が訪れる　不意討ちで大技を仕掛けてくる　かもしれない　隊員たちが
身構え、攻撃に備える
だが、るりは彼らではなく——汐の影から飛び出してきた
「ごめんなさいね、汐さん」
もう至近距離だ　これはさすがに反応できない
るりの犬歯がせり出し、汐の首筋に噛み付こうとする　汐は死を覚悟した
だが、結論から言えば、犬歯が汐の頸動脈に刺さることはなかった
夜々がるりの首をつかみ、汐を守る
見てから駆けつけたのでは、間に合わない　雷真はこの展開を読んでいたようだ
夜々とつかみ合ったまま、るりは遠くの雷真に笑いかけた
「やるじゃない　わたしが汐さんを狙うと、わかっていたの？」
「言ったろ、加賀見はあんたを捨て駒としか思ってねえ　その証拠に——戦闘中一
度も、あんたに魔力を渡さなかった」
「それが何？」
「確かに、加賀見がるりに魔力を渡すような場面は、ただの一度もなかった
魔力が切れりゃ、あんたは終わりだ　必ず補給に走る　狙いはたぶん、あんたじゃ一
番『美味しい』獲物——つまり、魔力の高い奴だ」
「案外、よく見てるのね　仙人の話も　聞いてるみたい」
上手くはいったが、これは博打だ　るりが血を補給しようとしなければ　汐ではなく、
雷真やほかの隊員を狙っていたら　雷真の思惑は空振りに終わっていた
「ちゃんし　ない　賭け事の才能」
るりは可笑しそうに笑った　それから、とがめるような目をして、
「のんびりしてていいの？　砲撃は？」
雷真はあごをしゃくった　見れば、巡洋艦の甲板上で、火の手が上がっている　火の粉
が逃しで、小さな粒子がきらきらと輝いていた
「あれは……雪？」
「夜々の姉ちゃんが暴れてる　砲撃なんざ、もう無理だろうぜ」
——なるほど、あの様子では、こちらを攻撃する余裕はない
決着はついたも同然だが、るりはあきらめなかった
溢れるほどの魔力が、るりの心臓から引き出される
「……無理すんな　もう魔力が切れてんだろ——」

「あなたは化椰扇を知らない　どんなに恐ろしい人だったか——わからせてあげる」

るりの肌が真っ黒に染まり、端から暴発していく　代わりに膨大な魔力が生じ、るりは再び魔術回路を起動した

自らのボディを魔力に変換し、正真正銘、影の化け物と化す

化け物が吠えるだけで、気力が根こそぎ奪われる気がした　るりはどんどん出力を上げ、夜々を押す　夜々もまた、相棒に魔力をそそぎ、るりを押し返そうとした

怪物と、乙女が、その魔力で競り合っている

「誰にも邪魔はさせない　わたしは加賀見さんのために戦う」

獣が叫ぶ　咆哮とともに、凄まじい圧力がのしかかってきた

「駄目だ——こんなの……絶対、押し切られる……」

夕は闘宮の体を抱え、両者から距離を取った

……が、本当は、そんな気を回す必要もなかったのだ

「るりさん」

夜々が哀しげに顔をゆがめる　驚いたことに、夜々にはまだ余裕がある！

やがて、るりが押され始める　全身を覆っていた影が消え、顔が露出した

るりは歯を食いしばって耐えていたが——やがて、ふっと表情をやわらげた

「好きな人の……役に立ちたいんでしょう？」

「……！」

「……覚悟を決めなきゃね？」

夜々は目を伏せた

ためらいを振り切り——全魔力を爆発させる

夜々の鉄拳がるりを撃ち上げる　るりは宙を舞い、軽々と吹き飛んだ

夜々は大粒の涙をこぼしながら、声にならない叫びをあげた

それは、親とはぐれた仔狐があげるような、痛々しい泣き声だった

6

「決まった！　決まりました、……！」

破壊活動の手を止めて、いろりが叫ぶ

「見るのだ　小雪！　夜々が敵を倒したぞ！」

小雪の手を取り、飛び跳ねて喜ぶ　よほど嬉しいのだろう

硝子はやれやれといったふうに、ため息をついた

「……なに跳ねないで　船が揺れるわ」

「ここまで重くはありません！」

「……姉さま！　あれ！　女のひと！」

小雪が指を示す　川面を漂う木の葉のように、くるくると回りながら飛んでくる物体が

わ 力 壁に優れた小紫には　それが何かす　にわかった

と艦内で会　た女性、るりだ

り、受け止めなさい

得ました！

辯の水蒸気がたちまち氷結し、幾重にも重なる薄氷の層を生み出す

その薄氷を次々と砕いて、るりがゆっくり落ちてきた

落ちてきた姿を見て、小紫は思わず顔を覆った

あまりにも、変わり果てている　全身が崩れて、ほとんど原形をとどめていない

ただ顔だけは、変わらずに美しさを保っている

硝子はいささかもためらわず、瀕死のるりを膝に抱いた

死相の浮いたるりの顔が、かすかに動い　、硝子を見上げる

ああ、姐さん　　これは　夢かしら

　ね　この世のことなんて、何もかもが夢芝居　うたかたの夢よ

　か　綺麗ねえ」

えみかけた満月を眺める　その顔は荷を降ろしたように晴れやかで、　くし

息を吐いてから吸うまでの間が、次第に長くなっていく

あのね、姐さん　　わたし、人形になんて　　なりたくなか　た

硝子の目元に　わずかに驚きか広がった

「でも、貴女は自分から――」
「だけど、姐さんを　盗られちゃったから」
るりは悪戯っぽく微笑み、途切れ途切れに言葉をつむく
「ふふ　知らなかったでしょ？　わたしが好きなのは、姐さんだった　―」
頬からひと筋、血があふれる　硝子はそれを指先でぬぐい、
「愚かな子　貴女は気付いてなかったのよ」
そっとるりの頬を撫で　耳元でささやく
「月の半分は、見えなくたって、そこにある
――――
半分のときはとなりに　満月のときは後ろに　貴女の側に私はいたわ　だって貴女は私の可愛い、たったひとりの妹だもの」
すう、と涙がひとすじ流れ、るりの心臓が鼓動を止めた
ボディが一瞬で霧と化し、黒蝶となって、風に溶けていく
ひらひら、ひらひら　桜が散るさまに似ている　最後のひとひらが散ってしまうまで、硝子は身じろぎもしなかった
小紫の目には、硝子が泣いているようにも見えた　だが、ため息とともに振り向いた硝子は、いつもと同じすまし顔だった
水没しかけた兵舎に視線を投げ、口角を上げる

「お見事、坊や　けれど　いつも課題が見えたわね　今の坊やには　逆立ちしたって赤羽天全に届かない　勝負にもならないでしょう」
いろりが不安げな顔をした　遠慮がちに、硝子の背中に問う
「――それでは、我々は――」
「悲観することはないわ　坊やはまだ、よちよち歩きの赤ん坊　若さとは可能性――人は可能性を結果に変えて生きて行くものよ　あの　人なら、きっと」
ややあって、　人の近くで爆発が起こった
木の幹がぽきりと折れ、その下から柳中将が姿を見せる。
「ふん　こんなものかよ　海軍は腰抜け揃いだな」
ぎろり、とあたりを睥睨する　既にあたりは死屍累々――まともな戦力は残っていない
賊方はいろりと中将が片付けてしまっている　もう抵抗する者はいなかった
「加賀見は逃がしてしまったな　急ぎ身柄を抑え、締めあげねばならぬ」
「殺して」
凍りつくような硝子の声に、いろりも、小紫も、そろって立ちすくんだ
「殺して――」
もう一度、繰り返す　今まで姉妹が聞いたことのない、冷え切った声だった
小紫は　わかった、と言って、それから、白みかけた空を見上げた
夜明けが近い　いまだ煙のくすぶる監獄島では、隊員たちが手を取り合って、負傷者の

救助と消火活動にあたっている
その中に、雷真と夜々の姿もあった
甲板からそちらを見下ろし、中将はにやりとした。
「密偵を誰に命ずるか、これで決まったな」
「——よろしいの？」
「あれほどの智と勇、力を見せつけられて、ほかの選択肢があると思うか？」
質問に質問で返され、硝子は苦笑した
「中将がそうおっしゃるのなら、この花柳斎、異論のあろうはずもないわ」
「皆、思い知ったはずだ。彼奴と己の差をな　もはや選抜の必要もなし。うぬが推薦したあの小僧——あれを軍の密偵とする」
つまり、密偵は雷真だ！
小紫は嬉しくなって、いろりの胸に飛び込んだ　普段のいろりなら小言を言う——中将の前でお行儀が悪いとか何とか——が　夜々が認められて嬉しかったらしく　小紫を抱き止め、一緒になって喜んでくれた
中将は厚い胸板を叩き、潮風に負けぬほどの声で、高らかに宣言した
「英吉利へは、赤羽雷真を遣る！」

7

水平線がまばゆく光り、太陽が顔を見せた
訓練隊員たちから勝ち鬨があがる。アラタも、彼の仲間たちも、収容した負傷者たちも、心の傷を無理やり押し込めるように、声を張り上げた
それから、アラタがこちらに駆け寄ってきて、間宮の看護を代わってくれた。
「教官の手当ては俺たちに任せろ　傷を縫合し、〈加持〉を行う」
「加持——加持祈祷？」
「ああ、大船に乗ったつもりでいろ、俺の実家は霊験あらたかなんだ」
励ますように言う　汐が取り乱さないよう、気遣ってくれているのだ
「おまえは出血の方を組む　あいつも無事ではないだろう？」
ここにいて父の手術を見届けたいと思ったが、危険な状態になったとき、平静でいられる自信がない　大騒ぎして、かえって危機を招く可能性もある。
「——うん　じゃあ、任せる
汐は自分の上着を脱ぎ、父の足にかけてやった　少しでも冷気を遮断しよう、という娘なりの気遣いだ　タンクトップ一枚では早朝の冷気が堪えたが、我が身の寒さなんて気にならない　だが——周囲の男子たちは気になったようだ
汐の胸元を見て、ぎょっとしたような顔をする。風に押されて張りついた生地が、隠しようもなく　ふたつのふくらみを浮かび上がらせてしまっている

汐も失敗に気付いたが、今さら気にするのも馬鹿らしい　汐は構わず、そのまま雷真の方へ歩き出した。

半分水没した教練場に、夜々と雷真が、支え合うようにして立っている。

どちらも血まみれ　雷真はアバラでも折ったのか、背中を丸めて荒い息をついている

一方の夜々は、足に無数の切り傷をこさえていた

「ありがとよ、夜々　おまえのおかげで、命拾いした」

雷真が礼を述べる。夜々は暗い顔でうつむき、ふいっと背を向けた

「これで　わかったでしょう？　夜々は、　こういう　化け物なんです！」

血で汚れた手をにらみ、上ずった声で叫ぶ

るりさんと同じです！　夜々は――簡単に人形を壊します　人間だって、殺せます

貴方だって、こんな化け物――怖いでしょうっ？」

「ああ、怖い」

びくっ、と夜々の肩が強張った

「けどよ、おまえは俺を護ってくれた

「――――」

「心から信頼してる人間だって、刀を持ってりゃ怖いもんだぜ　それと同じことだよ。俺がいつか、いっぱしの人形使いになれば、怖くなくなる」

夜々はゆっくり振り返り、すがるように訊いた。

しゃ　しゃあ　そうなったら　夜々を愛してくれますか？」

「成層圏まで飛ばしたぞ!?　気が早すぎる！」

「また嘘 [illegible] !?　夜々を騙して [illegible] もてあそんで [illegible] っ！」

「嫌な言い方すんな！　おまえの早とちりだろ！」

と突っ込んでから、雷真は照れくさそうに頬をかいた

「愛――はともかく、おまえは命の恩人だ。それは間違いねえ」

「[illegible]　いえ、違います　雷真、言いましたよね？　もし夜々がるりさんに勝てないなら、それは使い手がヘボなんだって」

「ああ、言った」

それはつまり、戦いの結果を決めるのは、人形ではないということです」

――

「[illegible]　これは雷真の力です」

[illegible] と微笑む　夜々が笑うところを、汐は初めて見たような気がした

「あんなふうに　素直に笑うのか [illegible]」

あるいはこの戦いが、二人の心をつないだのかもしれない

[illegible]はかぶりを振って、優しく言った

「おまえがいなけりゃ勝ち目はなかった　やっぱおまえのおかげだ」

「[illegible]　雷真のおかげです」

「おまえだよ」
「意地っ張り！」
「おまえこそ！」
「はいはい　両方とも立派ってことでいいだろ」
思わず笑ってしまいながら、汐は一人に声をかけた
「そんなつまんないことで、何てケンカになるんだよ」
汐！　おまえ、その格好——」
雷真がタンクトップを示す。夜々がちょっとむっとしたような顔をしたのは、たぶん、対抗心だろう　女同士だから、そんなこともわかる
雷真の視線は恥ずかしかったか、汐はもう胸を隠さず、　人に笑いかけた
「ありがとう　きみたちには、それだけ伝えたい」
礼を言う相手は、俺たちじゃねぇだろ？」
雷真がこうべを巡らせ、器具室を見やる
間宮や、その手当てをしているアラタや、ともに戦った仲間たちを。
彼らは裏切り者の汐を責めもせず、今もああして力を貸してくれている
汐は手を振って、大声で言った
「ありがとう！　みんな！」
訓練隊員たちは面食らったようだ。あの汐が、素直に礼を言うとは！

なぜか歓声があがる。そこまで喜ばれると、複雑なものがあるけれど。
思い出したように、夜々がこんなことをつぶやいた
ところで雷真。汐さんが女の子だって、いつ気付いたんですか？」
いつって　」
汐と雷真の視線が合う　一人は同時に目をそらし、同時に真っ赤になった。
わいおい　人とも　何だ、その顔は？　怪しいなあ！」
遠くからアラタが茶化す　場を和ませようという、悪気のない冗談だろうが——
おまえら、山では同じテントだったな　まさか、煩悩の赴くままに　？」
——悪気のない冗談が、破滅的な事態を引き起こすこともあるのだ
ここご、と謎の震動が兵舎を襲い、もろくなっていた外壁が崩れ始めた
地震の発生源——夜々が真っ暗な目で雷真を見る
「雷真　汐さんが女の子だって、どうやって知ったんですか　？」
それ、さっきの質問と同じ　だよなっ？
さっきのは When を訊きました　今度は How を訊いています
英語は俺わかんねえし！　つか、とりあえず落ち着けよ？　何でキレてんのか知らねえか、別にそんな、やましいことは何もなかった　ぞ？」
そらした！　目をそらしました！」
か月半も同じ部屋で寝泊まりしてりゃ、ハカでも気付く　たろ？

「嘘です！　山で一体、何が――はっ、もみしだいて!?」
何かがつながったらしい。『ぼくのときみたいに』という、あの発言か。
どん、っと夜々が足を踏み鳴らす。それで足場が砕け、梁が大きく傾いた。
「おい落ち着け！　俺アバラ折ってるから！　今日はマジで死ぬから！」
しかし、聞かない。夜々は半ベソをかきながら、雷真を追い回し始めた。
「雷真は馬鹿です！　朴念仁ですーっ！」
「何でだよ！　俺が何をした!?」
　人の鬼ごっこを見ながら、沙は声をあげて笑った。
あいつは本当に、女心なんてまるで理解しない。
だからこそ、信じられる気がする。どんなに計算高くても、雷真はこちらの想いを利用したりはしないから。
彼のような男とは――違うから。
「るりさん。貴女はきっと、惚れる男を間違えたよ」
太陽は海面を照らし、無数の輝きを散らしている。そのきらめきのひとつひとつが、いずれ彼らに照らされる誰かの未来に思えて、沙はまぶしさに目を細めた。

Epilogue　そして二人は学び舎へ #2

「とうとう着きましたね――ハオムーンの地、英国に！」
テムズの流れを見下ろし、夜々は橋の上でくるりと回った。
「ここは約束の地で、ついに夜々は雷真のビッグ[illegible]ンを受け入れます」
「やめろ紳士の国で！」
往来の紳士淑女が振り返る。雷真は夜々を抱え込み、彼らに愛想笑いを向けた。
まだ朝もやの霧が残る、帝都ロンドン。
すでにも晴天で、霧の切れ間からやわらかな朝の光が映し出すのは、華やかな近代都市でありながら、古都の面影を色濃く残す街並み。晴れかけた霧の向こうに、壮麗な宮殿や、いかめしい塔がぼんやり浮かび上がっていた。
夜々はうっとりと街並みを眺めている。対照的に、雷真の表情は険しい。
ついに、きた。仇が待つ、英国に。
「さあ、駅へ向かいましょう」
夜々が自分のトランクを持ち上げる。雷真はそれを横から奪い取り、
「駅まで、俺が持つよ」

「あの… 夜々の方が目立ちてすけど…？」
「もちろん知ってるか ここは紳士の国だからな」 通行人の視線が痛い
苦笑して周囲を示す 着飾った貴婦人や、仕事に向かう男たち、警官など、人々は皆、
それとなくこちらに注目していた
夜々は艶やかな着物姿 ジャポニスムの流行は記憶に新しく、大変に目立つ
その上、當真自身も注目を浴びていた 学院の制服を着ているからだ
せめて彼らの印象を悪くしないよう、行動には気をつけなければ
「体面を気にするなんて、らしくないです でも ちょっと 嬉しいです」
夜々は機嫌よく微笑む 丹方なお嬢さん扱いされることなど、滅多にない
朝もやをかきわけ、歩くこと十数分、駅舎に到着する 既に英会話に不自由はないので
駅員に発車時刻とホームを訊き、無事に切符を手に入れた
「リヴァプール行きは――こっちですね」
「まずは硝子さんに連絡しねえと ちょっと待っててくれ」
駅事務室で電話を借りて、伝え聞いた番号にかける
勝手のわからない電話交換に手間取ったものの、ほんの数分で彼女の声がした
「きたわね、坊や」
――硝子だ 當真に先立って渡英し、機巧都市に自前の住居を確保している し これ
と落ち着いた声は、割れがちな回線を通してなお、當真の耳に心地よく響いた

奮い立つものを感じる 居場所すらわからず、倒す方策さえ見つからなかった仇敵――
その首に手が届くところに、もう自分は立っているのだ
「硝子さん、あのさ――ありがとう」
受話器の向こうで、硝子が息を止めたのがわかった
「どうしたの、突然？」
「俺が今日、ここにこうして立っていられるのは、硝子さんのおかげだ
胸が熱くなる あるいは、成人した息子が母親に感謝を伝えるとき、こんな気持ちなの
だろうか あいにく、それを伝えるべき母はもういないが
當真は万感の想いを込めて、受話器の向こうに頭を下げた
「だから、ありがとう」
「お礼を言うのは、まだ早いんじゃない？」
「全部片付けた後で、改めて言うよ
「――それじゃ、私もちょっと、気の早いことを言っておこうかしら
硝子はそっと息を吸い、想いを吐き出すように言った
「ありがとう 夜々のこと 頼むわね」
「ああ――……て、え？」
戸惑う だが、真意をたずねる前に、硝子は電話を切ってしまった
當真はしばし受話器を見つめていたが、駅員に電話を返し、駅事務室を後にした

相棒がとてとてと寄ってくる。
「硝子、何か言ってました？」
「ああ　今さ、硝子さんが――いや
「？」
発車まで少し時間があるな　長旅で疲れたし、どこか　休めるところを――」
夜々はきょろきょろと、もの珍しそうに街を見回している
学院に入ってしまえば、自動人形の移動は厳しく制限される　学生の人形は兵器同然の性能なので、保安上の観点から配慮が必要なのだ
だから、こんなふうに異国を見物をすることなど、夜々にはしばらく許されない。
道中、夜々が熱心にガイドブックを眺めていたことを思い出す。
「ちょっと、そこらをひと回りしてみるか？」
ぱあああっと夜々の表情が輝いた　相棒のこの笑顔には勝てない。雷真は夜々に付き合って、駅周辺を散策した。
近くの商店をたっぷり冷やかし、駅構内に戻ったところで、ヘルが響いた
――って、このヘル、機巧都市行きじゃねえか？　急ごう！
急いで改札を抜ける。思った通り、リヴァプール行き旅客便の発車ベルだった
汽車はゆっくりと動き出す　夜々がぴょんと身軽に乗り込んで、手を出した
「雷真！　早く！

「ああ」
荷物を投げて渡し、ステップに足をかける。
その瞬間、背後に懐かしい気配を感じた
はっとして振り向く。　気のせいだったのか、ホームには駅員の姿しかない
（今の感じ　撫子？）
もちろん、そんなはずはない　撫子は死んだ　殺されたのだ。
だが、確かに感じた　姿さえ、視界の隅にちらと映ったような
蒸気機関が大きなため息をつき、車軸が回転速度を上げていく
腑に落ちないものを感じながら、雷真は夜々に引き上げてもらって、客車に入った。
汽車は快調にロンドン市街を抜け、のどかな田園風景を横切っていく
その力強い疾走を、木陰から眺める者たちがいた
異彩を放つ　団た　一人は長身の若者で、銀の仮面をつけ、学院の礼服を羽織っている
彼の周囲には親衛隊のごとき五人の乙女　乙女はいずれも甲基調のトレスをまとい、顔に薄絹のヴェールを垂らしていた
線路の方で土埃が上がり　列車に勝る速度で、別の乙女が駆けてくる。ほかの乙女たちと同じく、黒いドレス姿。髪は薄い桜色で、人間離れした色だ
乙女は若者の前までくると、さっと一礼して　口を開いた

「報告します、マスター　かの者は、確かにあの列車に乗りました」
「こちらも確認した　随行しているのは雪月花の〈月〉だな」
乙女たちに緊張が走る。使い手が未熟な子どもであろうと、その自動人形を連れている以上、脅威となる可能性がある。
「すぐに仕掛けますか？」
「いや　精神の備えをこそ見たい　気のゆるむ頃、機巧都市で仕掛けよう　――おまえたちは学院の自動人形使用制限に抵触している　一切の痕跡を残すな」
「イエス、マスター　御心のままに」
『御心のままに』
乙女たちの声が重なる　乙女の一人が進み出て、魔術を使った
乙女と青年、七人の姿が一瞬で消え失せる　――空間転移の魔術だ。彼らが消えた後には足跡が残るのみで、ここにいたと断言できるような、確かな証拠は残らない
春のそよ風が朝もやを払い、次第に青空が広がっていった

鉄道の旅は順調だった
つい先ほどまで向かいの座席に姉妹がいたが、食堂車にでも行ったのか、今は空席だ
となりの夜々は前の駅で力尽き、今は雷真の肩に頭をあずけ、寝入っている。
すっかり雷真に懐いている。二年前には考えられなかった光景だ。

雷真は苦笑して、英語の参考書を閉じ、車窓越しの風景に目をやった
日本とはずいぶん風景が違う　日本では必ず山が眺望をさえぎるが、ここはどこまでも草原が広がっている　もちろん水田はなく、小麦畑や牧草地ばかりだ。
改めて、遠い異国の地だと認識する　と同時に　不思議な感慨が込み上げた
父親の勘気を買い、勘当同然で赤羽の家を飛び出したとき、こんな日がくるとは夢にも思わなかった　あのときの雷真は、人形使いになろうとも　軍の密偵になろうとも、学徒[illegible]っとも、まったく思っていなかった。
二年の歳月、とりわけ静岡の兵舎で過ごしたあの日々が胸に去来する
懐かしい顔が次々に浮かぶ　榊中将や、間宮教官や、そして――
「雷真[illegible]」
いつの間に目覚めたのか、夜々がこちらを見上げていた
「ひょっとして、兵舎のことを思い出しているのですか？」
「ああ　よくわかったな」
「[illegible]の考えることなんて、すべてお見通しです♡」
「[illegible]れはちょっと怖いんだが」
「[illegible]の女のことを考えようものなら[illegible]」
「[illegible]じゃ怖いんだが！」
「[illegible]われて、[illegible]」

あの後すぐ、汐と閻宮は兵舎から姿を消した　行方もわからず　生死すら知れない
だが、あの二人のこと、元気でやっている——はずだ
先日、雷真の生存情報がいさなぎ一門に伝わったそうだ。榊中将の徹底的な情報隠蔽にもかかわらず、だ　加賀見の仕業でないとすれば、あの　人の仕業だろう
夜々はそれ以上、兵舎の話をしなかった
何人もの犠牲者を出し、設備にも多大な損害を出した〈朧府蛇蝎の変〉
夜々にとっても、つらい体験だったことは間違いない　夜々は汐のことを言わないし、雷真もるりのことを言わない　たぶん、それが正解だ。
〈いざなぎ一門　か〉
伝え聞いた話では、日輪は今でも雷真を婿にと望んでいるらしい
彼女のことを想うと、申し訳ないような、面映いような、くすぐったい気持ちになる。
とりあえず、日輪を裏切るような真似はすまい、と心に誓う
雷真　早速、よその女のことを考えてる　—
夜々が古井戸のような眼をする　雷真はあわてた
「べ、別に、女のことなんて考えてない　ぞ」
やましいところがないなら、目をそらさず言ってください」
な、何もないぞ？　おまえに隠してることなんて、ひとつもないぞ？」
「わざとらしい……っ」

涙を浮かべて座席にすがりつく　何ともなよやかで、女性らしい仕草だ。出会った当時を思い出し、雷真は急に可笑しくなった
「おまえもだいぶ、変わったな」
夜々はずっと夜々です。出逢った瞬間から、雷真の可愛いお人形です」
「過去を改竄するな。おまえ、俺を殺そうとしたからな？」
今では悩殺しようとします♡」
後ろ髪を両手で持ち上げ、うなじを見せる　悩ましげな流し目に、雷真はどきりとした。
何と言っても花柳斎人形、匂い立つような色気は製作者ゆずりだ
「つーか、何か可愛いお人形だよ　おまえ、毛虫を見るような目で俺を見たろ」
「む、昔の話はやめてください　当時の夜々はちょっと、とんかってたので　っ」
まあ、あの頃より　おまえ、その、　いい女になったよ」
ぼんっと夜々の顔から火が出た　自分の胸を抱き、きゅうと心臓を押さえつける。
いつもと違う反応だ。そんなに照れられては、こちらまで照れてしまう
〈ああ　そうか、このことか〉
先ほど硝子に礼を言われた理由、それがわかった
あの頃、夜々は人間を見下していた　毛嫌いして、拒絶していた
雷真と巡り合わなければ、夜々は今も人間を嫌っていただろう。
夜々は変わった　雷真を信じてくれる。そして、雷真も夜々を信じている

互いの信頼が生み出す力は、あのときの比ではない　それでも——
兄に勝てるかどうかは、わからない
「雷真？　浮かない顔ですね？」
「おまえは浮かれてるな　いっそ浮いてるよな」
「はい　だって、雷真とずっと一緒にいられるんですから　もちろん夜も」
「一緒には寝ない！　結婚もしないからな？」
「雷真……二人の関係を遊びで済ますつもり……っ　うるるっ」
「泣くな！　泣かれるようなことをした覚えはない！」
「本当は、妻じゃなくても……雷真の側にいられるだけで、夜々は幸せなんです」
うつむきがちに漏らした言葉が、思いがけず、雷真の胸を打った
それほどまでに、俺を想ってくれるのか
夜々はふわっと微笑んで、まっすぐ雷真を見つめた
いつか雷真に好きになってもらえるまで、頑張ります
「夜々……」
既成事実を積み重ねて
「馬鹿！　俺の感動を返せ！」
「雷真は馬鹿です　唐変木ですっ　夜々がこんなに想っているのに、……」
「想ってるなら、少しは俺の言うことも聞いてくれよ」

さらりと流す。夜々は不満げに頬をふくらませた
「雷真——夜々が好きって言っても、照れなくなりました」
そりゃ、毎日言われてりゃな
いつからか、夜々はストレートに、体全体で好意を伝えてくるようになった
最初の最初が敵対的だったので、正直、かなり戸惑ったが、慣れとは恐ろしいもので、
今では照れることもなく、挨拶程度に感じてしまう
「俺は慣れたが、まわりは違う　学院についたら、もうベタベタするなよ」
そんな……新婚なのに……
「もう突っ込まないぞ？　いくらおまえでも、学院じゃ配慮してくれるよなっ」
もちろんです　誰が雷真の妻なのか、女狐どもに見せつけてやります
「全力で逆方向だ！　それをやめろ！」
そ……とする　こんな調子で本当に大丈夫だろうか　女子学生の前でこんな言動をされて
は、変態扱いされるのではなかろうか——……に俺が
「ま、魔術師の学校なんて野郎ばっかだろう」、心配ねぇか
たしかにいいんですけど……夜々の感覚器に、ビリビリと嫌な予感が
ぴんぴんと夜々の毛先が立つ　雷真は座席に身を沈め、正面をにらんだ
大体、色恋沙汰にうつつを抜かしてる余裕なんざねーんだ　兄のことを思うと頭が痛い
ぜ
まずは、例のあれに潜り込めるかどうかだが——

こんなの簡単です。寝静まった後、するりと」
「ヘンナトしゃなくて夜会の話な？　あと、俺の寝床には潜り込むなよ！
「寝床の外でも平気です。夜々はもう、すっかり調教られてしまったので」
「嘘つくな！　乗客の皆様がいらん誤解をするだろ！」
夜々は微笑み、真面目な調子で言葉を継いだ
「調教のことは本当です　自分で言うのも何ですか、今の夜々には体術があります　雷真か教えてくれた組み打ち術が」
かつてのように金剛力任せではない　大戦的な格闘術を学んだ今、こと肉弾戦において夜々は無敵　いかなる自動人形の追随も許さないだろう
「雷真との呼吸もぴったりです　あうんです。あはんです」
「後ろのは違う　だが、まあ、そうだな」
コンビネーションにも磨きをかけた　今や、かけ声ひとつかけるだけで、互いの位置や魔力の用途、連携の有無や性質、攻撃パターンまでを指示できる　いざとなれば、雷真が魔力で夜々を強制支配して、直接制御することも可能だ
あの戦いで見つけた課題は、すべて克服した――はずだ。
だが、果たして、兄と同じ高さに到達できているのだろうか？
まったく届いていない気もする。だが　戦術次第で勝てる程度には、追いつけているんじゃないか――という期待もある。

ふと、先ほど感じた懐かしい気配が、窓の外を通り過ぎたような気がした。
「雷真？　どうかしましたか！」
「――妹のことを思い出した　ガキの頃、両国の花火を見たんだよ。人てさ」
「花火――いつか、夜々も雷真と行きたいです」
「行こうぜ　何もかもが終わって、無事に日本に戻れたら」
「はい！」
夜々はにっこりとして、それから、気遣うように言った
「到着まで、少し眠ってください　雷真、ずっと根を詰めてましたし」
「――そうだな　そうするか」
気持ちは昂ぶっていたが、確かに体を休めておきたい　学院に到着すれば、長い戦争の日々が始まるのだ
椅子にもたれる。その頬を、優しいそよ風が撫でていく
レールの継ぎ目が規則正しい音を響かせる　この線路の先、王立機巧学院で自分を待つものは何なのか　まだ見ぬ強敵たちに想いを馳せながら、雷真はそっと目を閉じた

この地にて、夜会の幕は上がる

あとがき

こんにちは、海冬レイジです

アニメから入ったよー、という方は初めまして　原作を執筆している者です

いつもの文庫をまるっと一冊つけちゃうよっ、という無茶めの企画、お楽しみいただけましたでしょうか？（どきどき）

アニメになるまで支えてくれて、さらにアニメも買ってくれた——そういうコアな読者さまに全力で恩返ししたいなと思いまして、

「えへへ特典に長編一冊書きましょうか？　スケジュール余裕ないけどえへへ」

と、だいぶ暴投気味のボールを投げてみたところ、これがどうやら前人未踏！

小説ブックレットがつくものは多々あれど、普段通りのフォーマットで一冊つくというのは前代未聞の試み——だったのですが、発売前にちらほらと先駆者が現れて　おのれアムンセン！　南極点からの帰路、スコット隊長が感じた無念とは比較にもならないと思いますが、英国ゆかりの機巧少女、見事な伏線回収ですね　っ

実は今回、できるだけ大きなことがやりたくて——大げさに言って、「アニメ史に残るようなこと」がやりたかったんです。

原作立ち上げのとき、当時の担当井司さんとプロデューサー新田さんに、大変お世話に

なりました。止司さんの言葉を借りるなら、「一人の映像プロデューサーと一人の編集者が見た小さな夢」こそがマンンドールプロジェクトでした。これは他メディアを積極的に活用し、市場にアピールしていくという試み——もちろん「売れたら」の条件つき——のはしりでありまして、お二人の力なくして機巧少女の成功はありませんでした

その夢の続きなら、ささやかでもいい、歴史に存在を刻みつけたい

その一念で過密スケジュールにねじ込み、現担当の池本さんや、映像関係の皆さまにご負担を強いることになりましたあああ！　すみませんでした

結果的に歴史に名を残すことはできませんでしたが、代わりにハードルを上げました

筆が遅めの海冬でもやれたよ！　後に続く作家さんは大変だね！（←ゲス顔）

こちら、原作11巻の前にネタを作りました。前日譚ゆえ本editでも本編シリーズの進行に問題はありませんが、作者が11番目に書いたお話となります　もちろん普段と同じエネルギーを注ぎ、普段と同じ手順を踏んで、本気のコブシを叩き込みました

また、今回は分量がコストにあまり影響しないということで、普段ならハノサリ捨てるような部分も残してあります。ちょっとふっくら！

そんなわけで、結果的に機巧少女史上、最大ボリュームとなりました

肝心の中身は原作6巻〈夜々と雷真の過去話〉と、1巻冒頭をつなぐエピソードとなります。『ゼロ巻』と呼んで可愛がっていただけたら幸いです。

ここでこぼれ話。6巻のアレ、当初はもっと明確に「ここから夜々はデレ期に突入」と[illegible]ラフトを予定していたのですが、絵師のるろおさんか、
[illegible]レないて、もう一段階くらい余裕もたせましょうよ！」
[illegible]ンスのことを言ってくださいまして——そのタメがここで回収されたわけ
[illegible]として本当によかった！　るろおさん、ありがとうございました！
[illegible]ローグ部分には、これまで機巧少女がたどってきた歴史が詰まっています
[illegible]スは、列車で夜々か寝こけているシーンは、絵が先に存在しました　コミックアライブの企画ページ〈機巧少女倶楽部〉の第一回に、るろおさんが描き下ろしてくださった寝顔イラストがそれです（ほかにも可愛いのいっぱいあるのよ！）

また、ちょこっと入れた「ロントン散策の場面」は、最新（※5月末現在）のアライブ7月号、コミック版オリジナルの番外編を受けて書きました（高城さんが挿してくださるお話は、どれも優しい感じがして大好き！）

すなわち本書は、最初と最新という相反する要素を、始原たる原作1巻冒頭へ収束させ[illegible]現在もっとも新しく、かつ旧い挿話——

いいえ、そんな複雑なことではなくて　要するにですね、こう　いいたいんです

作者ひとりの力では　絶対に書けませんでした！——

ここまでつなげてくださったのは、るろおさん、高城さん、現在は他社にお勤めの初代担当庄司さん、コミック初代担当中村さん、現担当さんたちであり——

プロローグ主題歌をくださったとくPさまとサウンドチーム、編集・映像・営業部の皆さま、校正さま、組版さま、デザイナーさま、直接はお会いしたことのない印刷・流通に携わる大勢の皆さま、全国の書店員さまです

また、映像化に際して、さらにたくさんの味方を得ました。二人の田中プロデューサー、岸山プロデューサー、比嘉プロデューサー、勇壮な音楽、エレクトロな感じが気持ちいい効果、演出、メインディッシュたる画面造りをご担当くださった皆さま、アレめな原作を華麗な脚本にしてくださった柿原さん、竹内さん、とろけるボイスのキャストさまたち、ナベアノこと渡邉教子さん、よしもと監督！

ここではご紹介しきれないくらい、本当にたくさんの力が支えてくださいました

そして誰よりも、応援してくださった貴方のおかげにほかなりません

ここまで本当にありがとうございました　記念碑にはなれなかったけれど、作者の想いをたっぷり込めたこの本を——

お買い上げくださった貴方と、〈あっちんP〉こと故新田達弘さんに捧げます

２０１３年５月　海冬レイジ

ニメ版のシャル嬢が可愛さ３倍増し増して
さているのが辛いってこーゆー事か状態で
のご飯もトウモロコシにして貰いたい。

機巧少女（マシンドール）は傷つかない0
Facing "Shadow Moon"

発行	2013年[illegible]月31日 初版第一刷発行
著者	海冬レイ[illegible]
発行者	[illegible]
編集長	[illegible]
発行所	株式会社KADOKAWA [illegible]
編集	メディアファクトリー
印刷・製本	株式会社廣済堂

©[illegible] 2013
http://www.kadokawa.co.jp/

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内の利用であっても一切認められておりません。

NOT FOR SALE / 非売品

【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】

[illegible]

二次元コードまたはURLより本書に関するアンケートにご協力ください。

http://mfe.jp/jag/

●スマートフォンにも対応しております（一部対応していない機種もございます）。
●お答えいただいた方全員に[illegible]の書籍で使用している画像の無料待ち受けをプレゼント[illegible]
●サイトにアクセスする際や、登録メール送信時にかかる通信費はご負担ください。
●中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから回答してください。

機巧少女は傷つかない0

海冬レイジ

KADOKAWA

メディアファクトリー

NOT FOR SALE／分析用

機巧少女は傷つかない0

機巧魔術――それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。それは今から一年の昔。駆け出しの人形使い赤羽雷真は、一族の復讐を果たすため、相棒の自動人形・夜々と共に厳しい修練を積んでいた。そんなある日、仇である天全の居場所が判明――英国・ヴァルプルギス王立機巧学院。魔術世界の最高学府である。通常の手段では潜り込むこともできないが、幸運にも日本軍が工作員として留学生を送り込むという。かくして雷真は陸軍幼年学校、通称“監獄島”に向かう。密偵となれるのはたった1人の狭き門、おまけに軍内部には花柳斎を狙う策謀が蠢いていて――!?

「0」――それは「1」に繋がる物語。シンフォニック学園バトルアクション！

海冬レイジの本

機巧少女は傷つかない1~12

機巧少女は傷つかない０ Facing "Shadow Moon"

【著者】

海冬レイジ

100% MF文庫J！

見てください俺たちの本気！
ここまでやるかっていう——
そこをやってのけるのが機巧少女チームです。

おかげでみんな寝てません
（ありがとうごめんなさい！）
あなたにお楽しみいただけたら一同ハッピーです！

札幌市在住。1月8日生まれ A型。

【イラストレーター】

るろお

上の人、頑張りすぎだと思うし

カバーイラスト　るろお　装丁　百足屋ユウコ（ムシカゴグラフィクス）